小説 信玄と諏訪姫

中島道子

PHP文庫

征服地の姫君を愛する例は、古今東西珍しくはない。わが国の戦国期では、秀吉と浅井長政の姫、淀殿(茶々姫)の例がある。
その淀殿もそうであったように、諏訪御寮人は信玄を親の仇とこそ思え、愛することはなかっただろう。
それでも子は生まれた。勝頼である。この勝頼に、御寮人は諏訪領主を夢見、託しながら早世した。

本書「あとがき」より

装丁——安彦勝博

小説 信玄と諏訪姫

中島道子

PHP文庫

な32-7

中島道子

小説 信玄と諏訪姫

PHP文庫

743

9784569666839

ISBN4-569-66683-3

C0193 ¥743E

1920193007435

定価：本体743円(税別)

小説 信玄と諏訪姫

中島道子

戦国の雄・武田信玄が甲斐から信濃へと踏み出したとき、真っ先に攻略対象となった諏訪頼重には、美貌の姫がいた。諏訪氏滅亡後に信玄の側室となり、一子・勝頼をもうけるものの、征服者と被征服者の溝は埋まることなく……。信玄と諏訪姫、そして山本勘助三者の関係を軸に、自由な想像力で乱世に生きた男と女の情念の機微、数奇な運命の綾をあざやかに描いた力作長編小説。文庫書き下ろし。

PHP文庫

PHP文庫
中島道子の本

松平春嶽
山内一豊と妻千代

小説 信玄と諏訪姫

中島道子

PHP文庫

中島道子 小説 信玄と諏訪姫 PHP文庫

小説 信玄と諏訪姫

中島道子

PHP文庫

○本表紙図柄＝ロゼッタ・ストーン（大英博物館蔵）
○本表紙デザイン＋紋章＝上田晃郷

小説　信玄と諏訪姫

目次

一. 氷占（ひょうせん） 6
二. 信虎追放 33
三. 諏訪滅亡 51
四. 躑躅ヶ崎館（つつじがさきやかた） 83
五. 側室 117
六. 西沢渓谷 138
七. 勘助の恋 168
八. 信濃烈風 197
九. 鉄砲 221
十. 三代の顔 249
十一. 落花 276
十二. 川中島 304
十三. 付 345
あとがき

挿画——中嶋伸子

一．氷占

（1）

刃で切るような風が襲ってくる。山も水も人もひしと押し黙る。天文十一年（一五四二）年明けの寒気は更に厳しく、天も地も凍てつくばかりだ。

人々は身を寄せ合って囲炉裏の火を囲みながら、一面白く凍りついた諏訪湖の御神渡りの音を待ちこがれていた。

すると二月の半ごろ、氷の軋む音が聞こえてきた。

（春の兆し――）

もう間もなく大音響とともに湖の真ん中に亀裂が生じ、氷塊が天を衝くように盛りあがってくる。

御神渡りである。

御神渡りとは、諏訪上社の守護神、建御名方神が、后である下社の八坂刀売神の許に通う路とされている。

神々の慶事であり、森羅万象、春を告げる現象なのだ。

すると湖上で神事が行われる。神事とは、亀裂の隙間からせりあがった氷塊の筋を、八剣社の神官が検分して、その年の吉凶を占うというものだ。

ところが氷占は、久しくあらわれたことのない大凶という徴であった。

神官たちはことばを失い青ざめた。

「もう一度観直そうではござりませぬか」

「いや、それはできぬ」

「したがこんなことは何十年来、あった例がござりませぬ」

「そうであってもこれは託宣じゃ。受けねばならぬ」

「大祝（宮司）はさぞ肝を抜かれましょう」

「大祝のみか、われらもこの年は覚悟せねばならぬ年のようじゃ」

ともかく神官たちは、今年の氷占を大祝の諏訪頼重の許に奉呈した。

諏訪氏とは「神氏」と称して、全国に広がる五千あまりの諏訪神社の本宮、諏訪上社の大祝を継承する名族である。

二十六歳の頼重はその当主で、諏訪一郡を統領する大名でもある。

諏訪氏の本拠である上原城は、峨々たる永明寺山に築城された山城で、そこからは眼下に諏訪盆地を一望におさめることができ、周囲に富士、八ヶ岳の秀峰を仰ぐ絶景の要害である。

しかし、あまりに高峻なため、館は山麓の上原平に置かれている。

その諏訪館へ、神官たちは寒風に衣の袖を翻しながらやってきた。

常なら館に上がり、氷占を奉呈してから、祝膳につくならわしであったが、今年は何を恐れ憚ってか、奉書を茅野伊豆守に渡すや、ほうほうの体で館の門を出てしまった。

家老、伊豆守は首を傾げながら奉書を戴くと、三方に載せて頼重の前に捧持した。

「おう、きたか」

名門神氏諏訪の血を引く頼重は、濃い眉に鼻筋の通った端正な顔をあげた。

毎春の行事の中で、この氷占ほど期待と不安に満ちたものはない。それが運を自然に委ねる神事だからだ。

とはいっても、ここ二十年来、「大吉」ということこそなかったが、常に「吉」であった。この習いが、頼重にとっていつのまにか当たり前のことのようになっていた。

だから、今、奉書をおもむろに開く頼重の手にも震えはなく、呼吸にも何ら乱れるところはない。

ところがその目に飛び込んできた墨書は、まぎれもなく「大凶」であった。

（うむむ……）

途端、呻くような声をあげた頼重の顔相から赤味が消えた。

「いかがなされました」

伊豆守は両膝を進めて窺った。

四十半ば、温和にして冷静な伊豆守は、一の家老連蓬刑部よりも城中で信頼を受けている。

「何かござりましたか」

頼重の形相から、只事でないことを予見した。

そういえば神官たちの様子もいつもと違ったものがあり、館にも上がらず、逃げるようにして去っていった。

（さては）

伊豆守には察しがついた。頼重の様子からみて、不吉な文字が書かれているのではないかと――。

「拝見 仕りまする」

伊豆守は、恭(うやうや)しく三方に載せられている奉書を開いた。
するとまさに墨書は「大凶」であった。
覚悟はしていたものの、伊豆守もこの「大凶」という文字をこれまで見たことはなかった。
「伊豆、まさかこれは神官たちの見誤りということはないか」
「いや、それはないと存じまする。神官たちも恐れ戦(おのの)いておりました。『占』は二度、三度とやり直すものではござりませぬ」
「うーむ」
頼重は呻くような声をあげた。それから
「この年が大凶というなら、一体何が起こるというのじゃ。さては天変地異でも――」
と不安の目をあげた。
不意を喰らい、伊豆守にも思案はない。
しかし、「大凶」というなら、それなりの予兆もあろうし、構えが必要である。
「地震か、それとも富士の爆発でもあろうか」
神秘の湖といわれる美しい諏訪湖は、太古そうしたことで現出したといわれている。
「まさか、そんな年に当たっていようはずもなかろうに」

頼重は呻いた。

そうした自然現象なら、人智では何とも避け難いことである。

二人は暫く三方の上に載っている「大凶」と大書された墨書に見入ってことばもなかった。

すると伊豆守が沈黙を破った。

「もしかして……」

「もしかして？　何とじゃ」

頼重にはこの沈黙が耐え難かった。

「人災やも」

「人災じゃと？　どのような」

頼重は刺すような視線を投げた。

「戦さでござりますまいか」

「戦さじゃと――戦さなど珍しいことではあるまい」

現に四年前の天文七年（一五三八）、頼重は信州の小笠原長時、伊那の豪族などの連合軍約一万をもって甲斐へ侵攻、韮崎の河原で武田信虎の長子、武田晴信と激戦、三百近い戦死者を出して敗れている。

更に二年後、信虎・晴信父子の率いる八千の騎馬軍が信州の佐久地方に侵攻する

など、武田の脅威は極めて焦眉だ。

「したが伊豆、諏訪と甲斐が鉾を交えることはあるまい」

「そうでござりましょうか」

「信虎殿が、愛し子の姫をわしの所へ嫁ってこられたのじゃから。それに春には子も生まれる」

「だからといって安心はなりますまい」

「戦さを避けるための、いわば人身御供ではないか」

「その通りにはござりまするが、それでも武田父子は信用なりませぬ」

「そちはそれほど武田父子を疑うているか」

「はっ」

あのとき、懸命に武田からの入輿に反対したのは伊豆守であった。

（2）

今から二年前の天文九年（一五四〇）の春であった。甲斐からはるばる使者がやってきた。

既に前触れがあり、何事かと迎え入れるや、意外な申し出を受けた。

「武田家のご息女、禰々姫を諏訪家のご当主頼重殿にご入輿願いたく、武田家の使者として罷り越しました次第にて……」

と恭しく信虎からの書状を差し出した。

使者は信虎の重臣板垣信方であった。

頼重は困惑した。信虎の性情よろしからず、叔父に当たる油川信恵とその弟、岩手縄満を滅ぼし、一族といえども容赦はない。

そのために大井信達ほか一族の反発を受け、石和にあった館を、北方の石水寺に移し、堅固な城を築きあげた。即ち要害山城である。そして麓に躑躅ヶ崎館を建てた。

それはまあよいとして、凶暴、奇態の性情はおさまらず、孕み女の腹を割くなど、それも一人や二人にとどまらず、十三人も嗜虐の犠牲になったという。

そんな信虎が、何をもって諏訪頼重の許へ愛娘を送り込もうとするのか——。

「殿、ご油断はなりませぬ」

伊豆守は強く拒否した。頼重も心中危ぶみ、断る肚であった。

それに、頼重には既に内妻小見ノ方がいる。信州筑摩郡麻績城主、小見甚右エ門の娘はるが頼重の所へきて既に十四年になる。

それに小見ノ方の産んだ瑶姫は、当年十三歳になる。

武田からの一方的な政略縁組みも不快ながら、愛する小見ノ方を思うと、頼重はこの話を断らざるを得ない。

それに武田の禰々姫と、わが娘瑶姫が同じ年齢というのも憚られた。

結局、頼重は武田の使者板垣信方に否を申し渡して帰した。

ところが夏を送り、秋風の渡る頃、慌しく忍びの者が戻ってきた。

「一大事にござりまする」

血相を変えて入ってきた忍びは、伊豆守の許へ走った。

「何があった？」

忍びは余程急いだらしく、息を弾ませている。

「古府中を出た嫁入り輿らしきものが、富士見から茅野へさしかかっています。どうもこちらにやってくる様子にござりまする」

「どこの嫁入り輿じゃ」

「それが武田菱の紋所をつけておりまする」

「武田菱じゃと⁉」

さすがの伊豆守も慌てた。

（もしやしたらここ諏訪ではあるまいか）

この春、武田の使者板垣信方が信虎の姫の入輿を申し入れてきた。

しかし、それは確と断わって返した。それがいきなり、祝奥を仕立てて甲州路をやってきた。それも槍隊を従えての行列だという。

（ということは押し込み輿か）

もしやしたら、一戦に及びかねない強引さである。

急ぎ頼重の部屋に入ると、折しも小見ノ方と談笑中であった。

伊豆守は小見ノ方の白い面を見かねた。

「何じゃ、伊豆。どうした」

この事態に、伊豆守も落ち着いてはいられなかった。

「緊急のことにござりますれば、お方様にはご遠慮願わしゅう」

「そうか」

目配せすると小見ノ方はひっそりと姿を消した。その後ろ姿が心なしか淋しげだ。

「あまりのことに私奴も慌てております。実は武田の祝奥が古府中を出て、目下茅野にさしかかっているとか」

「何、祝奥じゃと。この春、確と断ったではないか。それを一方的に――勝手にせい」

と頼重は一喝した。

「とは仰せられましても、輿の後ろには槍ぶすまの兵が何百も従っているとか、当方の返答次第では一戦に及びかねない有様にて」

「脅しであろう。いかにも武田のやりそうなことじゃ」

「それが脅しどころか戦さにでもなったら」

「そりゃこちらの勝ちよ。そんな百の槍ぶすまなど、こちらの軍で一蹴できるわ」

「それでも武田は後続を用意していると考えられます。よって、今から兵をくり出しまするか」

「いや、待て」

頼重は制した。

「いずれにしてもお覚悟なさるべきかと」

「どのような覚悟じゃ」

頼重は目を怒らせた。

「武田の姫を、そのまま館へお入れなされまするか、それとも兵をもって甲斐へ追い返すかでござりまする」

（うむ……）

この選択は頼重にとって重いものだ。何しろ兵を率いた押し込み輿である。

「信虎殿というご仁は、普通ではないわ」

そこへ次の報せが入ってきた。

「武田の輿が、茅野の多郎左エ門方に降ろされ、兵たちも近くの家々に入りましてござりまする」

「何、多郎左エ門方じゃと――それではわしを謀っての所為ではないか」

多郎左エ門は、伊豆守の所領のうちである。伊豆守が諏訪頼重の家老と知っての所為であろう。

「殿、一戦なされまするか」

伊豆守の心は決まった。己が所領内に腰を据えられたからは、戦って追い出すまでである。

「ま、一晩考える」

と頼重は座を立ってしまった。

それから武田の使者が諏訪館に何度か入り、遂に頼重は武田に押し切られ、十一月二十九日婚儀と決まった。

「許せ、お方」

頼重は戦さの駆け引きに送り込んでくる武田の姫を、やむなく受け容れざるを得なくなった事情を吐露した。

「わしの心はそなたのみぞ。そして愛しい瑶姫」

頼重は吐くように言うと、小見ノ方を力いっぱい抱きすくめた。

「いかなることがあってもここにいてくれ。諏訪から離れるでない」

と口説くように言ったが、小見ノ方の決心は変わらなかった。

かくなる上は、娘瑶姫に母の意志を告げるほかはない。その夜、小見ノ方は瑶姫を己が部屋に呼んだ。

すらりと伸びてきた身丈に、黒い髪の毛を束ねた瑶姫を、わが娘ながら美しくなってきたと思う。

人々は瑶姫の容貌が小見ノ方に似てきたとも言うが、品のよさは夫頼重のものであろう。

その娘に、今から別れを告げなければならないと思うと、胸が責められる。

「瑶姫」

「はい」

「そなた今、幾つじゃ」

「十三歳です」

「そうじゃのう。母がここへ嫁たのは十四歳であったわ」

瑶姫は妙な気がした。今になってどうしてそんな年齢のことをわざわざ言い出す

のであろうか……。

「それで？」

瑶姫は目を瞬いた。

「母が麻績（信州筑摩郡）からここへ嫁いできたのが十四歳じゃったゆえ、そなたも一人になったとて、分別できる年齢じゃと思うて」

「わたしが一人になるってどういうことです？」

瑶姫の目が俄に険しくなった。

「そなたにも薄々は聞こえていたと思うが、ここへ甲斐の武田から新しく奥方さまが入られることになった。それで母はここから出ていかねばならぬ」

それはあまりに唐突で、吃驚するより悲し過ぎる。

「母さまがここから出ていかれる？　そして別の女がここへ入ってくるって!?」

「そうじゃ」

「そんなことを、どうして父上さまが」

「諏訪のためじゃ」

「そんなことがどうして諏訪のためなどと」

「実は――」

と小見ノ方はこの春、武田の使者が入ってきたことを告げた。

「甲斐の武田信虎殿は、それは恐ろしいお人らしい。その信虎殿に睨まれては、どうにもならぬ」

「だからといって、父上はこれまで幾つも戦さをしてこられたではありませぬか。武田とも甲斐で戦さをなされました」

「したがその挙句は敗けじゃった。それでもここがやられることはなかったが、武田がその気で攻めてきたらば、城はおろか、諏訪が武田に奪られることになるやもしれぬ。そうした戦さを避けるため、信虎殿は姫をここへ嫁ると言ってこられたのじゃ」

本来ならばこの瑶姫が、武田の嫡男晴信（後の信玄）の側室にと要請される可能性がないとはいえない。

ところが手駒（娘）の多い信虎は、自分の方から三女を嫁りつけるという手段をとったのである。

「それで父上さまは」

「お断りなされました」

「だのにどうして？」

瑶姫は膝をのりだした。

「武田の姫の輿が古府中を出て、茅野にとどまり、お父上さまとの強談判の末、と

うとうここに入られ、三日後、祝言をあげられることになった」
「まあ、なんと無体な」
瑶姫は目を尖らせた。
「よってわたしは明日、ここを発たねばならぬ」
「……」
「本心、わたしはそなたと共にここにいたいのはやまやまじゃが、姫の年齢がそなたと同じと聞いては、親のような年齢のわたしがここにとどまるわけにはゆかぬ」
そういうと小見ノ方は目頭に掌をあてた。
「まあ、その女が、わたしと同じ年齢ですと？」
「そうじゃ」
途端、瑶姫の声が響いた。
「嫌じゃ。そんな女をわたしは母とは呼べぬ。わたしも母上と一緒にここを出ます」
と瑶姫は眼尻をあげて小見ノ方ににじり寄ると、その膝に顔を俯した。
「瑶――」
膝に俯した瑶姫の肩を抱きながら、二人は暫し無念の涙にくれた。その娘の躰を放したのは小見ノ方のほうであった。

「暫しの間じゃ、そなたがここにいるのも。いずれ近いうちに、そなたもここを出ることになろう」
「どういうことです？」
「どこかにそなたも嫁ぐことになろう。わたしがここへ嫁たのもそなたぐらいの年齢じゃったゆえ」
そのとき瑶姫は一人の若者の顔を浮かべた。
（茅野紳四郎――）
家老茅野伊豆守の四男である。紳四郎重久は二年前まで頼重の小姓をつとめていた。彼が十四歳まで前髪をつけていたのは、頼重の寵を受けていたからである。
小姓の中で、特に紳四郎は早くから和漢の読みと武術を習得させられた。
三年前の元服のときは、頼重が手ずから烏帽子を授け、重久の一字は頼重の字を与えられたものだった。
その紳四郎は、瑶姫の守りもつとめることになっていた。
だから三歳違いの二人は、まるで兄妹のように育った。字の読み書きも、どうかすると紳四郎から習い、女ながら馬場で乗馬まで習った。
黒髪が房々と肩に波うつこの頃、瑶姫の楽しみは、氷の解けた湖の畔を二人で駆け通すことであった。

だから諏訪の人々は、この一対の若い男女の乗馬姿に、格別な親愛の目を投げていた。

（もしかしたら、わたしは紳四郎の……）

母に去られる瑶姫のたった一つの心の拠り所である。

そして紳四郎もまた、秘かな恋に目ざめつつあった。

（3）

その年（天文九年）の十一月の晦、武田信虎の三女禰々姫の輿が寒風をついて諏訪館の黒門をくぐって入ってきた。

紋を染め抜いた幔幕が張られ、篝火が赤々と夜空を焦がしている。

花嫁の輿が入ってきたというのに、迎える諏訪館の面々の顔はいずれも固く、祝意は感じられない。

何しろ一方的な押し入り花嫁ということもあるが、それよりもものものしい軍勢のような付き人がつづいてきているからだ。

だから、赤々と燃える篝火に映し出された双方の男たちの顔には、祝意どころか、猜疑と敵意さえみられる。

（こんな嫁入りなど見たこともない）

双方、そうした思いで降ろされた輿の中から、やおら現われ出る花嫁の姿を待っていた。

館の大玄関で、板垣信方が口上を述べると、茅野伊豆守が顔を固くしてそれに応じた。

すると輿に従ってきた女房の中の二人が、駆け寄って輿の戸口に寄り、やおら戸を引き、履物を並べた。

とり囲むようにして見つめる男たちは、今や遅しと花嫁の姿を捉えようとするが、なかなか現われない。

焦れたか、女房の一人が、

「姫さま」

と声をかけて促した。それでもまだ現われないところをみると、拗ねてでもいるのであろうか。

女房が再び

「姫さま、お降り下されませ」

と促した。すると白い綿帽子が先に見え、両方から手を取られて花嫁がどうやら姿を現わした。

その全身白い姿に、男たちは一様に驚いた。というのは、花嫁姿は見慣れているとはいえ、あまりに小さく、か弱く見えたからだ。

（これが信虎殿の姫か――）

「鬼」の異名を持つ信虎の娘なれば、さぞ信虎殿に似ているのではなかろうかと、好奇と畏れの入り混じった思いで見つめた。

ところが白無垢の打ち掛け姿ながら、これだけ身丈が小さいとなると、まるで子供のようだ。そんな期待はずれが、一様にあった。

最も身につまされたのは頼重だった。

祝言の席で初めて見た禰々姫の小ささに、頼重は呆気にとられた。

信虎奴、不出来の娘をわしに押しつけよったか――。

本来なら三晩も四晩もかけて盛り上がる婚儀が、一晩で終えたのも頼重の不興の表われであった。

そして初夜、まるで娘を抱くような気分で、頼重の体は燃えなかった。

つくづくと小見ノ方が恋われる。体も姿も美しく、頼重の心身を満足させてくれた。

（これからわしはこの女と付れ添わねばならぬか）

信虎にしてやられたと思う。

（信虎奴、今頃笑っているのでは……）

そうした悔しさを秘めながら、諏訪大社へ婚儀の報告を行わなければならない。

頼重は内心忸怩たる思いである。

愛する小見ノ方のときは、つまりは内妻ということで表だった行事はやらなかった。

しかし、甲斐武田家からの入輿となれば、大社での行事のみか、諏訪の主立ち衆を集めて披露も行わなければならない。

そこを見越してか、甲斐からは想像以上の使臣や参列者の数が送りこまれてきた。

そうなるとこちらも、いやでも数をふやさなければならない。

心に染まぬ婚儀に、人と物を集めざるを得ないことで、頼重は更に気が重くなった。

とはいえ、この諏訪大社は頼重の掌中にあり、いかに名門武田氏をもってしても、この域は越えられない。

ともかく頼重は、諏訪一族と諏訪人に、心の裡とは裏腹に初めて盛大な婚儀を披露したのである。

話は変わってこちらは瑶姫。父の正室となり、義母となった禰々ノ方に、まだ挨拶をしていない。

「いつまでもお拗ねにならないで、奥方さまにご挨拶をなされませ」

と乳母真志野から強く促されても、頑なに顔を背ける。

祝言の夜、離れているこちらの部屋にまで、歌舞音曲が聞こえてきた。耳を塞ぎたくなる音であった。

（父上は今、どんなお気持か――そして麻績に戻られた母上は……）

引き裂かれた明暗に、瑶姫の心はたぎるばかりだ。だから、いかに乳母から勧められても、新しく入ってきた武田の義母の前に出ようとしない。

それればかりか、父にも会いたくなかった。

（わたしの母上さまを追い出して、若い女を迎えられた）

今頃父上は、禰々さまとさぞ、楽しくやっておられるのだろう。

それにひきかえ、母上は一人で今頃何を思い、何をしておられるのか――。

それを思うと、新しく入ってきた女の前へは出たくない。

「姫さま、時機というものがございます。それをはずされると気不味くなりますよ」

といかに口説かれても、正室となった禰々ノ方の所に、挨拶に出ようとしなかった。

そしてはや、年が明け、天文十年（一五四一）の正月を迎えた。

「今度こそご挨拶を――でないと、姫さまの負けになりますよ」

「負けじゃと？」

そのことばが気に障る。

「はい」

「何が負けじゃ」

「事情はともあれ、人というものはけじめをつけることが大事でございます。たとえお気に召さずとも、お父上さまの奥方になられたお方に、ご挨拶もおできにならぬとあれば、狂れた姫とみられましょう。諏訪の姫らしく、誇りをもって奥方さまに立派にご挨拶を」

（そうか、諏訪の誇りをもってか）

真志野のことばに動かされた。

母の在るべき座に今は別の女がいる。しかもそれは、仮想敵国とみなされる武田の女だ。それにわたしと同じ年。

敵意と歯痒さが、今も心底沸々としている。それでもその気になったのは、諏訪

の誇りということばを耳にしたからである。
（あの女の前に、わたしは胸を張って）
そうと決して瑶姫は立ち上がった。そして部屋の戸に手をかけた。
「今からいずれに？」
「あの女の所へ。行けと言ったではないか」
「なら、まずお召し物をお着替えあそばして」
「よいのじゃ、これで」
瑶姫は反発まじりに廊下へ出た。そして小見ノ方の部屋を指して行くと、そちらの廊下から、一群の女たちがこちらに向いてやってくる。
ハッとして思わず身を隠そうとした。するとゆっくり磨り足でやってきた一群の前に立つ老女が、
「こちらの方でございます」
と廊下を曲がった。その老女には覚えがある。しかし、ほかは覚えがない。
（ということは、新しく入った者たち）
甲斐の女たちであろう。敵意の目で見ていると、侍女に囲まれた中に、小柄な女が見事な打ち掛けを着ている。
（あんな豪奢な打ち掛けを着ているからは）

襴々であろう。
瑶姫は廊下の角に身を潜めながら喰い入るように見つめた。
（それにしても何という繊弱さであろう）
身丈も低く、細く、顔にも精彩はなく、老女に行き先を告げられて狼狽えている。
「彼女か？」
低声で真志野に訊くと、
「はい、どこかへお出かけのご様子ですね」
と教えてくれた。
（彼女が――）
瑶姫の体の中から、敵意と抵抗の感情が解けていくのがわかった。
いかにも儚気で、とても仮想敵国に躍り込んできた女とは思えない。
引き返してきた瑶姫に真志野は言った。
「思わぬ所で、奥方さまのお姿を瞥見なさりましたが、いかがでございました？」
真志野は、瑶姫が考えているほど抵抗を覚えるような相手ではないと言いたいのだ。
「知らなかった」

あんなに淋し気な女だとは思いもよらなかった。
（よっぽど母上の方が美しい）
小見ノ方を失って、あんなに頼りなくか細い女を迎えねばならなかった父の苦衷を察した。それにしても、
（父上や母上もさることながら、あるいは禰々ノ方さまも犠牲者かもしれぬ）
でなければ、あんなに淋し気な筈はない。
ということは、これ全て武田信虎の仕業である。
（憎きは禰々ノ方さまではなく、武田信虎――）

二．信虎追放

（1）

甲斐武田の姫を娶ったとはいえ、武田の重圧が弱まったわけではない。いや、却って強まってきている。
禰々ノ方の入輿に付いてきた女たちの数も多く、諏訪館の中は安心ならない。
こうして頼重を苦しめる甲斐の武田信虎とはどんな男か。
明応三年（一四九四）の生まれというからこの年四十八歳。まだまだ元気盛りの壮年である。頭の鉢の開いた容貌魁偉、眼光炯々として人を圧し、先述の如く性情は極めて荒く猛々しい。
この信虎、二十年前から駿河の今川と戦い、関東管領上杉憲房や相模の北条とも交戦してきた。

そして天文元年（一五三二）、甲斐一国を掌握してからは、今川氏に娘を嫁るなどして緊張状態を緩和しながらも、征服欲はなおおさまらない。

それに二、三年前頃から、今度はしきりと信州へ攻略の目を向けている。

寒気の解けた五月、その信虎が小県郡の海野攻めを開始し、早速頼重の所へ加勢連合を求めてきた。

頼重としては気が重かったが、姻族となった関係から、やむなく形ばかりの兵を送った。

すると海野棟綱は諦めたのか、さしたる防戦もなく開城し、信虎は大満悦で甲斐へ向かって凱旋の途についた。

暦は既に六月、頼重の本城、上原城を吹き渡る風が心地よい。

と、その日、一人の男が麓から息せき切って坂道を登ってきた。

そして門を通ると、庭伝いに頼重の居室の近くで声をあげた。

「荒木兵助、緊急、殿にお知らせしたく、戻りましてござります」

荒木兵助二十五歳、頼重というより伊豆守が海野に放っていた忍びの者である。

近侍につづいて伊豆守が縁側に現われた。

「海野攻めは終わったのであろう」

伊豆守はそのことなら既に承知している。

「ところが思いがけないことが出来いたしましてござります」

「思いがけないことじゃと？　何が起こった」

伊豆守は突っ立って見下ろしながら注視した。

「一大事にござりまする」

「なんと」

滅多に動揺を見せない伊豆守だが、この忠実な兵助の注進に聞き入った。

「何があった？」

「はっ」

兵助は大きく息を吐きながら言った。

「甲斐の信虎殿が、ご嫡男の晴信殿の一味によって捕らえられ、古府中への凱旋まならぬことになりましてござります」

「何じゃと！　信虎殿が晴信殿によって捕らえられたとは異なことを申すものじゃな」

「はっ」

「上がれ。殿の前で子細を」

埃を払った兵助が、やおら入口に手をつくと、

「近う。そこでは聞こえぬ」
頼重の声に、兵助は躙るようにして一間ほど手前で平伏した。
「信虎殿が晴信殿の一味によって捕らえられたとはどういうことじゃ」
このとき晴信二十一歳。父信虎に従って海野攻めに参陣した。ところが凱旋の途中で父を捕らえたというのである。
「まことか、それは」
伊豆守は念を押した。
「はっ。間違いござりませぬ」
いかに戦国の世とはいえ、父子で戦場に赴きながら、勝利の凱旋の途次、息子が父を捕らえるとは尋常ではない。
たしかに信虎の性行はこれまで近隣にも聞こえていたが、息子がその父を捕らえたということは、余程のことがあったのだろう。
「それが真実ならば、晴信殿はなかなかの人物ということになりまするなあ」
すると頼重も、
「その通りじゃ」
すれば晴信によって癌が取り除かれた思いだ。
「して信虎殿はいずれに？」

あの信虎が果たしておとなしく息子の言いなりになるのだろうか。
「目下のところ詳しいことはわかりませぬが、いずれ次の報せがくると思いまする」
そう言い残して兵助は出ていった。
明くる日、次の忍びがやってきた。それによると、六月十四日の白昼、堂々凱旋の信虎が、途中思わぬ事態になったという。
というのは、本来なら野辺山原を越えて高根に入れば、須玉川から釜無川の本流沿いに古府中への道をとる。古府中までは八里の道程である。
そこでいきなり信虎は三百ばかりの赤備えの兵の槍ぶすまにとり囲まれた。「赤備え」とは具足・指物・馬具・鐙などをすべて赤色にした軍勢のことで、晴信の初陣に当たり、板垣信方が考案し、飯富虎昌が編制した若手晴信軍団のことである。
「何の真似じゃ、無礼であろう！」
信虎は一喝しながらも、まだ事の重大さに気づいていなかった。
ところが一斉に槍を突きつけている兵らの目が戯れではない。
「甲斐のお館に向かってこれはどういうことじゃ。早々に元の位置につけっ、躑躅ケ崎は近いぞ」

信虎は不快になった。それでもまだ半信半疑、酔狂ぐらいにしか思っていない。
そこで、
「どけどけ、行くぞ」
と馬首を立てると、一斉に槍ぶすまで先を遮ぎられた。そこで初めて只事ではないと気づいた。すると中から、
「これは大膳大夫（晴信）様のお指図にござります」
という声があがった。
「その声は（板垣）信方じゃな。おぬし。いつから倅奴の」
この重臣板垣信方の声に、信虎はようやく事の重大さに気づいた。
（ということは、わしを追放する気か――）
幾つもの裏切りや謀略を見、己もそれを繰り返してきたが、まさか征戦の帰途、息子からこんな仕打ちを受けようとは思いもしなかった。
「晴信、出てこい」
信虎は怒鳴った。
「晴信様には疾くに古府中に帰られましてございます」
（さては嵌められたか！）
戦国の世、親が子を、あるいは子が親を、また兄弟が相争うことは珍しいことではない。

しかし、まさか自分があの息子から、こんな形で追われることになろうとは思いもよらない。
（そこまでわしを恨んでいたか）
瞬時、これまでのことが走馬灯のように脳裏を駆けめぐった。
たしかに自分は、嫡男晴信より、次男信繁の方を寵愛してきた。
それは晴信が自分に似ているからだ。つまりは自分の好ましくないところを、そのまま承けついでいる晴信が疎ましかった。
それにひきかえ、三つ違いの次男信繁は、妻に似て容姿も端麗で、性もおとなしい。
なぜか信虎は、自分の丸写しのような晴信より、この次男が愛しかった。
そうした分け隔てを、晴信は幼い頃から感じていたようだ。
信虎の脳裏に今でも鮮やかに残っているのは、「鬼鹿毛」という名馬を、当時まだ元服前の晴信が欲しがったときのことだ。
信虎は、元服の折に、武田家重代の鎧（御旗、楯無）と太刀と短刀とともにくれてやるまで待てと言い送った。
ところがそれに答えて晴信は、元服の前に馬を頂きたいと言い寄越した。

（思い上がり奴）

信虎ははねつけた。馬一頭ぐらいのことで、大人気ないとは思ったが、とかく晴信の言辞や思考には愛を覚えなかった。

そうした恨みから、こうした挙に出たのであろうか――。

いずれにしても、戦さからの帰途、息子から追われるとは思いもよらない。

「甘利（虎泰）―飯富（虎昌）―小幡（虎盛）はどこじゃ！」

武田の三虎と呼ばれる三人は、いずれも信虎から「虎」の一字を拝賜した勇猛忠義の士である。

信虎は三人の名を呼んだ。ところが三人は現われない。

（さては退けたな）

たとえ息子晴信が何を画そうと、この三人が信虎を裏切ることはないと確信している。

ということは、晴信か信方あたりの仕業であろう。

途端、信虎は単騎、己が槍を振りかざして、槍ぶすまの武田軍を払いのけて走ろうとした。

そのとき前方に、軍旗をはためかせてくる騎馬の一団が目に入った。

（あれは今川――）

こんなところへ今川軍が何をしに……。

（どういうことじゃ）

信虎は二度驚愕し、出端を挫かれて佇立した。兵の数は百騎ぐらいであろうか。

一方、今川軍は信虎とわかるや、ゆっくりと並足で近づいてきた。

「どういうことじゃ」

信虎は一喝した。するとそこへ板垣信方が現われた。そして除にことばを放った。

「今川家からのお迎えにござります」

「今川家からじゃと？　おぬし、一体何を策した」

「殿にお休みいただこうと……」

「わしはまだそんなに老い耄れてはおらぬ。そちの方が遙かに老い耄れじゃ」

「はっ、したが殿には暫くお休みいただこうと」

「わしが休んで何とする」

「晴信様がおわします」

「そちが仕組んだのか、晴信が仕組んだのか、どっちじゃ」

「武田家のためにござります。殿にはごゆるりと今川館にてお休みを」

（ということは、わしを売るつもりではなさそうじゃ）

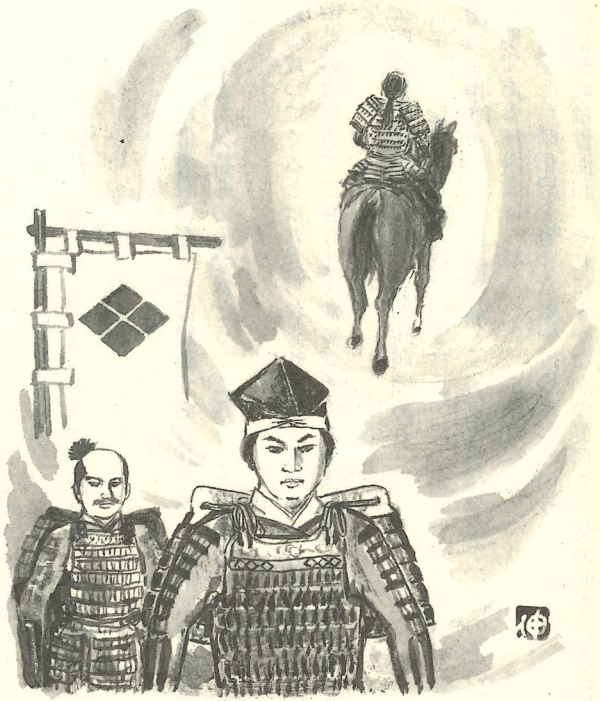
駿府の今川館には長女が嫁いでいる。今川義元の正室である。
それは信方が懸命に動いて、今川と武田の楔としたものだ。
（その娘の許へ行けというのか）
信虎は思わず自虐の薄ら笑いを浮かべた。
（晴信奴、信方とかたらって、そこまで策を弄したか）
「それでは殿」
今川軍は用意してきた輿を差し出した。
（これではまるで裸の主じゃ）
観念した信虎は、今川の輿に移らざるを得なかった。
（奇態な敗けじゃ）

（2）

この椿事は忽ちのうちに上原城にもたらされた。
「あの信虎殿が凱旋の帰りに晴信殿によって追われたなど、考えられぬことじゃ」
頼重が脇息に手を置きながら言った。
「親不孝にござりまする」

白毛頭の近侍、原総右エ門が応じた。
「したが、あまりにうまく出来過ぎているではないか」
「それが、聞こえてくるところによりまするとと、大分前から策を練っていたようでござりまする」
と口を挟んだのは伊豆守である。
「そうであろう。してその策に動いたのは？」
「板垣信方」
「やはり信方――」
（禰々のごり押しもそうであった）
当年とって五十二歳の信方は、武田きっての謀将といわれている。
大永元年（一五二一）といえば、晴信が生まれた年だが、この年武田は今川の大軍を迎撃した。このとき、武田存亡の危機にあったところを、奇襲戦法で勝利に導いたのが信方であった。
そうした智謀家の信方は、それから晴信の傅役となり、その後の今川との関係改善に奔走し、天文六年（一五三七）、信虎の長女を今川義元の正室に嫁るなどの功績をあげている。
「全てはあの信方の仕組んだ術と聞こえております」

「なるほど」
「したがそこまでうまくいくとは……。いかに信方とはいえ、凱旋の帰りじゃ。信虎殿の直臣たちがそれを阻止するはずじゃがなあ。それが一人もいなかったとは、あまりに出来過ぎていはしないか」
「それほど武田のうちで、信虎殿の威信が堕ちているということでは。よって、次なる晴信殿への期待があったのではござりますまいか。それを読みとっての信方の動き。どうやら晴信殿擁立の時期を考えてのことかと」
「なるほど、それほど策が動き、これほどうまく事が運んだとは。それにしても信虎殿としたことが、よくぞ無抵抗で駿河へ行かれたものよ」
「信方から引導を渡されたとき、諦めたのでござりましょう」
「そうなると晴信殿は、いい智恵袋を持ったものじゃなあ」
「はい」
開けた戸の向こうに八ヶ岳の美しい稜線が見え、心地よい薫風が流れてくる。
「これで諏訪も一安心でござりまするなあ」
と言ったのは総右エ門である。
「そうであろうか」
頼重は伊豆守の顔を見た。



「晴信殿の器量はまだ不明にござりまする。したが、恐るべきは信方――」
「……」
「今度の仕掛人が信方であり、晴信殿の傅役となれば、何を考えているや油断なりませぬ」
「うむ」
「ところで禰々ノ方様は信虎殿にとっては娘御であられるが、晴信には妹御でござりまする。そうなると、気持ちの上ではどうでござりましょう」
「うーむ」
「可愛い妹の城へ攻ってくるとは考えられませぬが。それにお方様を強引にこちらに押しつけてきたのは信方でござりますから。そのお方様を泣かすようなことはいたしますまい」
　これは総右エ門の極めて常識的な希望的観測である。
「したが晴信というご仁はどんな人物かな？」
　信虎については、甲斐のみか、四隣に聞こえた梟雄だったが、その子の晴信についてはまだ不明である。
「信虎殿が次子を愛し、晴信殿を嫌ったというのはどういうことかな」
「なんでも弟の信繁殿は性温和、それになかなかの美形で、父の愛を一人占めしていたそうでござりまするよ」
　総右エ門はここぞとばかりにそうした噂を披露した。
「ほう、そうなると兄の晴信殿は、跡目のことを常に案じていたわけか」
　頼重は眼を開いて総右エ門を凝視した。
「そういうことでござりましょう。むしろ兄としては一大事にござりまする」
「そうなると、弟を除くか、父を除くかじゃな」
「御意にござります」
「となると、板垣信方としては動かざるを得なかった」
「油断なりませぬ」
「うむ……」
　そのとき八ヶ岳の上に、薄い雲がかかった。晴れもよし、薄雲をまとうもよし、三人は暫し八ヶ岳の山脈に目を奪われていた。と、
「山本勘助なる者のことを伊豆守はご存知でござろうか」
　と総右エ門がいきなりそういう男の名を口にした。
「ということは、総右エ門殿も既に知っておられましたか」
「ああ、近頃耳にいたしたが、どうも得体の知れぬ者とか。それを躑躅ヶ崎館に引いてきたのが、信方らしゅうござる」

「そのようで」

頼重の前で山本勘助という名が出たのはこれが初めてである。

総右エ門が、得体の知れぬと言ったのは、風聞ではあるが、まず色の黒い短軀の上に、片眼で片足が不自由、歩行はかなり脚を引くようだ。

そんな姿ながら、眼光鋭く、歩行も並の人以上の速さで、林の中といい渓川渡りといい、跳ぶように動くという。

そうした異形異相にもかかわらず、剣は達者、それになかなかの智謀家だという。

そういう男を、板垣信方が何度も駿府へ足を運んで、駿府から甲斐へ引き抜き、晴信に目通りさせて、古府中のさる屋敷に住まわせているというのだ。

さて、その勘助についてだが、生まれは三河、十二歳頃に三河牛久保の大林家に養子となり、そこで勘助晴幸としたようだ。

二十歳の頃、武者修行の旅に出て、近畿から西国へと遍歴したという。

彼の隻眼と左足の不自由は、播磨で剣客、橋本柳巴と対決した折、数十人の門弟に追われて闘い、片眼と左足に重傷を負ったものである。

ともかく、非常な修羅場をくぐりぬけ、摂津で楠流の兵法を究めた。

三十五歳で牛久保へ戻り、養家を去った勘助は、駿府の今川家の重臣、庵原家

に寄寓することになった。

天文五年（一五三六）頃、今川家中では跡目を継いだ義元と、庶兄との間で軋轢が生じた。

その頃甲斐は、信州侵略のため、今川との和平締結が必要であった。そこで折衝役となったのが板垣信方である。

信方は何度も駿府へやってきた。折衝の相手は今川の重臣庵原安房守である。

その折、奇しくもそこに寄寓していた奇妙な男、山本勘助と接触することになった。

風貌尋常ならず、一見しただけで人を遠ざけるが、そこは海千山千の信方、そんな勘助に非凡の才を嗅ぎつけた。

そこで庵原宅を訪ねると、必ず勘助と話をするようになった。

するとさすが諸国を遍歴しただけに、地理民情に明るく、兵法についても詳しい。つまり、智謀の質があると見た。

それにまた引き込まれたのは、築城の話である。

（見かけによらぬ才物じゃ）

信方の駿府通いは、武田と今川の婚姻のためだが、思わぬ副産物を得たようだ。

刀槍の達者はいくらもいる。しかし、勘助のような策謀や築城の知識を持ってい

る者は少ない。

それに奴の風体と忍びのような速さ。

（使える――）

と判断した信方は、嫁入りの話を決めると、勘助をひそかに連れ出し、晴信にこっそりと謁見させた。

結果、晴信は喜び、二百貫をもって召しかかえることになり、勘助は駿府を去って古府中へやってきたのである。

以来、信方に付き、今回の信虎追放には、信方に代わって何度も駿府を往復し、信虎の引き取りを実現させたというのが裏事情である。

こうして信虎追放の一件は落着したが、次なる武田の信州侵略の鉾先をどこに向けるか、それは晴信、信方、勘助の三者で密かに練られていた。

三．諏訪滅亡

（1）

天文十一年（一五四二）といえば、諏訪御神渡りの「氷占」大凶の年であった。

ところがそれを忘れさせたのは四月の寅王丸の誕生である。

十五歳のまだ蕾のような躰で禰々ノ方が一子を生んでくれた。それも和子（男児）である。

「めでたい。めでたい」

と頼重は前後を忘れて喜んだ。たしかにこれは慶事で、諏訪と脅威の甲斐武田とを結ぶ紐帯となり得る子の誕生である。

早速、頼重は甲斐へ使者を送り、諏訪大社で盛大な祝事を行った。

その余韻さめやらぬ五月、茅野伊豆守は二人の忍びから愕然とする報せを受け

た。

「高遠にしきりと武田の使者が出入りしております」

「して武田の使者は？」

「なんでも春日源五郎と山本勘助とかいう名の男にございます」

「そうか。では一休みしてから更に探索をつづけよ」

伊豆守は唸った。こちらが和子誕生に現をぬかしている間に、武田はいよいよこちらに牙を向ける工作をしているようだ。

（その手始めが高遠か）

高遠城主頼継は、諏訪一族である。ところがこの頼継、前々から本家乗っ取りを考え、諏訪上社の禰宜（神職）矢島満清と下社の金刺一党にひそかに気脈を通じていた。

それを武田が見逃すはずはない。

「好機にござりまする――」

と、まず勘助がそれを信方に述べると、信方は早速晴信に告げた。

父信虎を見事に追放し、躑躅ヶ崎館の主座におさまった晴信今や二十二歳。

強持ての父の面輪と、美形の母の半々を容けた容貌。

とにかく猛虎のように走り廻る父の後に尾いてきたため、信虎の弱点や非も、嫌というほど見てきている。

それだけに信虎と違うものがなければという自覚を持っている。でなければ父を追放した意味がない。

その父のやり残した仕事の手始めが諏訪攻略である。

「禰々ノ方様をいかようになされまするか」

晴信の妹である。まだ女体も熟しきらぬまま、父によって諏訪に嫁られた禰々が、いつのまにか和子を生んだという。

（そんなに頼重に愛されていたか）

頼重を憎いとは思わぬが、晴信としては、甲斐二十万石程度でおさまるわけにはいかない。

そこでこれ以上の領土を拡げようと思えば、北を目指さざるを得ない。でなければ、南の北条や今川と比肩できない。

ゆえに、父信虎もそうであったように、北への侵略は、甲斐武田の命題なのだ。

「で、いつ頃？」

諏訪の厳しい寒気の解けるのは五月である。

「ま、和子誕生で諏訪はゆるんでいよう。それに田の植え付けが終わる六月半ば」

そう言い切るときの晴信の顔には、信虎にない冷徹さがある。

（晴信殿は、必ずや父上を超えられる）

この見通しが信方を奮起させる。

「したが今度はお出ましいただかずとも」

妹の城を攻めるのは忍び難かろうという配慮である。

「そうか」

「して、落城の折、禰々ノ方様をいかようにいたしたら」

「うむ……」

晴信はそのとき信虎のことを想った。

（父上ならなんとされよう）

禰々とて喜んで嫁ったわけではない。諏訪の寒さと、いわば敵中に身を置く辛さを十分に味わわされているはずだ。

そんな禰々を、城ともども葬るわけにはゆかぬ。

「もしものときは、彼女だけ拾って連れ帰れ」

「はっ、承知いたしました」

六月二十日、釜無川沿いに北上して、御射山に陣を布いていた武田軍二千の動きを偵察ていた忍びが上原城に戻ってきた。

と、軌を一にしたように、杖突峠から急ぎ戻ってきた忍びも、高遠軍が諏訪を目指してきているという。

「なに、晴信殿が!?　それに高遠までが――」

頼重は色を失った。更に忍びが、

「上諏訪の禰宜に、下諏訪の金刺が」

と付け加えるに及んで、呆然とした。

諏訪はいつのまにか、三方から敵の包囲の的となっていたのである。しかも上原城は、戦闘の用意すらできていない。

（どうしてこんなことになった）

信虎の追放に安堵し、禰々の懐妊、そして和子誕生に我を忘れていたようだ。

（今にして思えば、伊豆守の直言が当たっていた）

「全軍あげて高遠を攻めよ！　こうなったは頼継の裏切り、敵は高遠――」

心気動転して逆上した頼重には、高遠しか見えていなかった。

御射山に陣を張っている武田軍に備えるべく、大沢まで出向いていた伊豆守が、急遽伝令を受けて上原城へ戻ってきた。

その姿を見るやいなや、紳四郎は駆け寄った。

「父上、いよいよ高遠と決戦です。私も父上に付いて、初陣を飾りたいと思います」

身の丈は今や父を超え、濃い眉に清々しい眼差し、息子の中でも自慢の子である。

四男中、上の三男を幼少中に病死させている伊豆守にとって、掌中の珠ともいうべき息子だ。

その息子から「初陣」と聞かされたとき、実はドキリとした。今度はおそらく戦さにならないだろうという予感があるからだ。

「付いてこい」

人目を憚りながら伊豆守は木立ちの一隅に紳四郎を招いた。

「そなた、今度の戦さに初陣してはならぬ」

紳四郎は驚いた。

「何と仰せられます。上原城が攻められるのですよ」

「そうじゃ、したがな……」

伊豆守は口ごもった。

「父上らしくもない。一体何を考えておられるのですか」

「戦さが五分五分ならこんなことは言わぬ」

「と言われますと、端から敗け戦さのようで……」

「率直に言うと、そういうことになりそうじゃ」

「今更そのようなことを言われて——どうしてそういうことの予測ができなかったのですか」

「わしは何度もお館様に直言はしてきた。高遠が武田に懐柔されているとな。したがお館様のお耳には聞こえなかった」

「ということは、全くの無防備ということですね」

「それに近い。なにしろそこを前から武田と高遠が狙っていた。つまり狙われていたのじゃ」

「……」

「代々諏訪は攻められたことがない。それにお館様にお子がおできになったのも、油断であった」

「油断と？」

「そうじゃこの兵数で籠城しても、時間の問題であろう」

「そんなに」

「よって、わしはあるいは……。しかし、そなたにだけは生きていてもらいたい」

紳四郎は驚いた。まさか諏訪がそんな状況にあろうとは思いもよらなかった。

そして父が既に死を覚悟していることも。
端正な父の横顔に、初めて哀愁を見てとった。
「それではわたしはどうしたら」
紳四郎は父の横顔に訊いた。
「うむ……」
伊豆守は一寸口ごもった。
「そなたに役目を一つ与えよう」
「役目と？」
「姫をお守りいたせ」
「姫様を！」
「そうじゃ」
紳四郎は顔をそらした。
（慮外なことを言われるものか）
「戦さの始末は男がつけるものじゃ。そういうことはお館様もお覚悟なされておられよう。したが、諏訪の血筋だけは残さねばならぬ」
「寅王丸君がおられましょう」
「寅王丸君の先のことはわからぬ」

伊豆守は紳四郎を直視した。
「寅王丸君のことは、武田が何とでもしよう。したが、姫は諏訪の誇り。あの姫を失うことがあってはならぬ。そなたが命をかけてお守りするのじゃ」
紳四郎の恋を察知している伊豆守である。
「わかりました。命に代えて姫様をお守りいたします」
伊豆守はホッと表情を綻ばした。
「それでは、達者で――」
草摺りを鳴らして遠ざかっていく父の後ろ姿を紳四郎はいつまでも見つめていた。
暁闇を衝いて二つの女輿が諏訪館の門前にひっそりと用意された。
禰々ノ方母子の輿は直ぐに発ったが、今一つの輿の主、瑤姫の姿がまだ現われない。
瑤姫が館の中で揉めているのは、これから行く桑原城行きのことだ。
ここから半里ほどの道のりにある桑原城は、上原城の詰めの城として更に高峻な山上に築城されている。
これまでかつて城主の妻子が、そんな山上に移されたためしはない。それほど今

度の戦さが急迫しているということだ。
「姫様、拗ねているときではございませぬ。間もなくここも、上原城も戦場になります。よって急がねば」
「敵は高遠か」
「いえ、武田にございます。すべては武田の仕組んだわざ、高遠は餌に動いてのこと」
「餌とは何のことじゃ？」
「大祝の職と、諏訪の美田にござります」
「まあ。それをどうして父上が……」
油断していたのかと言いたい。
「それではそなたもわたしと一緒に桑原城へ」
「できるだけお近くにいたいと存じます」
「それなら行く」
この素直さが愛しい。
「紳四郎」
「はっ」
「いつまでもわたしの側にいておくれ」

瑶姫は立ち上がると、つと紳四郎の胸にとりついて顔を埋めた。
（姫様）
切羽詰まった二人は、思わず抱き合い、互いの胸の鼓動を聴いた。

（2）

遙か下の方を遠雷のような騎馬の集団が走り去ったかと思うと、後は森閑となった。
眼下には青々とした諏訪湖が展け、上原城の方角からは何の物音も聞こえてこない。
（戦さが始まっているというのに）
おかしいと思っていると、四日目の夕方、上原城の方角から濛々とした煙が噴き上がり、それにまじって赤い焔がチラチラと見えだした。
「姫さま、お城が、お城が……」
真志野のけたたましい声に飛び出してみると、恐ろしい光景が眼の中にとび込んできた。
上原城が火を噴いているのである。

（父上さま――）

上原城にあがった黒煙は、ゴーゴーと瑶姫の胸の中にまで噴き荒れてくるようだ。

真志野の声につられて出てきた禰々ノ方と侍女たちも、木の間隠れに見える上原城の猛煙に呆然と立ちつくしてしまった。すると、ククククッと声を忍ばせて禰々ノ方が頽れた。

「お方さま、しっかりしてくだされ」

「寅王丸さまがおられます。しっかり遊ばして」

と侍女たちが懸命に禰々ノ方を励ましている。

わずかの兵に守られているだけの桑原城は、まさに孤立無援の浮城となってしまった。そしてやがてここに登ってくるのは、白地に黒の武田菱の旗を押したててくる武田勢である。

ところが見廻しても紳四郎の姿がない。

「われらはどうなる？」

思わず真志野に訊いた。すると、

「姫さまはお方さまのお側に」

と言う。禰々ノ方の側にいれば、武田の兵たちが入ってきても危なくはないだろ

うということだ。

そこへ外から数人の足音がしてきた。

「さては――」

と女たちは一斉に身構えた。

(紳四郎ならば……)

微かな期待をもって、入口を凝視した。

さっと戸が開いて現われたのは、なんと頼重だった。

「父上――」

甲冑姿の父が嬉しく頼もしい。その父に、

「お城が……お城が燃えています」

と縋るように言うと、

「案ずることはない。上原城を焼いたのはここがあるからじゃ。味方の兵たちも続々とここへ登ってきている。戦さはこれからじゃ」

そう言って、瑶姫の肩を抱くと、直ぐに部屋を出ていった。

「姫さま、本当に良うございました。一時はどうなるかと……、これで一安心でございます」

そうは言ってくれるものの、出ていく父の後ろ姿に、肩を落としたような淋しさがあるのを見逃さなかった。

それから間もなく登ってきた諏訪軍は、二百を数えるだけの少ない手勢でしかなかった。

上原城よりも高く、三方を断崖絶壁に囲まれている桑原城は、たしかに守るに固く攻めるに難い城である。

しかし、いかな城でも、二百の兵で、高遠・武田併せて五千の兵が相手では勝ち目はない。

それにしても、頼重が何ゆえ早々に上原城を焼いたか、誰にもわからなかった。

後でわかったことは、一の家老、連蓬刑部の裏切りだとか、緒戦での茅野伊豆守の討死にからくる頼重の心神喪失だという。

ともあれ、いろんな情報の錯綜に、混乱の極みに達した頼重の逆上であった。

これがため、頼重は麾下の兵たちから見限られることとなった。

そして桑原城へ移動を開始した時点で、逃亡者が相次いだ。それからいえば、今ここに登ってきた二百の兵は、よくよくの忠義者である。

夜明けとともに始まった高遠・武田の攻勢は、西南の攻め口からとりついた。

しかし、幾重にも仕組まれた鹿柴に阻まれてなかなか登れない。

押しては返し、返されては押す繰り返しに、さしもの連合軍も甘く見くびったことに気がついた。

しかし、たとえ頑強な守りを見せたところで、これだけの兵力では、落城は時間の問題である。

そうなると禰々ノ方と寅王丸の救出を考えねばならないのが武田方だ。

夕闇の迫った頃、武田軍は高遠軍に攻撃停止を命令した。すると喊声(かんせい)が消え、桑原城は不気味な静寂に包まれた。

と、一人の兵が慌しく麓から登ってきた。

「殿様、只今一の柵に武田の使者がきておりますが、いかがなされますか」

「なに、武田の使者とな」

頼重の顔に動揺が見られた。

(なんのための使者だ)

頼重の頭に禰々が浮かんだ。

禰々の引き取りであろう。止むを得ぬことだ。禰々は即刻引き渡そう。

(したが、寅王と瑶姫はどうする)

頼重の動揺はそこにある。

(条件だけは聞いてみるか)

頼重は武田の使者を城内に入れた。

既に薄暮の迫った本丸の広間は薄暗く、仄(ほの)かに明るい灯に照らしだされた使者は、甲冑姿も厳(いか)めしい、いずれも白髪まじりの五十代の武将である。

板敷に用意された円茣蓙(ござ)に腰をおろして両腕をつくと、

「武田の家臣、板垣信方にござる」

つづいてもう一人、こちらは片脚を引きずり、奇妙に上体を左右に揺らしながら入ってきた。そして座について一礼するや、

「山本勘助にござる」

と名乗った。見れば不気味な隻眼である。

この二人の様子に、頼重は落ちつきを失った。

武田の智恵袋というより、毒虫的存在だからだ。

強引な禰々の入輿と信虎の追放を画策した信方と、更に駿府から引き入れられてきた不気味な男。

それが顔を並べてやってきたのだ。

(伊豆守がいてくれたら……)

頼重はこの二人が何を言い出すか内心震えた。それでも

「使者の口上は何とじゃ」

と二人を睨みつけた。

「われらは和議を申し入れたく」

信方の声には威圧があった。

「これ以上、諏訪殿と交戦するは互いの為ならず。まして御方様をお苦しめ申すは心苦しく、ここで目出度く和議をとり結ぶよう、武田大膳太夫晴信公からしかと申しつかって参りました」

「勝手に戦さを仕掛けてきながら、和議の申し入れとはのう……」

頼重は薄ら笑いを浮かべた。

「その前に訊くが、高遠に仕掛けたはそちたちであろう」

「いや、それは全く逆、高遠より再三の招きがあり、晴信公の令によって高遠の叛意を鎮撫に参ったもの」

「それはおかしい。なら何ゆえ鎮撫もならず、高遠と連合して諏訪を攻めた――」

「高遠の戦意は固く、われらも動かざるを得なくなった」

「詭弁じゃ、そのような申し条が聞けると思うか」

頼重は撥ね返した。

「それでは申し上げます。詭弁と言われまするが、戦端などというものは、まこと理不尽なものでござる。征服、侵略欲によって動くのが戦国というものでござりましょう。有り体に言えば、高遠も甲斐も、美しい諏訪を手に入れたいとやってきたらば、諏訪はこれを押し返さねばなりませぬ。それができぬときは、われらの配下になるということぐらいは諏訪殿もご承知の筈」

一方的に攻め込んで、それを正当化するもの言いに、頼重はいよいよ腹が立ってきた。

だからといってこんな状況に追い込まれてしまったからは、こちらの言い分は空廻りするだけだ。

と、それまで俯いていた片眼の勘助が顔をあげた。

「諏訪の生きる道は、甲斐の属領になることでござりましょう」

と穏やかながら、決定的なことばを吐いた。

暫く沈黙がつづいた。

絶体絶命に追い込まれた頼重は、やむなく

「ではいかなる条件じゃ」

と訊いた。

すると信方はおもむろに懐中から晴信の書状をとり出した。

「これにて」

差し出された書状を、頼重はやや震え気味に開いた。文言は、

諏訪氏は今後とも大祝(おおはふり)に就かれること。
ただし領地は武田が宰領すること。
扶持(ふち)として、年三千貫の寄進をつかまつる。

というものである。

「殿」
「殿様」
案じ顔の近侍に、頼重は晴信の書状を示した。
そのときである。突然切り裂くような甲高い声が起こって、人々を吃驚(びっくり)させた。
「片眼の男を、父上、お斬り下さりませ！」
それは頼重の後ろに控えていた瑶姫であった。つづいて、
「姫様！」
と叫んで制したのは紳四郎である。
山本勘助は女声の主が、頼重の娘だと直ぐにわかった。と同時に、勘助を睨み据えている姫の美しさに驚いた。
（何とかぐわしい……）

諸国を経巡(へめぐ)り、いろんな女を見てきたが、これほど香気を漂わせた乙女を見たことがない。
（さすがは諏訪の姫）
勘助としたことが、姫の言ったことばの意味さえ忘れた。
近侍たちは、冷汗をかいて頼重と勘助の顔を交互に見つめた。すると、
「姫の言い分は……」
と落ちついた声で頼重が言った。
「父上さま、われらを追い詰めたは、それなる勘助とかいう痴(し)れ者の仕業でありましょう。それがぬけぬけとよくもここへ来れたもの。父上、お斬り下さりませ」
少女ながら、事の理非を見きわめようとする英明な資質は、祖父頼隆(よりたか)似であろうか。それにしても大胆な発言である。
近侍たちはこれからのなりゆきに固唾(かたず)を呑んだ。
「勘助殿、姫はそなたを斬れというが、どうじゃ」
頼重は青ざめるどころか、姫のこの一言に却って気が落ちついたようだ。
ところが勘助は口元に笑みさえ浮かべながら、
「かほど美しい姫御寮を仰いだのは初めてでござる。この姫御寮の刃なら、勘助喜んで命をさし出してもよろしゅうござる」

勘助は本心、そんな感傷にとりつかれた。

「どうじゃ姫、そなたの刃なら、喜んで斬られてもよいと申されておるが――」

頼重が振り返ると、

「わたくしに代わって、お父上がお斬り下さりませ」

と言った。

「いや、わしは使者を斬るわけにはゆかぬ」

と、つまりは瑶姫の言は取りあげられなかった。

しかし、この一件が、勘助の中に、稲妻のような鮮烈な印象を残すこととなった。

その日の夕方、桑原城は開城した。

そして、その日のうちに頼重は妻子と近習を連れて山を下りると、諏訪満隆の屋敷に入った。

満隆は、頼重の叔父に当たる人物である。

そこで一夜を明かすと、板垣信方の言に従って頼重は武田晴信に謁するため、古府中へ行くことになった。

「父上さま、古府中へ行ってはなりませぬ」

瑶姫は頼重に縋った。

「案ずることはない。挨拶がすんだらすぐに戻ってこようほどに……」

「いえ、行かないで」

少女の勘が本能的に陥穽を嗅ぎとっているようだ。

しかし頼重はそんな瑶姫を残して、武田の武者たちに囲まれながら満隆の屋敷を出ていった。

（父上さま）

頼重の姿が見えなくなると、瑶姫は真志野の胸にとりついた。

（父上はもしかしたら……）

このまま戻ってこないのではなかろうかという不安である。

それは真志野とて同じである。

頼重は騎馬で左右前後を数十人に囲まれながら上川の畔を進んでいく。

夏の陽は高く、諏訪湖畔に出てきた。青い山々に抱かれて沈む湖が、ひときわ碧く典雅である。

諏訪の神が鎮まるこの湖は諏訪人の象徴的存在である。

（もしかしたらこれが見納め……）

そんな感傷がよぎった。と、そのとき、

氷占の「大凶」の二文字が鮮やかに脳裏に浮かんできた。
（そういえば大凶であったわ）
それを忘れていはしなかったか。禰々の蕾を開かせ、寅王丸が生まれるに及んで、幸せに溺れ、外への警戒と軍備を怠った。
まさにあの啓示を忘れた結果がこれだったと気付かされた。
己の無知と怠慢がこの結果である。
頼重は唇を噛んでうなだれながら手綱をとっていた。

それから数日がたった。
屋敷の周りは武田の侍で固められているため、殆ど軟禁状態である。その中で古府中へ行った父頼重の帰りが待たれる。
ところが七日目の朝、突然瑤姫の部屋に禰々ノ方が現われた。禰々ノ方は苦しい立場にあるからか、すっかり面やつれしていた。
「何か？」
「実は、古府中からわたしにも出てくるようにと……」
「それは父上からですか？」
「いいえ、武田家から」

「それではお実家にお戻りになられるのですね」
「戻るわけではありません。でも一度行ってみなければならないと思います」
父頼重が古府中へ行ってからもう七日にもなるというのに、何の音沙汰もない。そこへ禰々ノ方が行くということは、安否を確かめるためにも必要であることはわかる。
しかし瑤姫は、なぜか素直に聞けなかった。
（所詮この女は武田の人）
もうこれで帰ってくることはないだろう。しかし、父の消息はどうしても知らねばならない。
「それではお気をつけて。できたらどなたか使わして、父上のご様子を知らせて下さい」
「はい、そのようにいたします」
そう言って出て行った禰々ノ方の後ろ姿が、更に小さく見えた。
しかし、それから何の音沙汰もなく日が過ぎた。
（一体、古府中で何をしている？）
苛立ちは不安を募らせ、この頃では絶望的でさえある。
「もしかしたら父上は、お囚われになっているのでは……」

そういう瑶姫に、
「禰々ノ方さまがお出でになられたのですから、そんなことにはなりますまい。必ずお戻りになられましょう」
と真志野は慰める。しかし、瑶姫の不安は募るばかりだ。

夜中、人の気配で目が醒めた。真っ暗な闇の中に、黒い人影が映っているではないか。
（夢か）
いや、確かに人影だ。金縛りという恐怖である。声も出ず、そのまま布団に突っ伏した。
すると、
「姫様」
と押し殺した声がする。
「誰じゃ！」
声が掠れた。
「私でございます」
（その声は――）

瑶姫はハッと布団を撥ねた。
「シーッ、お声をあげてはなりませぬ」
瑶姫は仄かな枕元の灯に映し出された紳四郎の姿を認めた。
「紳四郎――」
瑶姫はその黒い影に手をさしのべた。
「姫様」
夜陰が二人を大胆にした。紳四郎の腕に引き寄せられた瑶姫は、その胸にとり縋った。
切迫した二人は、互いに相手を求め、一つになって床の上に頽れた。
十八歳の男の肉体は、己を制するほど分別がきかない。
「お許し下され」
荒い呼吸に呑まれながら、瑶姫は己が体を紳四郎に預けた。

それから日を置いて深夜、覆面と黒衣に身を包んだ紳四郎が、警固の目を盗んで瑶姫の部屋に忍んでいった。
思えばこの逢瀬が、二人にとっての蜜月であった。
夏の陽を受けて、諏訪の湖が青々と輝いている。

（こんな状況に置かれなければ、紳四郎と湖畔を馬で走れるものを……）

何とも恨めしい限りだ。

そんなことを思っていると、大叔父満隆からこんなことを言い渡された。

「昨日、古府中から使者がきた。それによると、そなたにも古府中へこられよということじゃ」

「まあ、古府中へ……わたしまで一体何でしょう」

瑶姫はドキリとした。

「父上も禰々ノ方さまもどうなっておられるのやら、全くお便りがないのに、わたしまでそんな所へ何のために……、いやでございます」

「うむ。いやと言っても行かぬわけにはいかぬなあ」

五十代、横鬢（びん）に白いもののちらついてきた満隆も、内心は困惑しているようだ。

「大叔父さま、一体父上は何をしていらっしゃるのでしょう」

「何をしてと言われてもなあ……」

囚われていることは確かだ。それがどんな状況に置かれているかは満隆にもわからない。

「もしかしたら、わたしも父上さまのように古府中で囚われてしまうのではないでしょうか」

あれから一ヶ月近くにもなるというのに、父頼重の消息はない。

その父の消息を確かめたい一方、行けば二度と帰れぬ事態になるのではないかという懸念がある。

「大叔父さま、わたしは行きませぬ。そのようにお伝え下され」

「いや、それはなるまいぞ。行かねばならぬ」

「上手に使者を言いくるめて下され」

「どんな風に？」

「体が悪いとか、そんなことは大叔父さまなら何とでも」

「いや、そんな嘘は通らぬ」

「どうして」

「この屋敷の警固の者から知れている。先刻もそなた、騎馬で外へ出ようとした」

（さては悟られていたか……）

いろいろと言を左右にしてみたが、どうも逃れられそうもない。

（こうなったらば行ってみるか）

瑶姫は覚悟をきめた。

「して、大叔父さまは？」

「わしもそなたと一緒じゃ。大事なそなたの守り役じゃから」

（守り役じゃなどと）

瑤姫は不満だった。

「それでわたしは古府中で父上に会えますね」

「いきなり会えるかどうかはわからぬ」

「どうして？」

「まずは躑躅ヶ崎館に入り、晴信殿にお目にかからねば。それからじゃ、お父上に会われることは」

「もしかしたら……」

そう言いかけて満隆はことばを詰まらせた。

「もしかしたら、何です？」

瑤姫はそれが気になり迫った。

「お父上の嘆願をなさることになるやも」

「嘆願ですと？　何を嘆願するのです」

最悪の場合、頼重は切腹を迫られているやもしれないのだ。しかし、それをこの姫に洩らすことはできない。

「できるだけ早く諏訪へ戻していただけるよう」

「ああ、そのお役目で行くなら、わたくし参ります」

勝気な瑤姫の目が光ってきた。

その夜、瑤姫は、また風のように入ってきた紳四郎によって起こされた。

雨のような口づけを浴び、それからはお互いを貪るように絡れあった。追いつめられた感情が野性を呼び、野性が激情を呼んだ。

「わたしは古府中へ行くことになった」

「何！　古府中へ――何のためにそのような所へ行かれるのです」

「古府中から使者が来た」

闇の中で紳四郎の目が光った。

「父上に会いに行くのです。そして晴信殿に父上の解放を――」

すると紳四郎は瑤姫の両肩をとって揺すった。

「それはいけませぬ。行ってはなりませぬ」

「でも大叔父の命令です」

紳四郎の頭の中に、不安と危惧が渦巻いた。

「それは計略です」

「計略？」

「あの板垣信方と山本勘助の計略です。彼らが何を考えているか、私には見えてい

ます。そんな所へ行かれることは、みすみす彼らの計略に落ちていくことになります。ですから行ってはなりませぬ」

父頼重を見送ったときと同じことばを、今度は紳四郎から聞かされた。

四．躑躅ヶ崎館

（1）

瑤姫の輿が満隆の屋敷を出たのは七月半ばの早暁であった。

武田の侍二十騎ばかりに守られ、満隆と真志野ほか侍女三人が従った。

朝露に濡れた上川の畔をいく一行は、黙々と甲州街道を南下した。

しかし、満隆は気が気でない。途中、瑤姫を奪還すべく、諏訪の残党がどこからか躍り出てこないとも限らないからだ。

その先鋒は茅野紳四郎であろう。恋の炎に焼かれた紳四郎が、どの叢から襲いかかってくるかわからない。

満隆は黒々としている樹々の茂みや、深い山峡の壁に、絶えまない監視の目を投げつづけた。

陽は暑く、釜無川べりの木陰で輿を下ろして足を休める間も、編笠越しに油断のない目を光らせた。満隆には紳四郎の尾行が匂うのだ。

それは瑶姫とても同じである。紳四郎の意に抗って出てきたものの、紳四郎の影を見え隠れに感じている。

森陰や、釜無川の岩陰から飛び出してくるような気がする。そうした恐れと期待の矛盾に揺れながら、二泊を重ねて輿はいよいよ古府中に入った。

町中に入ると、整然とした道に家並みがつづいている。中央のゆるい勾配を上りきると、一丈ほどの高さの土塁で濠を巡らした館にきた。

これが武田の本拠――とわかったとき、満隆は興奮に震えた。

（遂にここへきたか――）

自ら火中に入ってきた以上、この姫によって、頼重の命運を切り開かねばならない。

やがて輿は大手門を素通りして、瑶姫らは西曲輪で下ろされた。

そこは信虎の頃から、人質や側室の館とされている所である。そしてあてがわれた部屋は、諏訪館と比べ遙かに質素だ。

「大叔父さま、父上はいずれに？」

「うむ、そのことじゃ。したがもはや夜に入ったゆえ、明朝早速伺ってみることにいたそう。その前に、何らかの沙汰があるやもしれぬわ」

そう言われて仕方なく、その夜はおとなしく寝ることにした。

しかし、褥も部屋も変わればなかなか寝つけるものではない。それにここは敵の真っ只中である。

その館の中のどこに父上が――と思うと、いても立ってもいられない気持ちだ。

ところが次の日も次の日も父頼重との対面の沙汰はない。無駄な日が過ぎるばかりで、瑶姫はいよいよ不安にかられた。

「一体これはどういうことです。大叔父さまは確と申し出られたのですか」

「それは毎日のように言っている。わしとて頼重様に会いたくて仕方がないのじゃ。それを何故沙汰もないのか不審でならぬわ」

その様子と口ぶりからみて、間違いなさそうだ。

そうして七日がたってしまった。

その日、部屋に現われた満隆の顔を見て、瑶姫は吃驚した。青白んだ顔に目が怒りに燃え、唇が震えている。

「どうなされましたの？」

満隆の顔は、烈しい感情を押し殺している。

「姫、わしは、何と言うたらよいのじゃ」

「何がありましたの？」
瑶姫はとてつもない不安に襲われた。
「われらは謀られたぞ」
「謀られた？」
「晴信という男がどんな男か。わしは甘かった。われらは最後の最後まで謀られていたわ」
「大叔父さま――」
瑶姫は怒りに震える満隆の手を摑んだ。日頃、穏やかな満隆を、これだけ怒らせることとは一体何であろう。
満隆は唇を噛み、激情を押し殺している。その満隆が、
「姫――」
といきなり瑶姫の手を取った。
「大叔父さま」
「許せ、姫よ」
満隆は苦しげに喘いだ。
「何をでございます」
すると満隆は懐中から何やらとり出した。見ると大きく折り畳んだ紙である。満

隆はそれを押し戴くようにしてから、瑶姫の前にさし出した。
不審に思いながら瑶姫はそれを受け取った。重くはないが、軽くもない。何か生き物のような感触である。
早速開いてみると、忽ち目に飛び込んできたのは黒々とした男の髻である。
「これは？」
弾かれたように叫んだ。
「頼重様のお形見じゃ」
瑶姫の目は一瞬空転した。感情が切り裂かれた。
父頼重に会えるとばかり思って諏訪を出てきた。ところが会えると思っていた父は、こんな紙の上に遺した一握りの髪だとは――。
それに一葉の短冊が添えられている。取ってみると

おのずから枯れ果てにけり草の葉の
主あらばこそまたも結ばめ

と記してある。
（これが父上との対面ということか――武田晴信を許せぬ！）

悲しみより怒りが体を突き抜ける。武田は諏訪氏を最後の最後まで謀った。

唇を震わす瑶姫に、満隆は言った。

「姫よ、悲しいが泣いてはならぬ」

「こんなになられたのはいつだったのですか」

「二十一日の夕じゃったと聞かされた」

「それではわたしがここへ着いたときは、既にお亡くなりになった後ではないですか」

「……」

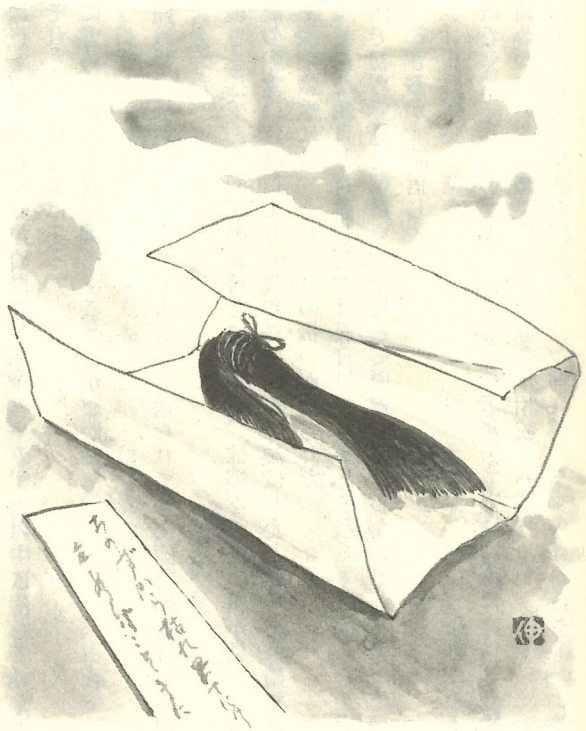
「それを、わたしに出てこいとは——父上の死を確認させるためだったのですか。大叔父さま」

「ああ」

「われらはここへくるべきではなかったのです。それをどうして大叔父さまは……？」

瑶姫の怒りが満隆に向けられた。

満隆としてはこうした懸念がないわけではなかった。しかし、姫を連れてまいれという以上、一眼なりとも会わせてくれる情はあるものと思ってきた。しかしそれが出立前から頼重の処刑が行われてしまっていたという。



晴信の非情さに改めて身震いがした。

「紳四郎は行くなとどれだけ止めたことか。みすみす火の中に落ちていくようなものだと。それを大叔父さまは……」

どんなに責められても満隆は返すことばがなかった。

桑原城開城後、板垣信方によって古府中へ送られてきた諏訪頼重は、躑躅ヶ崎館の東曲輪に入った。

晴信は戦さを捨てても同然の武将というより、妹禰々の夫の顔が見たかった。

二十七歳の頼重は、晴信より五歳年長である。滅ぼしたとはいえ妹婿であり、諏訪領主であった頼重には、それなりの扱いがなされた。

館に入ってきた頼重と対面したのは三日目であった。

謁見の間で初めて見た頼重を、一見して甲冑の似合わない男だと思った。

「頼重殿でござるか、晴信じゃ」

「ああ」

卑屈ではなく、手をついてからゆっくりと上体をあげた挙措には、上臈人のような品が備わっている。まさに狩衣の似合う相貌である。

（これが神氏の名家、諏訪の顔か）

秀でた額に通った鼻梁、そして清々しい眼。捕らえてみれば命を張って敵対しなければならぬほどの男ではなかった。

晴信は女の美貌に打たれたような不思議な恍惚を覚えた。

それに対して、頼重が初めて見た晴信は、禰々とは全く違った相貌である。

（これが武田晴信か――）

甲斐源氏らしい魁偉ではあるが、異相の風貌である。

この男が父親を追放して国守の座を簒奪し、それでも足りず、高遠を工作して諏訪を奪った張本人か。

（わしの不覚は、この男の妹を娶ったことだった）

頼重は悔やんでも悔やみきれなかった。

そして義兄弟がこういう形で初めて会うことになった皮肉な運命が呪わしかった。

それから後、頼重は古府中内の東光寺に身柄を移された。

東光寺は文永年間（一二六四―七五）、宋僧蘭渓道隆の開山で、古府中五山の一つである。

頼重が東光寺に移って五日目、切腹の命が下った。板垣信方からそれを聞かされたとき、頼重は血が逆流し息が止まった。

「開城の条件に違背しているではないか」
開城の条件とは、諏訪神社大祝に専念し……云々という和睦の条文である。
「仰せの通り、諏訪神社大祝はそのまま諏訪家にて継承されまする。ただし、ご嫡子寅王丸君をもって」
「寅王と……」
そういうことだったのか——頼重は今にして自分の甘さと迂闊さに気づいたのである。
（うまうまと謀られたわ）
まるで幼児のように晴信の術中に落ちて、諏訪からおめおめと古府中にきたものだ。己の愚かさが悔やまれるばかりだ。
目を瞑ると、上原城の広間で叫んだ家臣たちの諫言が甦る。
「殿、ここを死守いたさねば」
茅野伊豆守は必死で直言し、諫言したが、
「桑原で軍を立て直す」
と言いつづける頼重に、血路を開いてくれた。
あのときが伊豆守との最後の別れとなった。
（おさらばでござりまする）

そんな声を背に微かに聞いたような気がする。
（われながら愚かであった）
あたら忠臣たちを亡い、桑原で此奴らの甘言に乗せられて敵の古府中へくるなどとは……。
頼重は己が死を、武田への降伏ではなく、伊豆守や忠臣たちへの詫びの証としたかった。
（冥土でそなたたちに……）

（2）

館での地獄のような夏が終わった。
あのように姦しく耳を衝いていた蟬の音も途絶え、山から吹きおりる風に涼しさがもどってくると、蟋蟀の音に変わった。
と、夥しい軍勢が隊伍を連ねて古府中を発った。その中に満隆も加わっていたと聞いて瑶姫は驚いた。
「大叔父さまは一体どこへ？」
「高遠攻めでございます」

「高遠!?」

たしかに上原城攻略の先鋒に立ったのは高遠であった。しかし、その背後にあったのは武田である。その武田が、今度は高遠征伐の軍を出したというのだ。

「今度は高遠からの仕掛けだそうでございます」

桑原開城後の諏訪の領有については、宮川を境にして東を武田、西を高遠と決めたことも不満であったが、高遠頼継の憤懣は、諏訪大祝の職を得られなかったことである。

頼継は、武田の野心が諏訪一国にとどまらず、信濃攻略に向けられていると気付くや、中信の小笠原長時や伊那の箕輪城主藤沢頼親らに語らって、蜂起を促した。

晴信は直ちに三つ者（忍び）を放って諏訪を探らせた。

すると諏訪では、毎日のように一族が集まり、高遠に与するか武田につくかで評定が重ねられているという。

「寅王丸君がおられるではないか」

「寅王丸君は、諏訪と武田の楔、戦さには負けても、寅王丸君が大祝に就かれるからは、われらは武田に与せねばならぬ」

そうと決して、諏訪と武田の一体化が諏訪一帯に喧伝された。

すると九月十日、高遠軍二千が、杖突峠を越えて再び諏訪に侵入してきた。目指すは上原城である。三月前、上原城は諏訪頼重の手で焼かれたが、晴信は直ちに板垣信方を配して修築を命じた。

しかし、高い山上にあるため、再建は遅々として進まず、城の体裁もまだ整っていない。

それとは知らぬ高遠軍は、上原城を囲むやいなや、胸衝く山を登りはじめた。

ところが登ってみると城らしい城はなく、普請半ばの足場の柱が林立しているだけである。

勢いを剝がれた高遠軍が、山の上にたむろして、屋根を吹く風に汗を拭って景色にみとれていると、忽然と湧いてくるように眼下に迫ってきた武田軍に度肝を抜かれた。

城塞もない山上に追いあげられた形の高遠軍は、またしても武田軍に謀られてしまった。

山上と下で対峙すること二日、食糧の用意とてない高遠軍は、逃げ場を求めるようにして山を降りるや、そのままほうほうの体で杖突峠に敗走した。

そこへ晴信は悠々と登ってきた。

代々諏訪の本拠であった上原城は、南信に睥睨する天然の要害であり、八ヶ岳連

峰と諏訪湖を臨む絶景の地である。

（これだけの要害をどうして守れなかったのか）

それも戦わずして城を焼くなど、正気の沙汰ではない。

（わしは遂にこの諏訪を――）

父信虎が生涯かけて得られなかった諏訪を、追放後二年もたたずして手に入れることができた。

二十二歳の晴信は、それを眺めながら頬を紅潮させた。

そして巡らした目に映ったのは、満々と水を湛えた青き諏訪湖であった。

「おお、これは何と」

これまで何度か父に従いて信濃へきたが、山も川もすべて戦さの舞台であり、時には戦術の具ですらあった。だから、行軍の途中、この湖が網膜を掠めたことはあっても、このような感動をもって見たことはなかった。

諏訪は、田地ばかりか、神と、神の如き美しい湖を抱えている。

晴信は諏訪への執着を新たにした。

（諏訪を手放すことはできぬ）

「お館様、いずれに？」

「今からあの湖を見に行く」

「この分では夕方から雨になりましょうほどに、兵も休めたく、古府中に引きあげられたがよろしいかと」

そう言ったのは飯富虎昌である。虎昌は、この頃ときどき咳込む晴信の体を案じてのことである。

「雨がなんじゃ、わしはあの湖畔へ行くぞ」

（湖畔へ!?）

かつての主君信虎には、そんな自然を愛でる心情などなかった。新しい発見である。

すると、

「そちは兵をまとめて古府中へ帰るがよい。わしは今夜は信方の所に泊まることにする」

呆気にとられる虎昌を尻目に、晴信は近侍十数人のみを連れて降りていった。

諏訪攻略後、元諏訪館に郡代を置き、板垣信方を配置した晴信は、その夜信方のいる諏訪郡代屋敷に泊まった。

兵の半分を古府中へ返し、郡代屋敷に入ってきた晴信に、信方は驚いた。

「戦勝おめでとうございます。それにしては供廻りが少のうございませぬか」

信方が訝ると、
「戦さは終わった。そこで惚れた場所へ行ってきたのじゃ」
と清々しい笑顔である。
「惚れた場所とは？　一体いずこで」
可笑しなことを言われるものかと信方は怪しんだ。
「湖じゃ、諏訪湖よ」
途端、信方は声をあげて笑った。
（湖とはまた、何とお若いことよ……）

その夜晴信は不思議に頭が冴え、なかなか眠れなかった。
軍旅の仮泊は珍しいことではないが、今夜は屋根を吹く風の音が妙に耳につく。
と、東光寺で自刃させる前、一度会った諏訪頼重が思い出されてきた。
武将に会ったというより、妻の三条ノ方から聞いている都で演じられる能役者を見たような感じだった。
土臭い甲斐の山男ではなく、蘢長けていた。
（あの美しさはどこからくるのか）
それが今わかったような気がした。神と湖の凛然を受け継いだ諏訪の血である。

（諏訪の血を絶やしては……）
すると禰々の子、寅王丸が浮かんできた。
頼重自刃の後、衝撃と心痛から立ち直られぬか、禰々は今もって臥せったままである。
（それにしても寅王は頼重に似ればよいものを、親父殿〈信虎〉に似て）
皮肉なものだ。
軽い咳が一つ出て、仰向けになった。
と、晴信の記憶に一人の女の名が思い出されてきた。
（たしか瑶姫……）
頼重の娘を、躑躅ヶ崎館に呼びつけていたはずだ。
父頼重を自害させた後だったため、気がひけて引見をためらった。
（その娘に会ってみたい）
頼重似なら、可成りの美形であろう。妙に胸が熱くなった。

晴信は十三歳で上杉朝興の娘於満津と結婚した。中肉中背、器量も並だったが、控え目で晴信の心を癒してくれた。
この於満津が懐妊した。当の自分より父信虎の方が喜んだ。ところが病気を発

し、於満津は身重のまま亡くなった。

このとき悲しんだのは、やはり信虎の方だった。悲しんだ理由は、胎の子を惜しんだからだ。

しかし、十四歳の晴信には、父としての実感がまだ備わっていなかった。

そこで姻戚に当たる駿河の今川氏親の計らいで、今度はとび切り上等の姫を京から迎えた。正室となった三条ノ方である。

三条氏とは、清華七家（五摂家に次ぐ家格の公卿）の一家で、夫人の姉は細川晴元に、妹は本願寺法主大谷光佐に嫁いでいる。

この思いがけぬ高家との縁組みに喜んだのはこれまた信虎だった。

三条家との縁組みは、京への足掛かりとして必要だからである。

ところが三条の姫が来てみると、上臈の深窓の姫というにはあまりに違った大柄で、色黒の女だった。

晴信は失望し、婚儀の間じゅう、亡き於満津を懐かしんだ。

それでも天文七年（一五三八）長男太郎（義信）ができ、更に次男、娘と次々に生まれた。

それは有難いことだが、晴信の心を楽しませなかったのは、三条ノ方の気質の強さと高慢にあった。

そこで晴信は三条ノ方の不興を承知の上で、北信濃の豪族、禰津元直の娘を側室とした。

いや、元直の娘ばかりではない。領内国人たちの娘を、質という名目で次々と側妾にするようになっていた。

（3）

躑躅ヶ崎館に戻ってきた晴信は、早速飯富虎昌を呼んだ。そして、

「諏訪は聞きしに勝る所じゃった」

と機嫌がいい。虎昌はそれを訝った。

「勝るとは一体何のことでござりまする？」

「ああ、明媚の地ということじゃ」

戦さからの帰りなら、戦さ話をしなければならないだろう。それを明媚の地などと……。

（殿は諏訪郡代屋敷へ泊まられて一体何を？）

そこで虎昌の方から口火を切った。

「高遠の死者は七、八百と考えられます。それに対してこちらは全く兵を損じてお

りませぬ」
「うむ」
「それから高遠は連蓬軒を戦死い、頼継にとっては大痛手、これで高遠も諦めがついたかと」
「そうじゃな。まさか弟に死なれようとは頼継も思わなかったじゃろ」
「そこでお館様」
と虎昌は膝を進めた。
「早速に上原城の築城を急がねばなりますまい」
「そうじゃな」
晴信は目を輝かした。そして、
「上原城址に登ってみたが、あんなに素晴らしい展望じゃったとは驚いた。諏訪が一望に見渡される。頼重殿も惜しいことをしたものよ」
(たしかに今日の殿はおかしい。諏訪で一体何があった?)
虎昌は首を傾げた。と、
「虎昌――」
思い出したように晴信は呼んだ。
「はっ、何か?」

「近々、諏訪の姫を引見する。満隆にそう伝えよ」
「はっ? ハァ……」
虎昌は狐につままれたような顔をした。
十一月、季節は厳冬の入口である。ひときわ寒い風にさらされるとき、晴信は瑶姫を引見すると言い出した。
頼重の娘をいつまでも宙ぶらりんにしておくわけにはいかない。諏訪の人心収攬こそが武田の占領政策である。
虎昌からそれを告げられたとき、満隆は遂にくるべきものがきたと思った。はじめからそれは予定されていたことだと観念せざるを得ない。
それを、あの勝気な姫に、どういう風に切り出そうかと気を揉む。
「姫、明朝広間でお館様が引見されることになった。そこで諏訪の姫らしく毅然としてほしいものじゃ」
そう言うと、
「引見ですと? ここへきて四ヶ月にもなるというのに、今頃何のための引見です」
瑶姫は不機嫌である。
「それはお父上のことがあったゆえであろう。お館様としては、それだけの配慮を

なされた」

「配慮ですと？　何と言われようと父上の仇に変わりありません」

「したが姫よ。それを言うてはならぬ。戦さの習いじゃ、堪えねばならぬ。とにかく、お館様を怒らせたらどういうことになるか。すれば今度はそなたの命が危ない」

「わたしの命まで取ろうと言うなら取るがよい。敗者にも敗者の言い分がある」

「そなたは若い。若過ぎて人の心や世の中のことがわかっておらぬ。『韓信の股くぐり』ということを知っておろう。怒るは易いが、堪えるには勇気がいる。それをわかってもらいたい」

と満隆は、瑶姫を宥めるのに懸命であった。

躑躅ヶ崎館の広間、上段の座に晴信がゆったりと現われた。

左右に居流れた重臣たちの端に、諏訪満隆が座している。その真ん中に錦織りのやや落ちついた紅色の打ち掛けを着けた女が、深々と黒髪を垂れて平伏している。

女をこうした所で引見するのは正室三条ノ方以来である。

「お館様がご着座なされた」

その声に、瑶姫は頭を少しあげてから、更に額を低く垂れた。

「諏訪頼重の息女、瑶姫にござりまする」

取り次ぎは虎昌である。

（うむ）

晴信は一息のんだ。

「面をあげよ」

の声に、瑶姫はゆっくりと頭をあげた。そして怖じることなく晴信を正視した。

晴信はハッとした。紛れもなく頼重の面輪である。やや面長に形のいい眉と鼻、そしてその目の何と澄んだ眼差しであることか。一瞬諏訪の湖を想わせる。

「瑶と申しまする」

「瑶姫殿か」

晴信は小さく呟いた。それからことばを失った。

これまで接したことのない高貴な面輪に打たれたといったところだ。呆然とした晴信に、

「お館様」

と虎昌が声をあげた。その声はたしかに聞こえているが、この女の前で、どう言うべきかことばが見つからない。

（こんな殿を見たことがない）
重臣たちは一様に、瑤姫の類稀な美貌に打ちのめされている証だとわかった。
（それにしてもこれはおかしい）
虎昌はやきもきした。かくなる上は、引見をこれまでで――と声をかけようとしたとき、
「姫、何か言うことはないか」
と晴信が口をきいた。
すると瑤姫はキッと顔をあげるや、
「父をお返し下され！」
と叫んだ。
晴信は狼狽えた。それより重臣たちの間でざわめきが起こった。
「何ということを言うものか！」
「無礼な！」
「立場を考えよ！」
重臣たちの吐き捨てるような怒気と蔑視に、末席の満隆は震えた。
（そのようなことを口にして）
あのように言い含め、諭しておいたのに――。

しかし、晴信は黙したなりである。この美しい姫の怒りはもっともだ。
「父をお返し下され！」
再び叫んだ。
「控えよ！　それが敗れし者の言い条か――それも女のことばとも思えぬ」
と怒声を発したのは虎昌である。虎昌ほか甲斐の男たちは、こんな女をかつて見たことがなかった。
しかし、晴信は黙したままである。
（お館様はどうかしておられる）
虎昌はいらいらしてきた。そこで
「お館様、おことばを！」
と迫った。
そのとき思いがけないことが起こった。
「父の仇！」
と、瑤姫が懐刀を抜いて晴信目がけて立ち上がった。
「痴れ者奴が！」
「何たること！」
とバラバラと重臣たちが立ち上がったとき、

「姫様、お止まりを、お止まりを」
と瑶姫の前に飛び出して制したのは勘助であった。
「お館様、お赦し下さりませ。多分姫の逆上は、私奴のせいでございます」
「そちのせいじゃと？」
晴信は不審の目を投げた。
瑶姫も気勢を削がれ勘助を睨んだ。
（それにしても何ゆえ勘助が――）
「私奴の話をお聞き下さりませ」
勘助は躙りながら上段の下まで進んだ。
「何があったのじゃ」
晴信の声は平静に戻っていた。
「はっ、この夏の諏訪攻めのときでございます」
「うむ」
あのとき晴信は、妹禰々の城を攻めることを憚り、晴信自身は出陣しなかった。
「こちらの謀が功を奏し、裸城同様になった上原城を、頼重殿は見放され、桑原城へ移られました」
「……」

「そこへ手前が板垣殿と一緒に城受け取りの使者として参ったときのことでございます」
「うむ」
「こちらは数名にて、談合はなかなか進まず、遂に頼重殿は怒られ、供の一人がいきなり抜刀して私奴が手打ちになるところでございました。そのときいきなり姫が飛び出され、危ういところをお助けいただきましてございます。よってここは勘助奴の命に免じて、姫のお命だけは……、お願い申し上げまする」
そう言うや、勘助は板敷きに額をつけてあげようとしなかった。
（そのようなことは聞いていなかったが――）
晴信はそう呟いたが、敢えてそれを質そうとはしなかった。
それに飯富虎昌も、そのようなことを、信方から聞いたことはなかった。
それより何より驚いたのは、瑶姫の方である。
（それは嘘じゃ）
あのとき勘助を斬れと父に迫ったのは、瑶姫だったのだ。
それを父は見送り、勘助は命を拾った。ゆえに勘助は瑶姫を怨みに思っていた筈だ。それがどうして今、そんな嘘を作ってまで瑶姫を助けようというのか……。
（勘助――）

瑶姫は板敷きから額をあげようとしないその背に向けて呟いた。
（どうしてそなた、わたしを……）
「勘助、頭をあげよ。そういうことがあったからは、姫の無礼は問わずにおこう」
「は、はあ、まことに忝うございまする」
勘助はまた卑屈なほど頭を下げた。そしてやおら頭をあげたとき、瑶姫の目と合った。
（勘助！　そなた何ゆえ……）
勘助の目が穏やかに微笑んで見えた。

（4）

居室に引きあげてきた晴信の心境は複雑であった。今も、
「父を返せ！」
と迫った瑶姫の悲痛な声が耳の奥に残っている。
それに対して、かつて自分は父を謀って駿河に放逐した。仮初めにも父を思う息子ではない。
なにゆえそんな挙に出たかというと、父から疎まれていたからだ。

それからみると、頼重と瑶姫は美しい父娘である。その父を、あれから一目も会わせることなく断罪した。
頼重の心残りは寅王や禰々ではなく、もしかしたら瑶姫だったのかもしれない。
（惨いことをしてしまったようじゃ）
そうした憐愍の情が湧いてくるということは……。
（あの姫にわしは……）
妻も妾もあり、女に全く不自由はない。しかし、これほどまで女に魅かれたり、恋心を覚えたりしたことはなかった。
晴信の心を今、激しく揺さぶっているのは、刃を向けて迫ってきた瑶姫である。
諏訪の湖を想わせる澄んだ眼差しと優雅な面輪。それに激しい復讐への意志――。
武家の女の美しさと情念を見せてくれた。
（わしは初めて女に惚れたようじゃ）
それも敵将の娘である。
（彼女をどうする……）
いつになく晴信は逡巡した。
すると戸の外で声がした。

「勘助にござりまするが、お目通り叶いましょうか」
「おう、勘助か。入れ」
ホッとした。ほんとうのところ、勘助の意外な話の真実も知りたかったが、この男にだけは打ち明けてみたかった。
躙りながら入ってきた勘助は、間を置いて平伏した。そのとき晴信は畳についた左手の小指がないことに初めて気付いた。
隻眼(せきがん)に不自由な歩行はわかっていたが、指まで失っていたことは間近に見てわかった。まさに異形、異相の男である。
不気味というより、凄惨な歴戦の証(あかし)である。忠臣板垣信方が惚れて、今川の駿府(すんぷ)から、それこそ三顧の礼にも近い形で引き連れてきた男である。
何か？　――と入室の心意を訊く前に、晴信は先刻の引見の場で、意外な申し出をしたことの真偽を確かめたかった。
「先ほどそちが申したこと、真(まこと)か？」
「するとお館様にはお疑いにござりまするか」
勘助は片眼をクワッと見開いて晴信を凝視した。一瞬、ドキリとするほど不気味である。
「いや、諏訪攻めの後、信方の報告と違うているゆえじゃ」

「違っておりまするか」
「うむ、信方の報告ではむしろ逆じゃったような気がする」
「と言われまするると？」
「勘助を斬れと言うたは姫じゃったそうな。どうじゃ勘助、どちらが真実(まこと)じゃ」
そう言われては仕方がない。勘助の真意を述べるしかない。
「それでは申し上げまする。事実は、信方殿の通りにござります。それを逆手にとってあのようなことを口走りましたには、私奴の作意にござります。いや、本意にござります」
「どのような？」
晴信はのり出すようにした。
「姫の絶叫は姫からみれば真実にござります。したが、あそこで殿に刃を向けてしまったからは、生かしておくわけにはまいりますまい。したが頼重殿につづいて姫まで討つは忍び難く、いかにして姫を救わんか――そのためには私奴があのようなことを口走るしか方法はござりませなんだ」
「うーむ」
晴信は深い吐息をついた。それから次のことばを発するまで、勘助は身の縮む思いで晴信を凝視した。

「ほんとうのところ……」
「はっ」
「わしはホッとした」
ホッとしたのは勘助の方である。
「姫が刃を向けて迫ったとき、勘助よ、わしは姫の刃を受けてもよいと思ったくらいじゃ」
暫し勘助はことばが詰まった。
「姫ゆえにござりまするか」
その通りだ。父を討たれた娘が、その仇に向かって刃を向けるは孝であろう。
それに姫は神に近いほど美しかった——。その感動が晴信の中から雑念を払拭した。
二人はそれから暫し黙ったまま対座していた。静寂を破る鳶(とび)の声に、二人は現実に戻った。
「ところでお館様」
「うむ」
「勘助ここに参りましたは、もう一つの儀がござります」
「ほう、何かな？」

「率直に申し上げても、よろしゅうござりまするか」
「よい」
「あるいは慮外なことと、お腹立ちになるやもしれませぬが……」
「よい」
「あの姫を、お館様のご側室にと——それは姫が美しいばかりではござりませぬ。諏訪頼重を討ったからは、その姫の子に、諏訪を宰領させてはと……。勿論お子はお館様のお子にござりまする。すれば諏訪の民心も得られましょう。そうすることで、諏訪の安定が——」
「おう、よう言うてくれた」
晴信の目が輝いてきた。
「差し出がましいこととは思いながら、あのとき、姫の命と、その先まで考えての所為にござりまする」
「やっぱりそちは策士じゃのう」
「いえ、お館様と姫のことを思うてのことでござります」
そう言いながら、勘助は瑤姫の美しい顔を瞼(まぶた)に浮かべていた。
（わしの恋など……）
一方晴信は、あたかも雷電に打たれたような出来事に、胸が熱くなった。

（もしかしたら勘助奴、わしの心を見抜きおって……）

「で、姫のご措置は早い方がよろしいかと」

「そうじゃな」

勘助が退がっていくと、晴信は一人笑いした。

（信方とは違うわ）

五．側室

（1）

諏訪満隆は驚かなかった。むしろホッと胸を撫でおろしたくらいだ。

甲斐国主武田晴信に向かって刃を向けた者は、たとえ女であろうと許されるべきではない。それが晴信の側室に――ということならば、むしろ寛大な措置である。

頼重の死は思いのほかだったが、瑶姫の側室は、初めから予想されたことだった。

ただ気の強い瑶姫に、どう切り出すか、ここは一方的に命令として伝えるしかないと考えた。

「何ということを！」

瑶姫は眼尻をあげて叫んだ。

「したがこれは敗れし者の運命じゃ。ましてそなた、お館様に刃を向けたではないか。本来なら打ち首ものじゃぞ。それを女性とあって憐れまれ、死を免ぜられた。それだけで有難いと思わねば」

「なにが有難いのです。わたしは父上の後を追おうと思っておりますものを……」

瑶姫は初めて涙をこぼした。すると涙は涙を誘い、とうとう嗚咽を誘った。

さすがの満隆もこれには舌鋒をおさめざるを得ない。哀れといえば、これほどの哀れはないのだ。

すると涙を払った瑶姫はこんなことを口走った。

「それが駄目なら、逃げます。只今から」

と、その目が光ってきた。

「そんなことができると思うか。よしや出られたとしても、この寒さじゃ。それにここから諏訪まで女の足で逃げられると思うてか」

満隆の目に、白い雪を頂いた山々の尾根と、切れ込んだ深い山峡が浮かんだ。

そこは凍てつく風に、人も獣の影さえもない。

「大叔父上さまの馬で」

「甘えるでない！　凍え死ぬ前に、わしもそなたも一刀両断じゃ。それがお父上に報いることか」

「それではどうしたら」

瑶姫は激しく抗った。そのとき紳四郎の姿が浮かんできた。

「紳四郎がいます」

「どこにいるのじゃ」

「わかりませぬ。したがこの府中の町のどこかに――いつも館の動きを見てくれているはず」

「そうであってもじゃ。紳四郎一人ならともかく、女を連れての逃走などできるものではない。そんなことをすれば共死にじゃ。そんなことでよいのか」

一瞬、紳四郎と一緒なら――とも思ったが、紳四郎を捜すことは難しい。それに紳四郎まで死なせてはならない。

（紳四郎、助けて――）

その夜、瑶姫は布団の端を摑んでさめざめと泣いた。そして女の弱さと惨めさを、キンキンと胸に刻んだ。

山も森も濠の水も凍りついた厳冬の躑躅ヶ崎館の西曲輪で、ささやかな祝言があげられた。

これはお館晴信の正式な側室であるという表明と処遇である。

ともかく瑶姫の意志とは別に、事は次々と運んでいく。
そして初夜直前、褥の中から下まで、入念に調べられた。晴信に刃を向けた女のことだ。どこに刃を隠しているかわからない。
それに側近たちは、万一に備えて、廊下の外で見張るという念の入れ方である。
しかし晴信に疑念はなかった。たしかに刃を向けてきた女ではあるが、それは既に許容している。
頼重をああいう形で死に追いやったことを、今では後悔しているくらいだ。
（それに自分は、恋してしまっている）
そんな女をこれ以上苦しめたいとは思わない。
側室の措置は勝者の論理だが、それより恋しい女として扱いたい。
勘助が言ったように、男子ができたら、諏訪の跡目として諏訪に帰すことも考えたい。そこまで思う晴信である。
凍てつく廊下から入ると、部屋は別世界のように暖められていた。
白寝着に着替えて入口に両掌をついているのは瑶姫である。
こちらも同じく白寝着をつけた晴信は、ゆっくりと褥に着いた。それから
「諏訪」
と呼んで慌てて

「瑶姫」
と言いかえた。すると、
「諏訪とお呼びくださりませ」
と、きっぱりした声が返ってきた。
「そうか」
一本取られたようだ。
「さあ、こちらへ」
と呼ばれて瑶姫はスッと立って褥の端に座った。
正室の三条はじめ、側室たちにない不思議な香気が立つのを覚えた。
晴信の方が落ちつかなかった。ところが瑶姫は言われるままに膝を進め、晴信の手も借りずに身を横たえてきた。
妻や側室たちはこうではなかった。羞い躊躇い、抱えるようにしなければならなかった。
（覚悟ができているのか、それとも……）
と疑ったのは、おぼこではないということだ。既に男を知っている――としても、それはやむないことである。
しかし、晴信の傍らで仰向けになった瑶姫は、晴信と目を合わせることなく、視

線を天井に張りつけたままである。それは初夜を迎える女の風情ではない。

「瑶姫、いや諏訪。わしが恐ろしいか」

返事はない。

「本当の気持ちを述べよ」

無言である。それならこちらから仕掛けねばならぬ。そこで帯をほどき、前を開いた。

仄明るい灯の下で白寝着も羞うような薄桃色の裸身が目を射た。一瞬眩むような気がした。

(どの女よりも美しい)

初めて得た真珠を抱くように、晴信は己が体を重ねた。女の柔肌から、熱い血が照り返すように晴信の胸に撥ね返ってくる。

すると体の奥から痺れが起こり、欲情が怒濤のように起こってきた。忽ち雄獣のように瑶姫の裸身にとりつき、全身を動かしながら己が快感の頂点に達した。そして滝のような噴出とともに前後もなく瑶姫の体に全身をあずけた。

そして穏やかな引き潮とともに更めるようにして瑶姫の顔を見た。

すると驚いた。瑶姫は目を天井に張りつけたまま、無表情である。

晴信は打ちのめされた。

「何を見つめている――」

凍りついたその目にドキリとした。いや、腹が立ってきた。これではまるで一人芝居ではないか。

「何を思うている？」

「何も」

「いや、何かを思うている目じゃ」

そのとき、この女には既に男がいるのではないかと直感した。現にこの体は未通ではなかった。すると、

「耐えておりました」

と言うではないか。

(そんな風に……)

晴信は勝者だ。しかし今の晴信は、敗者を征服しようとしてはいない。皮肉にも自分は、被征服者の女に恋してしまっている。

「諏訪よ」

晴信は瑶姫の体を力いっぱい抱きしめた。

しかし、瑶姫の目は晴信を避けて、天井に張りついたままである。その目は一体何を見つめているのか。

（もしかしたら、別の男のことでも……）
「何を見ている」
晴信は威嚇ではなく、囁くように言った。
無言である。しかも遠くを見ているような眼差しだ。
「諏訪――」
晴信は揺すった。
「答えよ」
そこで初めて瑶姫は晴信と目を合わせた。
「諏訪の湖を見ておりました」
（やっぱりそうじゃったか）
眼差しが遠く、深い哀愁を湛えている。
「わしの愛にこたえぬか」
「……」
眼差しが更に哀愁を帯びている。
晴信は体をずらすと仰向けになった。
女を抱きながら、こんな無惨な気持ちになったのは初めてだ。
（わしは永遠にこの女を自分のものにできぬのでは……）

諏訪は、男に蹂躙されながらも、懸命に抗っている。
（欲しいのは肉体だけではない）
それに初めて気付かされた。
（もしかしたら、わしはこの女の敗者なのかもしれぬ）

（2）

夜中、西曲輪の廊下を走る数人の足音で目が醒めた。
「何であろう」
真志野も既に目醒めていた。
音の様子から、敵の夜襲でもなさそうだ。
（となると？……）
更に耳を傾けると、三条ノ方の建物の方ではなさそうだ。ということは、この曲輪のどこかで何か変事でも起こったようだ。
聴き耳を立てていると、また数人の足音がしてきた。足音からして男である。
「見てまいりましょう」
真志野は髪を一つに結わえると、厚手の綿入れを羽織り、更に厚手の足袋に袴巻きを重ねてそっと廊下へ出ていった。

真志野のいない夜、いつも脳裏に描くのは紳四郎のことである。
瑶姫の輿に尾いて、見え隠れに古府中へ入ってきたことは確かだ。
しかし、一体古府中のどこにいるのか全く消息がつかめない。
大叔父満隆に訊くわけにもゆかず、やっぱり当てにするのは真志野である。
いずれ暖かくなったら、ここを出て町中を歩いてみよう。そうすれば必ず紳四郎の消息は把めよう。
そのことばかりを思っている。いくら晴信に抱かれても、晴信のことを思うことはない。
そんなことをあれこれ思っていると、バタバタと音をたてて真志野が戻ってきた。
「姫さま――」
真志野の息遣いが荒い。
「どうした？　何があった」
「禰々ノ方さまが……」
「禰々さまが？　何か」
「お亡くなりになりました」

「ええっ！」
咄嗟のこととてことばも継げない。
「小半刻も前のことのようです」
「そんなにお悪かったのか？」
「それはお丈夫な方とは言えませぬが、特にお悪かったとは聞いていませんでしたが……」
「ではどうしたらよいのじゃ」
「いずれ間もなく侍女の方がこられましょう。それから出向いていくのが」
「では着替えなどもしておかねば」
と待機していると、夜明けを待って一人の女がやってきた。見れば諏訪館時代からの顔見知りである。
「夜明けを待って参りました。禰々ノ方さま付きの妙でございます。この夜中、とうとうご他界にございます」
そう言うと口元に手を当てて暫く絶句した。
「そんなにお悪かったのですか」
「こちらにこられてから、いろいろとお苦しいことがありましたから」
「ということは、頼重さまのことで……」

と真志野が訊くと、
「はい、まさかお館さまが、妹君の背の君をお打ちになるとは――それもお方さまがこちらにお着きになる前のことでしたからね。お方さまのご心痛はそれはそれは、傍の目にも辛うございました。それからずっと臥せりがちでございました」
ということは、あれから半年以上もたっている。その間瑶姫は、禰々ノ方の部屋を訪ねることもなかった。
それは気にならなかったというと嘘になるが、こちらの境涯も辛いのだ。
「それでは」
と去っていった侍女に、後のことを聞くことさえ忘れてしまった。
武田の姫であっても、諏訪頼重の妻だったために、禰々ノ方の葬儀はこっそりと行われ、館の者たちにも知らされなかった。
そして東光寺墓地の頼重の墓の後ろにひっそりと埋葬された。
（父〈信虎〉の具になり、兄〈晴信〉の犠牲になった）
と瑶姫は呟き溜息をついた。
（したが寅王丸はどうなる――）
「禰々ノ方さまのご逝去、ほんとうに悲しく淋しゅうございます」
瑶姫の部屋にやってきた晴信に、早速弔意を述べたが、晴信の顔には特に感慨が

見られなかった。

（冷たいお人よ）

瑤姫は顔をそむけた。父を放逐し、妹婿に死を与え、実妹に慰めのことばもなく西曲輪に放置した晴信である。

その晴信は、瑤姫と回を重ねるうち、氷の溶けるように馴染んでくれることを期待しているが、今宵襴々の悔やみを述べられ、高揚した気分に水を差されたように感じた。

寝着の晴信が、早速褥の中に体を入れると、

「お館さま」

と今夜は瑤姫の方から口をきいた。

「何か？」

「寅王丸さまをどうなされます」

これから男女の睦言に入ろうというとき、なんと寅王丸のことが持ち出された。

「それを訊いてどうする」

「寅王丸さまをわたくしのお子にいただけませぬか。そして寅王丸さまと一緒に諏訪へ帰りとうございます」

（そんなことを考えていたのか）

晴信はがっかりした。

「寅王丸さまは甲斐と諏訪をつなぐお血筋。したが襴々ノ方さまがご他界なされ、寅王丸さまもお淋しいと思います。それで……」

（諏訪にはわしの思いがわからぬようじゃ）

晴信は天井に目を背けた。それを瑤姫は否ととった。

「お館さま」

晴信は無言である。

（さてはお館さまを怒らせてしまったか）

瑤姫は溜息をつきながら晴信の傍らに体を横たえた。

双方無言である。すると互いの息遣いが聞こえる。こういうとき、瑤姫は諏訪の湖を想うことにしている。

今頃はびっしりと厚く張りつめた湖のあちこちで、穴を掘って小魚を捕っているだろう。

（やがて御神渡りだ）

と、

「諏訪――」

晴信が瑤姫に向き直った。

「寅王がことはわしに任せよ。それよりそなたがわしの子を生むことじゃ。その子に諏訪を与えよう。ならばよい」

（――）

一瞬呆気にとられた。

（わたしが晴信殿の子を生むなど……）

仇敵に身を任すだけで屈辱だと思っているのに、子など考えたこともない。

「お館さまにはお子が三人もおられます」

三人とは、正室三条ノ方の生んだ長男太郎と、生まれつき盲目の二男と姫のことである。

「太郎がことは甲斐の後継ぎじゃが、そなたの生んでくれる子には諏訪を取らせよう」

とは言われても、晴信の子を生もうとは思いもよらない。

（わたしが生むとすれば紳四郎の子であろう）

瑶姫は溜息をつきながら目をそむけた。

「そんなにわしが疎ましいか」

言うなり晴信は瑶姫を引き寄せた。

（いつまでも頑なに抵抗う女よ――）

しかし晴信は、諏訪人が御神渡りを待つように、瑶姫の肉体と心の春を待つことにした。

それは女体に馴れた晴信のもう一つの娯みでもある。

「諏訪」

晴信の厚い唇が重なり、開いた体の間に晴信の強い男根が入ってきた。

「わしを嫌うな。わしはそなたを誰よりも想うているのじゃ」

途端、瑶姫の閉じた眼に、紳四郎が生き生きと映った。

（紳四郎――）

突如として瑶姫の中に倒錯が起こった。すると頑な体は軟かに上気し、自ら体を開いて晴信を求めた。

「諏訪」

晴信はその変化に驚いた。これまで天井に張りついていた無表情な目に光が射し、体を動かし始めた。明らかに興奮と欲情のうねりである。

「諏訪！」

再び口づけをしようと両掌で顔を挟んだとき、晴信は瑶姫の瞳に別な光影を見た。

「そなた――」

瑤姫の眼は晴信を見ているのではなく、別な何かを見ているようだ。
「諏訪」
激しく揺すると、ガラガラと音がするようだ。
（さては共寝をしながら、ほかの男と交合う妄想を見ているのか――許せぬ奴！）
晴信は一気に首を絞めようかという衝動にかられた。
そして手が瑤姫の顎から首の凹に落ちた。そのまま力を入れれば瞬時にして事は済む。
晴信は両手に全身の血が流れ込んでくるのを覚えた。
そのとき枕元の灯の火先がゆらゆらと動いた。そしてそれに合わせたように瑤姫の瞳が晴信に向いた。
（ああ、何と美しい眼だ）
その瞳に、あの神秘な湖が重なってくる。
途端、晴信はその手で瑤姫の髪をまさぐった。
（わしはこの女に生涯悩まされつづけるのか――）
「そなた今、何を見ていた」
「何を見ていたと？　ホホホホ、お館さまとしたことがおかしなことを……」
瑤姫が珍しく笑った。

「ほかの男に抱かれた顔じゃった」
「まあ」
図星を刺されハッとした。
「そなたの中にいる男は誰じゃ、聞かせろ」
「そのような妄想をなされて」
瑤姫は顔をそむけた。
「妄想ではない。わしの確信じゃ」
そう言いながら、晴信は自嘲した。
「ならば黙しておられるべきではござりませぬか」
手ひどいことを言うものだ。そうならば何が何でも吐かせねばならない。
「誰じゃ」
「――」
「吐かねばすぐに事は終わる」
と晴信は再び瑤姫の首に両手を廻した。
「そんな風に感じられましたか」
「刀の試合のようなものじゃ。相手の中まで透けて見える」
「……」

こんな所で、こんな様で殺されてはならない。瑶姫は撥ね起きた。
「それではそれを訊かれて、何となされます。お手打ちにでもなさろうと」
晴信は驚いた。
（なんと直截なもの言いよ）
こんな同衾は初めてだ。しかし、ここに送り込まれてきたほかの女たちも、初めはこんなものだったかもしれないとも思った。と、
「その男は既に手打ちになっております」
と瑶姫は口走った。
「何と？　誰じゃ」
晴信は狼狽えた。
「諏訪頼重にございます」
もう少しで声をあげるところだった。
ここ十日ほど、晴信はどの部屋へも行かなかった。今夜も晴信は仄暗い燭の灯に照らし出されて、独り天井を見つめている。
（諏訪頼重にございます）
と言ったそのことばに悩まされている。
端麗な頼重の顔が甦った。

（まさか――あの二人は本当の親娘だったのだろうか……）
疑えば疑うほど、怪しめば怪しむほど妄想は広がる。
（それにしても似ているではないか）
親娘だ――と思う一方、叔父・姪ということもある。
いずれにしても頼重は討った。そんな男に妬くことはない。
そんなことより、諏訪の心を奪うことだ。それには……、晴信は二転三転しながら考えた。そして得た結論は、
（子を生ませることだ）
子を生めば、彼女の心も変わるだろう。

六．西沢渓谷

（1）

天も地も凍りついた厳冬、甲斐、信濃の男たちは息を潜めて体を休めながら氷の溶けるのを待っている。

その間、跳梁するのは忍びたちだけである。

枝折戸の開く音がして、微かに足音が近づいてくる。

勘助は囲炉裏にくべる小枝を折る手を止めて聞き耳をたてた。氷雪を踏む音は、勘助にしか聞こえぬ音である。と、

「お頭」

くぐもった声である。

（あの声は――）

「入れ」

これも聞こえるか聞こえぬかわからぬような声だ。

濡れ縁の障子に影が映ると、男は小さくトントンと二つ縁の端を叩いた。勘助が咳払いをすると、男は音もなく戸を開けた。頭を黒衣で覆っている。

「近う」

囲炉裏の端に誘うと、男は影のように入ってきた。

「どうじゃった」

「はっ、高遠の保科殿が福与城に発たれました」

（ほう、保科殿が）

勘助が忍びを送ったのは高遠である。高遠城主頼継は、諏訪の総領家を奪おうと武田に与したが、逆に武田に宮川河畔でやられてしまった。

以来、甲斐征伐を考えるようになった。それには、隣の福与城主藤沢頼親と、府中林城の小笠原長時らの合力が必要だ。そこで何度か使者を送ったが、いい返事が得られなかった。

そこで頼継の重臣、保科正俊が自ら出向いていったというのだ。

「そうか」

勘助は、懐の中から紙にくるんだ銭を渡した。すると男は音もなく消えていっ

た。

高遠の智将をもって知られる保科正俊が直々動いたとあれば、高遠・藤沢・小笠原は起たざるを得まい。

夜を待って、勘助は晴信の居室にやってきた。

「お館様、高遠の保科がわざわざ藤沢と小笠原の説得に出向きましてござります」

「ほう保科が」

「三家が連合するとなると兵力はこちらより優りまする」

「したが連合するかな」

信濃は甲斐とは異なり広大である。そして、山や川の狭間にひらける幾つもの盆地には、諸豪族が山城を築いて睥睨している。

しかし、信濃一国という意識に乏しく、連携しようという気風がない。

それが信濃の頑な精神風土であり、ことばを換えて言えば孤立的だ。

ゆえに連合できるかどうかわからないと晴信は思っている。

では甲斐はどうか——ここも屏風を立て巡らしたような高い山脈に囲まれた盆地で、古来、「峡国」という字を当てたくらいだ。

米の取れ高も十数万石。暴れ川に苦しめられ、夏は暑く、冬は酷寒の地である。

そこで目指したいのは相模や駿河だ。何しろ温暖で豊沃、まさに垂涎の地であ

る。

しかし、そこは強大な今川氏や北条氏が根を張って、手の出せるところではない。ために父信虎は娘を今川に嫁って誼をつけた。

いずれ晴信も、わが娘を今度は北条に嫁らねばと思っている。

よって、土地を拡げるとなれば、北の信濃を目指さざるを得ない。たとえそこも寒冷な山国であろうと……。

その手始めが諏訪だった。そして次は高遠、藤沢、小笠原である。

天文十四年（一五四五）四月に入ると風も和み、田植えが終わる時期を待って、いよいよ高遠攻略の臍を固め、七千の兵を率いて諏訪の上原城へ入った。

今度は何としても殲滅しなければならない。

昨年の十月、五千の兵をもって諏訪上原城に入り、城将の板垣信方の兵一千を併せて藤沢頼親の拠る福与城の前衛、荒神山の砦を攻めた。

ところがこのとき、高遠城の頼継と林城の小笠原長時に側面と背後を衝かれ、大いに苦戦して兵を失い、上原城へ引きあげたという苦汁の体験があるからだ。

（奴等は連合したか）

多分それは、高遠の保科正俊の弁舌が余程効いたからだろう。

（保科の奴）

晴信の脳裏に残ったその男、保科正俊を、三年後には己が所に抱えようとはこの時には思いもよらない。

そして今、晴信は勘助を前にして戦略を訊こうとしている。

「今度こそは兵を損わずに落とさねばならぬ。いい策はあるか」

すると勘助は片眼を細くしてあの薄ら笑いを浮かべた。見馴れてはいるが、やはり薄気味の悪い顔だ。

「ござります」

言下に答えたところをみると、余程自信があるようだ。

「どのような？」

それにしても、この無気味な薄ら笑いは何を考えているのやら……。

「申せ」

「では」

勘助は一膝のり出すや

「鉱山にござりまするよ」

と言った。

「山じゃと？　どの山じゃ」

「ただの山ではござりませぬ。黒川鉱山にござります」

「黒川鉱山じゃと？　それが何じゃ」

「鉱山の坑夫がどんな仕事をしているか、高遠辺りもわかっている筈にござります」

甲斐に沃野は少ないが、金鉱があることを発見したのは信虎の父、信縄の頃であろうか。

黒川のほかに芳山、黒柱山、金山などあるが、金鉱は豊富でも母岩が硬く、それに対して採掘の技術がともなわず、信虎のとき諦めてしまった。それを、晴信が再開した。

これを黒川衆、金山衆と言って保護するのは先のことで、ともかく坑掘り人夫は地獄の苦役だ。

その坑夫に、高遠の男たちを送り込むという宣伝である。

「うーむ」

晴信は唸った。大名家育ちの晴信には、そんな発想もなければ、第一、鉱山の男たちがどんな苦役を強いられているかも知らない。

「おぬし」

「何でござりまするか」

「そんなことをよう考えつくものじゃな」
「それは諸国を経歴りましたゆえ。表と裏を見てまいりました。人が何を恐れ、何に苦しむか、それはお館様にはおわかりになりますまい」
「そうか、では追い追いに教えてくれ」
「いや、お館様にはそんなことまで」
そう言うと勘助はまた笑った。それから、
「男ばかりではございませぬ」
と付け足した。
「男ばかりではないとなると、女子までもか？」
「はい」
「女子を何に使う」
「女子は女子の使い道がございまする」
「……」
「つまり鉱夫相手の遊女で」
「――」
「そうした噂を、前もって高遠城下に流すのでございます。すればまず城下の人々は狼狽えましょう。城下のみか、城中の女たちも――」

「するとどうなる」
「逃散いたしましょう」
「……」
そんな噂は、城下の村人や女たちには効果があっても、武士たちに通ずるものでもなかろうと思う。
「噂ぐらいで動くかな」
「噂ほど人の心を衝くものはございませぬ。ですから、誇大であればあるほど」
「どこで見てきた」
「いや、この年になりますと、人の心も見えまする」

（2）

晴信が軍を発したのは、風の心地よい四月十日であった。七千の軍勢を十余隊に分けて進む。その中でひときわ目立つのは三百ほどの「赤備え」である。進む方向は、一旦諏訪の上原城に入り、それから杖突峠を越える。
杖突峠とは、諏訪と高遠を岐ける高峻な峠で、難所であるばかりでなく、軍事的な役割りも持っている。

即ち、高遠にとっては防壁であり、幾つも曲りくねった峠路は、敵を挟撃するのに恰好な場所でもある。

ところが峠にさしかかってもどこからも挟撃らしいものもなく、そのまますんなりと高遠領に下りてしまった。

それからは山間の路を一路突っ走ったが、どこからも矢一本とて飛んでこない。

（おかしい）

と思うのは晴信ばかりではない。つづく兵たちまでも怪しんでいる。

「敵はいずれに」

「どこに隠れたのじゃ」

「気をつけよ、抜かるな」

口々にそれを言いながら、不気味な静寂に却って気後れさえ覚える。

既に町中の入口にさしかかったというのに、道筋には人っ子一人、子どもの影さえもなく森閑としている。

全隊そこで休止、直ちに物見が放たれた。こんな奇妙な現象に、兵らは怪しみながら気勢を削がれてしまった。

「どういうことじゃこれは」

「戦さの相手がおらんではどうにもならぬ」

「どこへ失せた」

「いや、近くに隠れているのやもしれぬぞ。気をつけろ」

そう言いながら緒戦の前で大あくびである。

そうして暫くすると、数人の物見が戻ってきた。

「お館様、奇妙なことにござります。城の内も町中も、人っ子一人おりませぬ」

「ということは」

「逃散にござりまする」

「逃散か」

それがまことなら、山本勘助の戦略は図星である。それにしてもあまりに薬が効き過ぎた。

そこで一隊のみを引き具して城に近づいた。途中、三、四人の村人に出会ったが、いずれも白髪頭の年寄りで、体を震わせながら手を合わせられるばかりだ。

城門をくぐったが衛士もいない。四方に目配りしながら中へ入っても人気はない。あちこちへと兵が走り探っても、まさに裳脱けの殻である。

「誰もおりませぬ」

「いませぬ」

と戻ってきた兵たちから口々に言われ、まさに高遠は戦わずして武田の手に落ち

たようなものである。兵たちも改めて「男は黒川、女は売女」という流言の恐ろしさを知った。

先隊につづいて晴信の本隊が高遠城の大手門をくぐったときは、暮色が山を包みかけていた。

本丸の櫓に上ると、一望畑地がひらけ、眼下に三峰川の音が聞かれた。

「勘助、そちの流言はちと薬が効き過ぎたようじゃな」

「はい、まさかこのように効こうとは——私奴も驚いております」

「しかし、一戦も交えずとは頼継奴、逃げ足の早いことでは戦史に残ろう」

「ハハハ……」

「ハハハ……」

と笑い合ったが、その笑いには今一つ豪快さが欠けていた。

兵たちが出ていくと、城内は再びガランとなった。そこで薄暗くなった階段を下りかかった。そのときである。

「おのれっ！」

という声とともに、どこに隠れていたのか一人の男が飛び出してきた。そしていきなり晴信の背をめがけて鋭い一閃を浴びせた。

あまりの唐突さに、晴信は階段を踏みはずして下までゴロゴロと転がり落ちた。

それが晴信の命を瞬時に拾った。影のように躍り出た男は討ち損じたとわかるや、二の太刀を浴びせることなく薄暗がりの中を遁走した。

「お怪我は？」

「おお、無人かと思いきや、一人ぐらい高遠にも気骨の男がいたようじゃ」

そう言って起き上がった晴信の顔面は、蒼白である。

勘助は飛鳥のように消えた男の行方を追おうとしたが、既に闇が濃くなりつつあった。

「よい、一人ぐらいそんな男がいても」

晴信は間もなく平静に戻っていた。

「はあ、しかし、どこに隠れておりましたやら、一通り城内を検べてあったはずでござりましたが……」

「狙う気があればどこでも隠れる所はある。しかし、びっくりしたぞ」

晴信は苦笑いした。

「やっぱり油断はなりませぬ」

裳脱けの城と安心してか、晴信の周囲に兵や近習たちの姿がなかった。

そこを狙撃されたようだ。

「したが奴は一体何者であったろう」

勘助は、薄暗くなった櫓に躍り出てきた若い男の横顔を、どこかで見たような気がした。しかし、咄嗟のこととて、どうしても思い出せない。

「いずれ頼継の忠義者でございましょうが、この薄暗ではわかりませぬ」

それから二人は無言で城を出た。しかし勘助は、しきりとその男を記憶の闇から炙り出そうとしていた。

伊那制圧を果たした武田軍が、一旦諏訪へ入り、それから意気揚々と甲斐路を凱旋してきた。

出征と異なり帰還となれば、兵たちの顔もゆるみ、晴々としている。

それも一戦もせずに凱旋するのだから面白いくらいだ。

「こんな戦さは初めてじゃ、一体高遠はどうなっとった?」

「それはあの噂のバラ撒きよ」

「『男は黒川、女は売女』か」

「そうじゃ」

「したがこれほど効くものかのう」

「そりゃそうじゃ。おぬしじゃとてそんな噂が流れたらどうする?」

「うーむ」

そんなことを口々に饒舌りながら帰途についている。

その中で勘助のみ気が晴れない。

(あの男を……)

瞬時ではあったが、あの暗がりの中で、どこかで見たような気がしたのである。

(どこで――)

晴信に向かって「おのれっ!」と斬りつけてきたということは、晴信に相当の恨みを持った者でなければならない。

(となると、諏訪か高遠)

すらりとした体つきの、俊敏な若者だった。

自分の記憶に少しでも残るような若者だとしたら、雑兵ではない。

勘助は記憶を追いながら、無言で古府中の町中に入ってきた。

そのとき脳裏に、一人の映像が閃光のように浮かんできた。

(奴ではないか!)

三年前の諏訪攻略の終盤、板垣信方と共に登っていった桑原城で、諏訪頼重の側に座っていた若者。

更にもう一つの記憶がある。瑶姫の輿が諏訪満隆の屋敷を出るとき、万感の眼差しを送っていた若武者。

あの眼に恋の火が燃えていたことを、そのとき気付いたものだ。
（もしやして、あのときの若武者ではなかろうか）

（3）

躑躅ヶ崎館の裏門から二十騎あまりの武者が出てきた。その中でひときわ目立つ栗毛の馬の主は、お館晴信である。
ところが驚いたことに、晴信は己の前に一人の美しい女人を抱えている。
女を乗せての相乗りは、かつて妹の禰々を乗せたことはあっても、側室を乗せるなどということはなかった。
そんなことをしようものなら、三条ノ方の逆鱗に触れることになるからだ。
ところがそんなことなど頓着なく、白昼、堂々と美女を抱えて出てきたのである。
女は言わずと知れた瑤姫。しかも、微行をねだったのは瑤姫だった。
「このような館の一室にいては息が詰まりまする。諏訪では毎日のように馬を駆って湖の畔を走りましたものを……」
そのときの相手が紳四郎だったということだけは禁句である。

晴信はそれを聞いて、自分も瑤姫と一緒にあの湖畔を走ってみたいと思った。
（さぞ心地よかろう。いや、美しかろう）
二十五歳の晴信の夢である。
ともかく晴信は閨でいつもせがまれる。そうなるとつい自分もその気になる。
「そうじゃな、わしもそなたを抱いて走ってみたいぞ」
「そうでございましょう。どんなに爽快でございましょう」
「うん」
いよいよその気になる。
「ではどこへ行きたいのじゃ」
「それはやっぱり諏訪でございます」
「そういうわけにはいかぬな」
「なぜでございます」
「諏訪へ行けば、どこからそなたを奪いにくる輩が出でこぬとも限らぬ」
頼重亡き今、瑤姫は諏訪の宝である。黙った瑤姫に、
「諏訪へ帰るときは、そなたがわしの子を生んだときじゃ」
と晴信は期待をこめて言う。しかし、そんな晴信に答える瑤姫ではない。
「では、いずこでもよろしゅうございます」

ともかく外へ出たいのだ。
そう言われるとそこは若い晴信、その気になる。
「どちらでござります？」
「さあ、なあ」
と晴信は含み笑いを残して部屋から出ていった。
そしていよいよその日がきた。早目の午餉を済ますと打ち合わせ通り瑤姫は目立たぬ恰好で野跨を着けて、真志野と共にこっそり裏門に出てきた。
そこには既に野駆け姿の十七、八騎が待っている。男たちは、お館様が愛妾を伴うとは知らず、いずれも黙している。
程なくして栗毛の馬に跨った晴信が現われた。常の晴信と違い周りの目を忍ぶ編笠と、地味な野跨姿である。
すると物陰からつと野袴を着けた二人が現われた。編笠で顔を覆ってはいるが、姿からみてどうも男ではない。
その一人を晴信は手をとって軽々と己の前に跨らせた。そしてもう一人を近侍の後ろに跨らせた。扈従の武者たちは吃驚したが、声をあげるわけにはいかない。
と、そこへ館の中から一人の男が飛び出してきた。
「お館様、それだけはご遠慮願わしゅう」

飯富虎昌である。やっぱり女だった。それにしてもお館様も女も大胆である。それを、
「よいのじゃ、虎昌殿、わしが尾いてござる」
と制したのはなんと勘助だった。
門を出ると一行は、まるで疾風のように町並みを抜けた。晴信としては、こんな微行を城下の者たちに知られたくないからだ。
その速さに、瑤姫は折々悲鳴をあげた。すると晴信は、
「大丈夫じゃ、わしがしっかと抱いておる」
その通り、晴信は風に戦ぐ瑤姫の黒髪の匂いを嗅ぎながら、その肉体を抱きとめている。
出征にも似た興奮が五体に漲る。
瑤姫もまた、これまで体験したことのない疾走に、半分恐れと興奮を覚えた。
そうして暫く駆けると、馬は並足になった。脚下に川が流れている。
「何という川ですか」
「笛吹川じゃ。源流は甲武信ケ岳」
その彼方に、雁坂、破風、木賊、甲武信ケ岳の山脈が連っている。
石和の温泉にさしかかったとき、晴信は瑤姫と一緒に入ってみたいという欲望に

かられたが、抑制した。三条ノ方の耳にでも入ったら大事だ。とばっちりは瑶姫の身にふりかかる。

そんなことを思いつつ行くと寺の大屋根が見えてきた。

「恵林寺じゃ」

晴信が名指しで示したのは寺である。二百三十年ほど前の元徳二年（一三三〇）、夢窓国師によって開かれた寺である。後年、この寺を菩提寺とし、「信玄」と改めた晴信の骨を埋めることになる。

そこで馬を一服させると、瑶姫は行き先を訊いた。

「一体どちらまで？」

「笛吹川の上流、西沢渓谷じゃ」

よくそんな所まで、我儘を聞いてくれるものだ。

三富までくると、眼下に見下ろした笛吹川も、岩を噛んで音をたてている。そして岩に阻まれた水は青い淵となって静止する。

「これからは歩くのじゃ」

と言われて馬から降りる。すると晴信は膝を折って瑶姫に背を向けた。

「？……」

「さあ、負われよ」

幼い頃、真志野の背に負われた記憶はあるが、男の背は初めてだ。躊躇っていると、

「何をしておる」

と促された。そこでおずおずと晴信の背に体をもたせかけると、晴信はしっかと瑶姫を負い、急な斜面を下りはじめた。

（男の背に負われるなんて……）

羞恥と躊躇が体を強張らせるが、晴信は軽々と負って渓谷の側まできた。そこで下りると、

「どうじゃ、いい眺めであろう」

晴信はうっすらとかいた額の汗を拭った。

供の者たちは、目のやり場もないくらいだ。

（お館様は余程姫を愛うておられる）

妬ましいほど羨ましい。

巨岩を噛んで撥ねる水沫を浴びながら、

「おーい、こちらへこいよ――」

と呼びかける晴信に、瑶姫は野袴の裾をまくりあげて流れに入る。清流の勢いで体までとられるようだ。それにしても爽快だ。

そしてどうやら晴信の立つ巨岩まで辿りつくと、晴信は手を伸ばして瑤姫を抱きあげる。

それは一幅の絵に似て、恩讐を超えた若き男女の遊戯である。

「どうじゃ、爽快であろう」

「はい」

晴れ晴れとした顔に、晴信は瑤姫のもう一つの顔を見る。

(元来諏訪は、こんな風に明るい女なのかもしれぬ)

それを暗いものにしてしまったのは、この自分だろう。

巨岩の上で笑顔で座す二人を、離れた所で見やるのは勘助である。

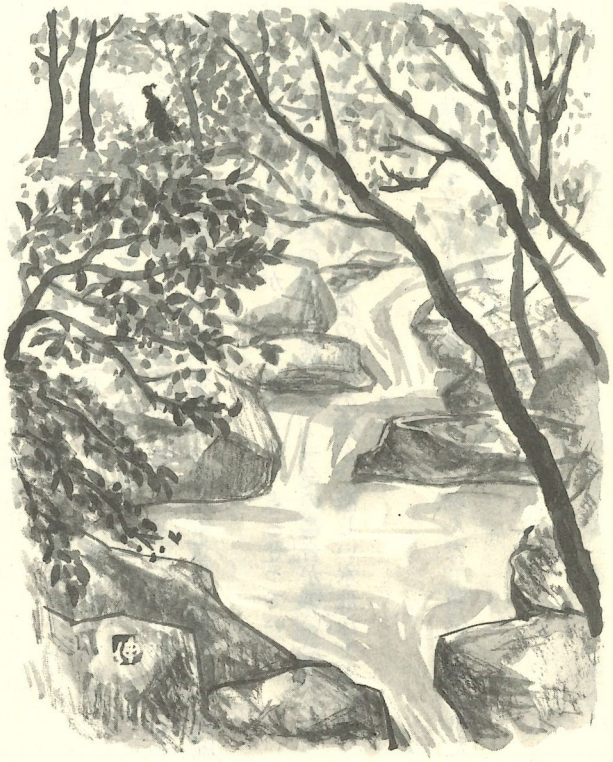
(お館様のお顔の何と晴れやかなことよ)

こんな顔をついぞ見たことがない。こうした冒険まで敢えてするほど、瑤姫を愛して止まないのだ。

それから晴信は、深い山間を削る笛吹川の上流、西沢渓谷へと瑤姫を誘った。

遅鳴きの鶯の声が聞こえ、咲き残ったしゃくなげの赤い色が見える。

幅を狭めた渓流はいよいよ瀬音を高め、巨岩奇石を滑りおちる水はますます透明である。「七ッ釜」といわれる淵と滝までくると、瑤姫は水の勢いにのまれそうになり立ち止まった。



「どうじゃ、一緒にこぬか」
そう言われても、野袴の裾や袖を濡らしてしまって動けない。
晴信はそんな瑶姫を尻目に、全身水を浴びながら七ッ釜を登っていく。
鳥の声も、人音も滝の音に消える中で、
「おーい、ここまでこいよー」
と晴信の声がする。見上げると、七ッ釜のてっぺんに立った晴信が、両腕をあげて仁王立ちになっている。
供らはそんな晴信を見上げながら、岩場を一歩一歩と登っていく。
そのときである。西沢渓谷の静寂を破って、一発の轟音が響いた。
と、七ッ釜上段に立っている晴信の足許の水が、激しい水飛沫をあげた。
「お館様ー」
「お館様ー」
武者たちは一瞬棒立ちになり、一斉に左の方角を睨んだ。晴信は弾かれたように身を翻すと、傍らの木陰に身を潜めた。
そのとき、高い左岸の木陰に、チラと黒い影が動いた。
「お館様」
「曲者はあの辺りにござる」

バラバラと三人が水を蹴って岩場へ上ると、それから馬を繋いだ崖の下に走った。
瑶姫は体が震えた。
（もしやして――あれは紳四郎ではなかろうか）
まさかこんな所へ尾けてこようとは……。
瑶姫の六感である。
「あっちじゃ」
「あっちの方角じゃ」
口々に叫びながら武者たちが追っていく。それを尻目に、勘助はゆっくりと晴信に近づいていった。

その夜晴信の居間に集まったのは微行に従った中の五人である。
事の重大さに誰も口を切らない。信虎以来、統一した甲斐の頂点にある晴信である。その晴信が、こともあろうに、領内で狙撃されたのだ。
「高遠の残党の者にござりましょうか」
口火を切ったのは虎昌である。
高遠といえば、入城したその日の薄暮、刀で襲撃されたことがある。しかしそれ

は誰にも明かさず、晴信と勘助のみの秘め事である。
「高遠者と考えるのには誰も異議はござりませぬが、何ゆえあの時刻、あの地点で待ち受けていたかということでござります」
晴信を含めて六人の疑念は唯一そこにある。
「いや、待ち受けていたというものではござるまい。つまり、館を出るときから尾いてきたか、それとも途中でそれを知って、尾いてきたということも……」
「うーむ」
一同は唸った。
「それにしてもわれらは全く気がつかなかった」
「それではお館様」
と虎昌が訊いた。
「お館様は御寮人様に、日時と場所を前もってお伝えなされておられましたので？」
「いや、日時を教えたのは前日じゃった。したが行く先は」
そうなると、瑶姫の疑いは晴れたようだ。
しかし、疑いは晴れたとしても、妬心に身を焼く三条ノ方や、他の側室たちはどうであろう。

一旦はそれを考えてみたものの、瑶姫を狙うことはあっても、お館武田晴信を殺すことなど考えられない。
こうして一通り、疑うべくは疑ってみたが、つまりは女たちの疑義は排した。
そんな狙撃者のことより、晴信にとっての衝撃と課題は鉄砲（火縄銃）である。
鉄砲は二年前、南の種子ケ島に伝来した。以来、恐ろしい速さで普及し、堺や紀州、近江あたりで製造られ始めている。
既に晴信の所へも、今川義元から一挺の鉄砲が贈られてきた。
しかし、それは今もって床の間の飾りでしかない。
というのは、鉄砲の取り扱い方や、撃ち方など、そんな知識や技術を伝えられたわけではないからだ。
つまり鉄砲なるものが、武器としてどれほどの威力を持っているかについては、この時期まだはっきりしていない。
あの樹林の間から晴信の立っていた距離は、三十間ほどのものであったろうか。
それなら矢で十分だ。それを奴は鉄砲というものを使った。片や射抜くものであり、片や撃つものだ。
どちらに威力があるかどうかはわからぬが、そんな先進的なものを使ったということに驚異を覚える。

（一体奴はいずれの者で、鉄砲どこで手に入れ、どこで技を身に付けたのか）
そして、何ゆえ晴信を狙ったかだ。
「何をお考えで……」
勘助が訊いた。
「ああ、われらもいよいよ鉄砲なる武器を買い入れるか、製造えることをな」
「ごもっともにござりまする」
鉄砲については、勘助の方が既に知っていた。西国の方が先進的で、この山国甲斐や信濃ではまだそれを武器とした戦さはない。
しかし、これを機に、武田も火縄銃の発注と装備を考えねばならないだろう。
結局、あの一発の銃声は、敵が誰かという詮議よりはさておき、晴信に、新兵器鉄砲の導入を決意させたようだ。
ところでこれは余談になるが、晴信の装備した武田軍団の鉄砲隊が、威力を発揮することはなかった。
それは当時の火縄銃が、発火、発砲するまでに時間と手間がかかり、弓矢と刀剣の方が速さと威力があったからだ。
そして武田軍団が織田信長との「長篠の戦い」で、信長軍団の鉄砲の一斉射撃を浴びて敗退するのはこれから三十年後、そのとき既に晴信は亡いのである。

次の日の夜、晴信は瑶姫の部屋に現われた。
心なしか晴信の顔が硬い。側女との添寝のとき、あの件は特に持ち出すまいと思った。
「ところでどうじゃった、遠出のことは」
いつもの顔である。
「楽しゅうございました。あんな渓谷へ行ったのは初めてで——また行きとうございます」
「したがな、狙われるようでは……」
「はい、吃驚いたしました。いずれの者があんなことを」
思いに沈んだような眼差しは、晴信を思いやってのものであろうか——。
「そなた、何か思い当たるようなことはないか」
「わたくしが何を？」
瑶姫の眼が俄に強く撥ね返ってきた。
「いや、もしやして、諏訪辺りの者がわしを付け狙っていはしまいかと」
「さあ、それはわかりませぬ」
と瑶姫は否定しない。

「そなたをここに押し込めたからな」
「それもありますが、何と言っても頼重様をお手打ちなされましたから」
またして父と言わずに頼重という。
「諏訪よ、頼重殿の名は口にするな」
「……」
二人は褥に互いの肢をからませながら、目は天井に張りつけたままである。
（この溝はどうしても埋められないか）
晴信は吐息をついた。と、急に咳が突きあげてきた。すると咳は咳を呼び、激しく喉を震わせる。
「どうなされました」
瑶姫は上体を起こして晴信の背をさすった。そうして背をさすられながら、晴信は妙な敗北感にも似たような気分になった。
ところが瑶姫は、晴信の背を撫でながら、樹間を矢のように走り去った男の姿を浮かべていた。
咳がおさまると、晴信は仰向けになった。
「諏訪よ」
急にやさしい声で呼ばれ、瑶姫は七ッ釜の男の姿を慌てて消した。

「何か？」
「子を生め、わしの子をな」
「……」
「さすれば怨念は消えよう。男なら諏訪を取らせる。武田と諏訪を血で結ぶのじゃ」

七．勘助の恋

（1）

昨夜来の雨は朝になっても止まず、昼を過ぎると、ますます勢いを増し、まるで滝のように屋根や板戸を打ち出した。するとみるみる庭は湖のようになり、路も川のようになってきた。

夕近くなって、表曲輪の方で喧騒が起こり、男たちの動きが伝わってきた。

瑶姫は聴き耳をたてた。

「一体何でしょう、あの騒ぎは。こんな雨の中を、戦さにでも出かけるのかしら」

「そうですね。見て参りましょう」

真志野が廊下へ出ると、吹き込んでくる雨で廊下はまるで水を流したようだ。

足袋を脱いで水浸しになった廊下を表の方に急ぐと、あちこちから武者たちが笠に蓑を着けて東曲輪の方へ続々と集まっていく。

「何か緊急のことが起こりましたか」

早速真志野は尋ねた。すると、

「洪水じゃ」

という返事が戻ってきた。

「洪水ですと――」

この雨の降り方と城内の慌しさから見て、只事ではないようだ。

「お館様も既に出られた」

この出水の騒ぎに、晴信も既に館を出たという。

甲斐の盆地は、釜無・笛吹・荒川などの諸川が合流し、古来からしばしば大水害を蒙ってきた。

特に盆地の西部、釜無川と御勅使川の合流付近は、甲斐にとって最大の水防の難所である。ゆえにここが決壊すれば、盆地一帯に氾濫して大水害を起こしてきた。

釜無川は甲斐駒ヶ岳山頂の北西に源を発して、甲信国境を迂回して南東に流れ、大武川・塩川などの諸川を合わせて甲府盆地に入る。

一方、御勅使川は芦倉山を水源として北東に流れ、八田付近で釜無川に合流する。

日頃水量は少ないが、大雨になると忽ちにして大出水となる。
年来、武田はこの大洪水と戦ってきた。
そして天文十年（一五四一）晴信は父に代わって国主となるや、翌年から長期の計画を立てて築堤の工事を始めた。
即ち、御勅使川の分流工事と、釜無川の築堤である。
晴信にとっての戦いは、国土拡大の信濃攻略と、自領の治水工事である。
その釜無川と御勅使川が、工事を押し流して、八田村や近在を泥の海にしてしまっているというのだ。
兜に替えて笠を被り、鎧に代わって蓑を着けると、晴信は人足となった兵らを従えて八田村を目がけて出ていった。
（甲斐の領主は大変じゃ）
真志野は水浸しの廊下を歩いて部屋に戻るや否や言った。
「洪水でございますよ。既に、お館さまも蓑笠を着けて出て行かれたそうにございます」
（あのお方が蓑笠を着けて……）
そんな姿は浮かんでこないが、領主自らが蓑笠を着けて現場へ急がなければならないとしたら、甲斐は大変な所である。

やがて辺りは暗くなってきた。すると雨は少し小止みになったが、吹き募る風の勢いは一向におさまらない。
その度にガタガタと下見板や戸の動く音がする。
と、風の合間に、別な音がする。
（あれは風に動く戸の音ではない）
どうも人の叩くような音である。
立ち上がると障子戸を開けて縁側に出た。
「どこへ行かれまする？」
真志野は訝った。
「聞こえないか」
「戸の音ぐらいで何もわざわざ出ていかれなくとも」
「いや、風ではない。人の叩く音じゃ」
「まさか。こんな雨の夜に――空耳でございますよ。さ、早くお戻りを」
とは言ったものの、一緒に聴き耳をたてた。すると確かにコンコンと響く音は、風に動かされる音ではない。
「誰じゃ？」
抑えながらも太い声で真志野は言った。すると、微かに戻ってきた声は、

「紳四郎にございます」
と言うではないか。
「姫さま、紳四郎と申しております」
「なに、紳四郎じゃと!?」
瑤姫は駆け出すようにして縁側へ出ると低声で確かめた。
「そこにいるのは紳四郎か、間違いないな」
「はい、紳四郎にございます」
覚えのある声である。真志野はすぐに戸を開けた。すると全身ずぶ濡れの男が縁に這い上がってきた。
「姫さま」
「紳四郎」
あれから三年もの月日がたっているのだ。
真志野は隣り部屋に伴うと、紳四郎の体を拭い、黒い着物に着替えさせた。
「したがどうしてこんな所へ――」
「嵐の夜、お館が出たのを確かめて忍んで参りました」
「よくもこんな所へ」
二人は危険の中にいることを忘れて抱き合った。抱き合えばそのまま前後を忘れ

て倒れるばかりである。
この一瞬が、この時間が、どれほど待たれたことか。貪り合う熱情に、時も嵐も忘れていた。
これまでになく激しく、濃厚な抱擁である。そんな二人に、咳払いの声が聞こえ、吃驚して離れた。
「今の声は？」
紳四郎の神経は尖っている。
「真志野のようじゃ」
「それでは姫様、暫くこの着物をお借りする」
と、早、立ち上がろうとする紳四郎を押しとどめた。
「今、そなたどこにいる？」
「お教えすることはできませぬが、古府中の町中でございます」
「それではもう一つ訊くが、もしやしてそなた、西沢渓谷へは行かなんだか」
「行きました」
「やっぱり。ではあのとき鉄砲を撃ったはそなたか」
「はい。よくおわかりになりましたね」
「いや、そんな気がしたのじゃ。したが鉄砲などというものを一体どこで？」

「そんなことを、お話ししているゆとりはありませぬ。ただ一つ言えることは、諏訪勢では晴信殿に勝てませぬ。やれることは、鉄砲で晴信殿を撃つことです」
「したがそんな物を、一体どこで？」
また同じことを訊き返す。
「あれからあちこちを歩き廻り……」
「それでは西沢渓谷までどうして？」
「私には仲間がいます。その一人が手引きしてくれました」
「諏訪の人ですか」
「勿論」
「では鉄砲もその人から」
「いや、それはまた別」
「ということは、そなたの仲間にはいろいろな人が」
「それは高遠もいれば佐久者も――武田に恨みを抱く者は幾らもござりまする」
ということは、必ずしも紳四郎が一人で動いているというわけではないようだ。
「姫様、いつか必ず姫様を諏訪に奪い返す手だてをいたしますゆえ、それまでのご辛抱」
そう言い残すと、紳四郎は風のように出ていった。

「待てっ！」
背後から呼び止められて紳四郎はドキリとした。気配からみて三、四人はいるようだ。
（逃げおおせるか――）
と思ったが、足がすくんだ。
松明をかざして近づいてきた男たちの様子から、ここの警備の者たちだとわかった。
「おぬし、今どこから出てきた」
蓑笠を着けた男の目が、松明の明りに鷹のように光っている。
女物をひっかけて出てきたが、おぬしと咎められたということは、やはり見抜かれたようだ。
（小柄一本で防ぎきれるか）
ともかく捕まったら万事休すだ。逃げるしかないと思ったが、逃げても館から外へ出るには堀がある。男が一人走り去ったということは、橋の詰め番に注進するためだろう。
「お女中の一人に会いたくて――」

紳四郎は女のようにしおらしく言った。
「誰付きの女中じゃ」
そう訊かれてまたハタと困った。女中の名なぞ知るべくも考えもしなかった。そこで仕方なく出まかせを言った。
「小りん」
「小りんじゃと？　おい、そんな名の女中がいるか？」
一人が訊いた。
「さあ、わしら女中の名なぞ知るかい」
捨て台詞である。
「小りんなぞと言うてもわからぬ。問題はどの側室かということじゃ」
紳四郎は首を振った。
「ということは、お前、闇雲に入ってきたのか。それにしてもよう詰番をくぐってこれたものじゃな。して名は？　どこから来たのじゃ」
咄嗟のこととて、茅野の家にいた小作の名を口にした。
「平作、原から参った」
「何！　参ったじゃと！　するとぬしはやっぱり小作ではないな。どうも怪しいと思うたが、小作が女物を着て潜入したとは只事ではない。直ちに捕縛せよ」

といきなり羽交い締めにされた。
（ことば遣いで暴れたとは――）
万事休すである。
そして小突かれながらよろよろと番所の方へ引っ立てられていく。
その間、どんな嘘をつき通せるか、考えつづけた。
と、闇の中から
「何事じゃ？」
と野太い声が近づいてきた。男たちはその声でわかったらしく、一、二歩引いて立ち止まった。
「痴れ者が西曲輪に潜入いたしましてござります」
そうしたことば遣いをするからは、現われた男はどうも上役のようだ。
小雨の中にゆらめく松明の明りに、笠の縁を持ちあげた片眼の男の顔が映った。
（アッ！）
紳四郎は心の裡で、絶望的な声をあげた。
この男に出会うたからは、逃げ果せる余地はない。絶体絶命である。
ところがその男は低い声で言った。
「何じゃ、誰かとみれば新右衛門ではないか。こんな所で一体、何をしておったの

じゃ」

と意外なことばを吐いた。

「いや、此奴はたしか、平作と名乗りましたが……」

「苦しまぎれの出まかせであろう」

「したが」

と男たちは疑いを解かない。

「新右衛門、一体何じゃその恰好は。大洪水でお館様まで出られたというに――此奴はこの頃おかしゅうなった。よってこんなときに、女中部屋に忍び込もうとしたのであろう。馬鹿な奴よ。いずれわしがきつく仕置きするほどに、ここは放してやれ」

「ハッ、それならば」

と紳四郎は羽交い締めから解放された。

「とっとと消せろっ！」

片眼の男のドスの利いた声に、紳四郎は虎口を逃れた。

それから先はどこをどう走り抜けたかわからない。

幸い雨は降りつづき、警備の姿もない。

裏門をくぐり抜けてどうやら館から離れた。

町中を行き来する蓑笠の男たちの中に紛れて町外れに急いだ。
（危なかった）
嘘をつき通せると思った。
しかし、あの片眼の男に出会ったときは、もうお仕舞いだと思った。
（奴は確か山本勘助。したがどうしてこのわしを、見逃してくれたのじゃ）

（2）

八田村を中心に泥の海と化した村の水が引くのに四、五日かかった。
引いてみると、流された家や泥をかぶって無残に壊れた家々、それに青田も泥の下である。
「これでは戦さは暫く中止じゃ」
戦さの精力を、内政に向けなければならない。
御勅使川を分流させるため、八田村六科の西に将棋頭という石堤を築かせている。それも半分ほど流されてしまった。
（こんなことで挫けられるか）
信濃侵攻が領土拡張にあるといっても、まずは本領の甲斐を万全にしなければな

らない。
晴信は被災民の救出と手当てと、築堤の工事にかかった。
そんな晴信の憩うところはやはり瑶姫の部屋である。この頃では瑶姫も、表を繕うことができる女になっている。
「甲斐は恐ろしい所でございますね」
と瑶姫は酒をすすめながら言うた。
「恐ろしいとは川のことか」
「はい」
「それはどこの国にもあることじゃ。それを治めるのが領主の務め、戦さばかりではないのじゃ」
「はい」
「したがわしは、生涯かけてこの水を治めてみせる。戦さとは何も信濃攻めばかりではない」
「水との戦さでござりまするね」
「そうじゃ、そなたも少しずつわかってきたようじゃな」
と今日の晴信は機嫌がいい。そして八田村六科の西に石堤を築いて、本流を北東に流し、釜無川との合流点で激流どうしを衝突させて相牽制させ、東岸の赤坂台地

の赤岩の崖下を衝かせるという構想を語った。
「したがこれもやってみなければわからぬ。何しろ相手は水じゃからな」
そう言いながら酒を干し、肴をつつく晴信を見ながら、瑶姫は、亡き父頼重にはないものを感じた。
ともかく、そうして得意になって酒と肴で胃の腑を満たした晴信は、とろりとした目で訊いた。
「ところで何か変わったことはなかったかな？」
「変わったこととおっしゃいますと――」
「一寸聞いた話じゃが、夜中、男がこの曲輪に潜入してきたという」
ドキリとした。
「城の男どもが一斉に洪水現場に出向いた夜じゃったそうな」
「そんなときに、男が何ゆえこの曲輪に」
瑶姫は内心の動揺を抑えながら、いかにも吃驚したように言った。
「うーむ。わからぬ。したがその男は女の物を着けていたという」
「ということは、初めからこの曲輪が目当て」
「そうじゃ。館の留守を狙ってくるとは、たとえ西曲輪とはいえ、不届きじゃ」
晴信の目が爛々としてきた。

「どこかの部屋子を目当てに忍んできたのでしょうか」
「そんなことは、これまで一度もない」
「ということは、わたくしをお疑いということで――」
瑶姫の目が挑戦的になってきた。
実のところ、晴信は疑っている。しかし、国主の留守に、側室の部屋に男が忍んでくるなどということは考えられないことだ。
ゆえに、半分疑いながらも否定している。
「いや、まさかそなたの所にくるなどということは」
と晴信は声を落とした。
それから話題が途切れ、なんとなく気まずくなった。そういうとき、それをとりなし、躱すのが女の役目。ところが瑶姫は不機嫌に黙り込んでしまった。
代わって晴信は、今度は手酌で酒を口にし始めた。
「お館さま」
「うん？」
「わたくしをお疑いなら、明日にでも諏訪へお帰し下さいませ」
（それを言うか――）
晴信は複雑な目を投げた。たとえ何があろうと、この女を手許から放すことはで

きぬ。まして諏訪へ帰すなど――。
「いや、そなたを疑うてなぞはおらぬ」
と盃を放った晴信は、いきなり瑶姫の手を取って褥に押し倒した。
そして押し倒すや否や、着物を剝ぎ、下肢を開いて抱き締めた。その狂おしいばかりの欲情を受けながら、瑶姫はあの夜の紳四郎を思い浮かべていた。
あのときも、このように激しい抱擁というより欲情の嵐であった。
目をつむると、紳四郎が目の前に浮かんでくる。指のまさぐり、手の動き、そして唇の雨。一緒になって恍惚の嵐の中に溺れながら行き果てて倒れた。
その快感を思い起こしてくれるような愛撫である。
（この男が紳四郎だったら……）
と思ったとき、
「諏訪よ、子を生め、わしの子を――そしたら諏訪へ帰してやろうぞ」
と晴信は喘ぐように熱い息を吹きながら言った。

（3）

それから三ヶ月ほどがたった。

すると瑶姫は体調の異常に気がついた。
「月のしるしがないのじゃが、どうしたのであろう」
「姫さま、それはご懐妊のしるしにございますよ」
真志野に言われ、ドキリとした。
「懐妊じゃと!?」
「女子の胎はそのようになっておりまする。おめでたいことにございます」
「めでたいと？　何がめでたい」
瑶姫は反発した。
「姫さま、これで堂々と諏訪に帰れるではございませぬか。お館さまとのお約束にござりましょう」
「ああ、そうじゃった。したが諏訪の衆は果たして喜んでくれようか」
「それは喜びましょう。姫さまがお帰りになるのですから。それにお子をお生みなさるとなれば、どんなにか」
「したが武田の子でもか……」
「たとえお胤が誰であろうと、姫さまがお生みになるお子でございますから」
（たとえ胤が誰であろうとなど）
真志野も疑っているようだ。

現に瑶姫自身、懐妊といわれたとき、ハッとしたのは、晴信殿か紳四郎かどちらの胤だろうかという迷いである。

「真志野」

瑶姫は困惑の目を投げた。

「ご心配なさることはありませぬ。多分お館さまのお子でございましょう。そうご信じなさることです。そうでなくてはこれからの姫さまの戦さには勝てませぬ」

「わたしの戦さ？」

「はい、もしお子が和子（男児）だったら、頼重さまのお跡を立てて、立派に諏訪大祝の跡目をお継がせなさることも叶いましょう。さすれば諏訪の衆も一つに集まり、諏訪の再興もなりましょう。そればかりでありませぬ。あるいは太郎殿（正室・三条ノ方の嫡子、後の義信）を凌ぐことになるやもしれませぬ。そのように仕向けていくのが女の戦いにございます」

真志野の目が光ってきた。

「でございますから、一刻も早くお館さまにお告げなさることでございます。すれば姫さまのお扱いも一段と変わりましょう」

「そうじゃの、わたしは諏訪へ帰れる。子ができたら、諏訪へ帰してやるとお館さまは言われた」

「そうですとも、和子さまのご誕生をお祈りいたしましょう」

「なにっ、諏訪が妊ったと!?」

晴信は思わず声をあげた。

側室の誰よりも華奢で、激しく抱くと壊れそうな体の瑶姫が妊ったというのだ。

あの前夜、瑶姫の所に忍び込んだという男のことなぞ、すっかり忘れている。

「そうか――」

不思議な感動が起こった。

ふと、頼重の顔を思い起こした。頼重の娘か、それとも愛妾だったかはわからないが、今彼女はどんな思いでいるのだろう。

（喜んでいるのだろうか、それとも……）

晴信は西曲輪の取り締まり役、富佐に伝えることを憚った。正室三条ノ方の耳に入れたくないからだ。

（となると……）

諏訪落城以来瑶姫に関わってきたのは勘助である。早速勘助を呼んだ。

「それはそれはまことに奇特にござりまする」

「ああ、したが彼女が妊ってくれるとは思わなかったぞ」

「お館様のお心が通じたのでござります」
そう言いながら勘助は、あの洪水の夜のことを思い出した。
（まさか――）
とは思うが、それを打ち消すこともできない。
（これはわしのみぞ知る秘中の秘）
勘助は秘かに呟いた。
「それで」
呼ばれたからは勘助が動かなければならないようだ。
「諏訪との約束じゃ」
「約束と言われまするとと？」
「妊ったらば、必ず諏訪へ帰してやると……」
「なるほど、それはよろしゅうござりまするなあ」
「そちもそう思うか」
「お館様の愛しき御寮人様にござりまするが、諏訪の人心をまとめるためには、御寮人様をお帰しになられるが上策と存じまする」
「うむ、わしもそう思うてのことじゃ」
「寅王丸君亡き今、もし和子（男児）ご誕生とあらば、まさに甲斐と諏訪を結ぶ紐帯」
寅王丸は母禰々ノ方亡き後、一年後に母の後を追うように身罷ってしまったのである。
「そこでじゃ、道中をそちが警護に当たってくれ」
「私奴が」
「桑原城での諏訪降伏以来、そちが関わってきたではないか」
「はっ、道中の警護につきましてはお引き受けいたしますが、約束とはいえ、よくも御寮人様をお手放しになりまするなあ」
と勘助は眇と唇に、皮肉な笑みを浮かべた。
「そちはそう言うが、ここに置いては、彼女の身が危うくなる」
「ということは、三条ノ方様の……」
正室三条ノ方の――というのは、西曲輪に住む複数の側室に、三条ノ方は監視の目を怠らない。かつてお香という名の側室が、晴信の愛を一人占めしているとして、川浦の湯の里へ送って密殺しているからだ。
そんな三条ノ方が、晴信の西沢渓谷行きを知らぬ筈はない。
その瑶姫が妊ったと知るや、三条ノ方の毒手がのびてくることは必定である。
「彼女の安全を考えてやらねば」

「承知つかまつりましてござります。で、いつ頃」
「早い方がよい」
晴信は苦笑いした。要は失いたくないのだ。晴信としては、生まれる子が姫ならばそのまま諏訪に置き、和子ならばいずれこちらに引き取らねばと考えている。

輿に従う武者は三十人、それに女人数名、その中に勘助がまじっている。
三年前の甲斐入りのときもそうだったが、勘助は影の如く付きまとう一人の若者の姿を目で捉えようとしている。
（奴は必ず現われる筈だ）
釜無川に沿って北上すると、左手に北岳の雄姿が連なり、更に駒ヶ岳の神秘的な稜線が見えてきた。
甲斐にきて何に魅せられるかというと、こうした山脈の荘厳さであろう。
（男惚れのする山脈）
駿河で見る富士とは異なる峻厳さである。
つい見惚れて、行列の前後左右の監視を忘れていた。しかし、林間や森の樹立ちの中に、鳥の動きや声を聞くことはあっても、人の動く気配はない。
そして小淵沢で旅泊。何事もなく明くる日はゆるゆると輿は進んだ。

すると行く手に清澄な湖の反射が光ってきた。
（諏訪湖じゃ――やっぱり美しい）
思わず見惚れる。甲斐の山脈は雄々しく美しいが、諏訪の湖の何たる神々しさよ――。
武田晴信ならずとも、この諏訪に惚れない者がいようか。
そんなことを思いながら山路から下りてきた。あたりは既に夕靄がたちこめている。
と、上川の畔にきたとき、後方から疾風のような一騎が一行の横をすり抜けて駆け去った。
「無礼者！　止まれっ」
と先達が怒鳴った。
そろそろ郡代からの迎えがくる頃だ。そんな刻限、後方から一騎、荒々しく馬蹄を鳴らして走り去るとは無礼を超えて尋常ではない。
「何者じゃっ」
虎昌は怪しんだ。
と、彼方から数名の武者と女の列が現われてきた。
「あっ、あれは正しく出迎え」

そこで一行の気がおさまった。

「道中、ご苦労でござった」

と労うのは板垣信方である。と、一行の中の一人が

「先程、後ろから疾風のように騎馬で横を走り抜けた無礼者がござったが、一体何者であろうか」

と口を尖らせた。

「はて、そのような者が？　われらには気が付き申さなかったが」

「お出迎えの皆々様の横を走り抜けませんでしたか」

「さて？……」

ということは、一行を追い抜いた後、道をそれたようだ。そんなことに関わっていても仕方がなく、一行は出迎えに従って一旦、元諏訪館の郡代屋敷に輿を下ろした。

瑶姫が懐かしい元諏訪館に入ると、板垣信方の配慮で、新造中の離れ屋敷に落ち着いた。

すると翌日から、噂を聞きつけて諏訪の主立ち衆が次々と挨拶にやってきた。まず大社の禰宜が現われ、それから上、下の諏訪から茅野辺りまでの人々がやってきたが、顔見知りはいない。

一通り目通りが終わってから、勘助は小声で訊いた。

「茅野伊豆守の子息殿はどうなされましたかな」

ハッとした。紳四郎のことである。

「そなた、紳四郎を知ってか？」

「はい、初めては桑原城で御寮人様の後ろに控えておられました。次は御寮人様の甲斐入りの輿に見え隠れに――それから西沢渓谷」

（まさか！）

そこで勘助はことばを切って一息ついた。

「次はこの春の大洪水の夜でござりました。夜陰にまぎれて西曲輪に忍び込んだ男――。捕らえられしも、私奴の機転で見逃してやりました。危ない所でござりました」

心の臓が止まるかと思った。あの夜、紳四郎は捕らえられたのか、あり得ることだ。それを勘助が見逃してくれたとは……。

（これで二度だ）

四年前、躑躅ヶ崎館で、晴信をすんでの所で刺すところを、勘助の機転で救われた。

「勘助」

「ハッ」
「そなた、どうしてこのわたしを……」
瑶姫の声が微かに震えた。
「主君、武田晴信殿の大事なお方にござりますゆえ」
そうしか言うことばはない。
（まさか卑しい自分が惚れているなどと……）
「そうか」
瑶姫はそれで納得するしかない。
それから暫く二人は無言になった。
すると遠くで子供の声が聞こえてきた。よく馴染んだ故郷の息吹きである。
（わたしもここで子を生む）
なんとも不思議な心地である。そんな感慨にふけっていると、
「諏訪に入りましたとき、行列の後ろから一騎、慌しくお輿の横を駆け去った者がおりました。どこから尾いてきたのか、待ち伏せていたのかわかりませぬが、私奴はこれから直ちに古府中に戻りますゆえ、もし彼の者なら、ご注意下さりませ。これからはお見逃しやお助けすることなど叶いませぬ。よって、呉々もお気をつけ下されませ」

そう言い残すと勘助は座を立つや片脚を引きながら背をかがめて離れていく。その後ろ姿が妙に淋しげで、瑶姫は思わず
「勘助！」
と呼びとめた。
「はっ？」
足を止めると勘助はやおら振り返った。
「そなた、ここに留まることはできぬのか」
できたらこの男の助けが欲しい。すると勘助は眩しそうに片目を細めながら首を横に振った。それから言い忘れたのか、
「いいお子をお生み下され。そうしましたらこの勘助、命に代えてお子をお守りいたしましょうほどに」
そう付け加えると、また一礼して出ていった。

瑶姫が男児を出産したのは天文十五年（一五四六）、諏訪の山々が錦繡に色づき始める頃であった。
「姫さま、お見事、和子さまでございますよ」
何度も押し寄せてくる肉体の激痛に耐えながら、下半身が割れ裂けたかと思った

瞬間、部屋に響き渡った呱々の声に、瑶姫は薄れゆく意識をとり戻した。
そして和子さまでございますよ——と耳許で弾く声に、生気が蘇ってきた。
（和子か——）
ならばこの子は諏訪の名主。再び甲斐へなぞ戻してはならぬ。そして父上とわたしの意志を継いで、諏訪大祝と上原城の主に——。
そう呟くと、睡魔に襲われた。

八．信濃烈風

（1）

「諏訪（姫）が和子を生んだと！」
晴信は格別な感慨に襲われた。
八年前、十八歳で、正室三条が長子太郎（後の義信）を生んだときはこうではなかった。
若さゆえに、ただただ女体に溺れ、連日のように妻の部屋に入りびたった挙句、子を得たときは、喜びというより、そういうものかと思ったものだ。
それから二男、三男とつづいたが、二男は幼にして盲い、三男は脆弱で夭折した。
そして生まれた四男は、愛しい女の生んだ子である。今にでも諏訪に走って、諏

訪姫の手を取り、嬰児を抱きたい思いだ。
（こんなにわしは彼女を愛うていたか）
思わず苦笑したくなる。
（わしに似ているか、それとも諏訪似か）
そのとき頼重の顔が過って、ドキリとした。
（まさか！）
そう思えば思うほど諏訪へ走りたくなる。しかし、それはできぬことだ。
ともかく「四郎」という幼名を筆にして、祝いの金品と共に使者を送った。
送ると早速、手がけている仕事にかからねばならない。「法度」の作成である。
「分国法」ともいわれる法度は、この頃、相模の北条氏や駿河の今川氏はもとより、中国の毛利氏も既に発布している。
（甲斐も急がねば）
ということで、重臣たちを相手に日夜話し合いをしてきた。
そこで、「今川仮名目録」を下敷きに作成することになった。
内容はおおむね主従領民の道徳倫理の基本である。そして末尾に、「晴信がこの法に違背したときは、貴賤をとわず目安にて申し出よ」という一文を書き添えることにした。

これは晴信独特のもので、自らの覚悟を示したものである。
工夫の法度が出来上がり、公布したのは翌天文十六年（一五四七）の六月であった。
そこで晴信は信濃攻めを発した。目指すは佐久の志賀城主、笠原清繁である。
佐久武士の根性の強さは、信濃のみか、四隣にまで聞こえている。
昨十五年には、南佐久の内山城主大井貞清を攻め落としていた。
しかし、今度の笠原清繁は一筋縄ではいかないだろう。
それがため、諏訪に入って兵力を増強しなければならない。その諏訪には、諏訪（姫）と、愛児四郎がいる。顔が見たい。
陣触れを発すると、勘助が息せき切って現われた。
「お館様」
「おう」
こういうとき勘助は、必ず何らかの秘策を持ってくるものだ。
「何かな？」
「こたびの兵数、いかほどにござりまするか」
「ざっと五千じゃな。もっとも諏訪へ立ち寄るからそこで二千、計七千ほどになる

がそれで不足か？」
「いや、不足ではござりませぬ。そこで二百ほど引き連れたき者供がござりまする」
「どんな者どもじゃ」
「金山の坑掘りにござりまする」
「そんな者を何ゆえ？」
晴信は目を丸くした。
「使い道がござります」
志賀城は上野と信濃に通ずる街道の要害の山城で、清繁は一族や郎党の婦女子もその城に入れて籠もらせたという。
つまり婦女子を城に入れたのは、敵の暴行や殺害から守るためである。ために食糧や水桶は十分用意しただろう。
「それで？」
「女、子供が入ったからは、時間稼ぎをして焦らしましょう」
「なるほど」
「ただし、只の時間稼ぎにはござりませぬ。水の手を切ることにござります」
「ほう」

「籠城となれば水は十分に用意しておりましょう。しかし、限度がござります。まして女、子供たちがいるとあれば、最初に音をあげるのはその女、子供たちにござりましょう」
「うむ」
晴信は肯いた。
「水の手がどこかは、金山衆にはすぐにわかります。そこで彼らに探らせ、切らせまする」
「なるほど、さすが勘助じゃ。そこまで智恵がまわるとは」
「いや、こんなことはどこでもやっておりまする。ただ、われらと違い、そこは金山衆」
そうして出発したのが七月十三日。甲斐源氏の祖、新羅三郎義光伝来の日の丸の旗と共に、「御旗楯無」と呼ばれる武田家歴代の鎧を着けて躑躅ヶ崎の館を出た。
釜無川沿いに、行き馴れた道である。今日の北岳や駒ヶ岳は、一段と青い稜線を刻んでいる。
そして夏陽を反射させる「御旗楯無」の鎧兜が、ひときわ黄金色に輝いて見える。
（さい先のいい）

将兵たちは一様に満足しながら行進する。
当の晴信は、征戦の意欲と共に、久しぶりに諏訪（姫）の体と、愛児四郎に会える喜びを抱えている。
途中一泊して、諏訪の上原館に入ったのは夕近かった。
「お館さま」
出迎えた瑶姫は、更に美しくなっていた。一児を生んでいよいよ女の輝きを増したようだ。
早速部屋に入り、よちよち歩きになった四郎を抱きあげた。
（誰に似ている）
どころではない。幼児の無心な眼差しと柔和な赤い頬や唇、その姿形それだけで晴信の満足と感動を捉える。
「四郎」
晴信は抱きあげると何度も頬ずりした。そして次は
「よい子を生んでくれた」
と瑶姫の体を引き寄せた。
「それで今宵はここにお泊まりで」
瑶姫はそれでも久しぶりの晴信を懐かしいと思った。

そしてその夜は、狂おしいばかりの愛欲の褥を共にして、二日目の早朝、上原城を出た。
総勢七千、再び軍を整えて茅野から新井に入り、山間を抜けて大石川沿いに上り、更に千曲川の流れを眺めながら北上、佐久の内山峠を越えた。
そして前線基地とした桜井山砦に入った。
見上げる志賀城は笠原山の山頂にあり、西側は尾根つづきになり、東側は切り立った断崖である。
「なかなかの要害にござりまする」
板垣信方が睨んだ。そこで早速、麓に包囲陣を張った。
すると上からしきりと飛矢が走り、時折岩石や大木が落ちてくる。
「まともに向かっては兵を損じまする」
言われるまでもない。そこで双方睨み合いの状態が三日つづいた。
そこへ忍びが三人戻ってきた。
「申し上げます。上杉憲政二万の援軍が用意されているようで……」
「なに、二万の援軍じゃと！」
上杉憲政は関東管領職にあり、二年前の天文十四年（一五四五）川越攻めに当た

り、結局北条氏康の謀略に敗れて、平井城に鬱々とした日を送っていた。その憲政を恃んだようだ。

「御大将」

そこへ勘助が現われた。

「いよいよ金山の出番にござります」

「そうか」

じりじりと兵糧攻めをしている間に、志賀峠を越えて上野の上杉軍二万が現われては敗けとなる。

こうして勘助の命令一下、麓を探った金山衆によって水の手は切られた。

次は、上杉の援軍を先に迎撃しなければならない。そこで兵五千を夜中、小田井原に向かわせた。大将は板垣信方。

「清繁奴、われらが小田井原へ向かうとは知るまい」

「武田の忍びはよう動きまする」

勘助は薄ら笑いを浮かべた。

武田軍は鳴りをひそめて山城の様子をうかがっていた。

水の手が切られたことがわかったからには、いずれ動きがあるはずだ。

(清繁奴、どう出る――)

女、子供たちを落としてから、籠城の全軍をあげて討って出るか、それとも万余の上杉軍の到来を歯ぎしりして待つか――。

いずれにしても命懸けの選択である。

ともかく山はシンとして静まり返っている。

そうして四、五日がたった。

山上に秋風が吹きはじめてきた八月初め、晴信の本陣に、小田井原から忍びが戻ってきた。

「只今戻りましてござります」

「してどうじゃ、小田井原は」

「はっ、武田軍の大勝利にござります」

「大勝利じゃと!?」

晴信はのり出した。

「それはまことか」

「はっ、碓氷峠は上杉軍の屍で埋めつくされております」

「ほう、聞いたか、勘助」

それにしても出来過ぎではないか。数の上では二万対五千である。

「確と間違いないな」

「はっ、明日にもその徴が現われましょう」
「徴じゃと？　どんな徴じゃ」
晴信は膝をのりだした。
「なんでも上杉方の死者の数、三千。それらの首を刎ねて持ち帰るとか」
「三千の首を持ち帰るじゃと⁉」
それはどうかわからぬが、小田井原に向かった板垣ら三千が、見事小田井原で上杉の大軍を喰い止め、武田に戦勝をもたらしてくれたようだ。
「勘助、どうかな」
つまり忍びの報告が、どこまで事実かどうかということだ。
「忍びの言う通りにございましょう」
「上杉軍二万じゃぞ」
「上杉軍と申しましても、憲政殿は大した将にはござりませぬ。それに二万という数も怪しげでござる」
勘助は小田井原の戦さを、そのようにしか見ていない。攻める武田と、いわば笠原清繁からの頼まれ軍では、端から戦意が違うだろう。
「ま、忍びの言うその徴とやらを、楽しみにしようではござりませぬか」
（やっぱり勘助は大人じゃ）

七日夜半、小田井原から続々と兵たちが戻ってきた。戻ってきたらしい人音は聞こえていたが、疲れてそのまま眠ってしまった。
そして朝、晴信は霧の晴れ間に敵陣を眺めたとき、思わず声をあげた。
「あれは何じゃ？」
声が震えた。
麓に巡らした柵という柵、それに立ち樹の枝という枝に、生首がまるで木の実のようにぶら下がっているではないか。
まさに幽界のおどろおどろしき情景である。
「昨夜、小田井原から戻ってきた戦勝の証、上杉軍の生首三千にござります」
「誰が指揮した」
「はっ、板垣にござります」
ということは、余程苦戦したのだろう。
「清繁はこれをどう見る」
味方の者でさえその不気味さと残忍な光景に目を背けたいくらいだ。
城に残った女や子供がいるとしたら、狂乱の体ではなかろうか。
（効果はあった。降伏は近かろう）

上杉の援軍どころか、口上二万といった兵が小田井原で武田に敗れ、こうして生首を際限もなくぶら提げられているのだ。

清繁は覚悟しただろう。水の手を切られた上に、頼みの上杉軍が敗れて無惨な首を晒されているのだ。

こちらから見上げると、城は静かである。子供の泣き声さえ聞こえてこないところをみると、もしやして女、子供を打ったか、それとも搦手から逃がしてでもいるのか。

しかし、それは追うまい。

陽が差してくると、先ほどまで幽界の如きものが、白日のもとに晒された。するとそれは、まことに無残な敗者の現実を映し出していた。

山上は今、どうしているのかわからない。しかし、彼等も覚悟をしただろう。

(そうなると全員討ち死にか。それとも玉砕覚悟の突撃――)

小半刻もたったろうか。依然として動きはない。

「登りまするか」

晴信は采を振った。すると兵たちは一斉に登りはじめた。そして傾斜の半ごろまでくると、上から岩石や木材が落とされ、何人かが声をあげて落下していった。

(油断ならぬ)

兵はやる気で城に立て籠もっているようだ。

しかし、それも三日間で、十一日の夕刻、城からの反応はピタリと止まった。

何度か登攀を試みたが飛矢はなく、臍を固めて山上に登りだした。

そのときである。煙が山上から下へも這い降りてきた。

「さては火を放ったな」

武田軍は登攀の途中で足を止めた。煙は煙を呼び、濛々と全山を包んだ。

その間兵たちは一旦下へ降り、鎮火を待った。

「城を焼いての自決か」

晴信は舌打ちをした。

佐久の蝮、いや、信濃の蝮といわれた笠原清繁であった。その清繁が城の焔とともに消えることに一種の感慨が過った。

(一度、顔を見たかったが……)

火と煙がおさまるのを見はからって、武田軍は一斉に登った。

主部は落ち、他の曲輪も黒い支柱を残して余燼がくすぶっているだけである。

その中に兵は一人も残っていなかった。

そして生け捕りになった下僕や女たちで、甲州に身寄りのある者以外は、すべて、黒川金山送りとなった。

（2）

翌天文十七年（一五四八）二月初め、早春とはいえ、北信濃はまだまだ厳寒である。

昨夏、上杉軍を破って、志賀城を攻略したことに自信を得た晴信は、寒さを衝いて北上した。目当ては北信の豪、村上義清である。

村上氏は平安末期からの名族で、千曲川に臨み、善光寺平の入口に位置した葛尾山に居域を置いている。

戦い馴れた五十歳代の義清は、信濃侵略を目指している武田を、なんとしても阻止しなければならなかった。

それには北信の諸豪や、木曽・高遠らの参陣を得なければならない。

そこで昨年の志賀落城の生首三千と、金山送りの惨を掲げて協力を呼びかけた。

すると小笠原氏や木曽氏、それに高遠ら周辺諸豪の参陣を得ることができた。そして千曲川を渡り、室賀峠を越えて、上田原に出た。

時は十四日、時折小雪の舞う厳寒の早暁、双方合わせて一万数千が相対した。

寒風と小雪の吹きつける凛烈の上田原に、丸に上の字を染め抜いた村上軍旗と、武田菱の旗が千切れんばかりにはためいている。

激闘の前の不気味な静寂が、天地を支配している。

凍りつく寒さと、張りつめた緊張感の中で、小砂利を噛む千曲川の音が小刻みに聞こえる。

そして天白山を背後に布陣した村上軍と武田軍が遂に激突した。

槍隊、弓隊、騎馬隊がそれぞれの戦法で動きだした。

緒戦は武田軍が優勢だった。赤備えの兜に鎧の集団が、猛虎のように村上軍に襲いかかる。破竹の勢いである。

その勢いに押されて倒れる兵の数を見て、義清は百、二百と後続を投入した。

「信濃を守れェ！　武田を討てェ！　生首三千を忘れるなあ！」

この怒号が村上軍を奮い立たせた。それからの村上軍は、神がかりのように鬼気迫るものがあった。

晴信は、志賀の悪評がいかに村上軍を奮起させたか、そして自分は今、その逆襲の高波を受けていることがわかった。

「御大将、ここはお引き下され」

直言したのは信繁だった。父信虎から愛された晴信の次弟である。しかし、信虎追放後は、兄の影武者となって目立たず生きてきた。

彼が兄に後退を進言したのは、思い余ってのことである。つづいて、
「お引き下され」
「ここは一旦」
とそんな声が聞こえる。
するとそこへ村上軍の数騎が晴信目がけて突進してきた。立ちはだかった旗本が、遮二無二突きまくったが、敵は次から次へと新手をくり出してくる。
「御大将、陣を立て直さねばなりませぬ」
甘利虎泰のことばも晴信の耳に入らなかった。
そのとき、鼓膜をゆるがす轟音が響いたと思ったら、晴信の耳元を掠めた。
瞬間、晴信はもんどり打って倒れた。
「御大将！」
すると近づいてきた騎馬武者の一人が、いきなり晴信目がけて斬りつけた。晴信は危うく刀を抜いて防いだものの、高腿のあたりに一撃を喰らった。
深傷のようだ。血がみるみる下袴からしみ出し、脛当ても血に染まってきた。
もはや陣は退かねばならない。晴信は本陣を小山田信有の軍の中に移した。
凍てつく寒風にまたまた雪が舞いだした夕方、その日の戦さは終わった。
そのとき満身創痍の板垣信方が担ぎ込まれてきた。しかし、晴信の前に体を横た

えたときは、既に事切れていた。

「信方！」

信方の両肩を抱いた晴信の耳に、またして悲報がもたらされてきた。甘利虎泰の死である。晴信の涙は一時に凍った。

信方と虎泰は、晴信の少年時代からの忠臣であり、今は又となない股肱である。損失というより、悲しみに襲われた。

血気と慢心が、この有為の二人を失わせた。深い悔恨が湧き起こった。

晴信の歴戦の中で、これほど手酷い惨敗は初めてである。

そうなるとこれ以上止まるわけにはいかず、諏訪へ敗退せざるを得なくなった。

三月五日、惨敗の武田軍が諏訪郡代屋敷に戻ってきた。

御大将晴信は深傷を負い戸板に乗っての帰還であり、郡代の板垣信方と甘利虎泰は無言の帰還である。

晴信は直ちに部屋に入り、信方と虎泰の葬儀は後日改めて行うことにして、とりあえず上原城下に仮埋葬した。

そして兵の七割を古府中に帰すと、晴信は傷の手当てに暫く残ることにした。

若い肉体のため傷の回復は早いが、寒風の野陣がこたえたのか、しきりと咳を発

した。

毎日のように温泉につかり、部屋には侍医も侍って養生につとめた。

「痛みまするか」

瑤姫が背や脚をさすってくれる。

（こんな愛が欲しかった）

と晴信は甘える。

「したがな諏訪、脚より心が痛むぞ」

「……心が？」

「信方と虎泰を失うたことじゃ」

「それでも諏訪ではこんな噂が――」

「どんな噂じゃ」

「上杉軍の兵の首を三千も持ち帰り、それを志賀城の麓にぶら下げたは板垣殿とか、その天罰じゃと」

瑤姫もそう思っている。そればかりか、信方の死の報せを聞いたとき、内心凱歌をあげたくらいだ。

（桑原城で、父に迫った憎き男、それがこの諏訪郡代屋敷の主じゃった）

「諏訪ではそんな風に」

「板垣殿ばかりではございませぬ。お館さまのことも」
「……」
深傷を負った上に、瑶姫から聞かされる痛打で、更に痛みが増してくる。
「でございますから、戦さはおやめ下さりませ。負けた方も、勝った方も、兵の損失となり、民心は痛むばかりで」
「それは女の言い分じゃ」
「そうでしょうか。お館さまのお耳には入らぬでしょうが、甲斐でも戦さで死んだ兵らの身内は、さぞお館さまを怨みに思っておりましょう」
(よくそんなことを、ずけずけと遠慮もなく言うものじゃ)
晴信は機嫌が悪くなってきた。そこで一気に口から衝いて出た。
「諏訪よ、わしの負傷の理由を聞かそう」
「はい」
「腿の傷のもとは、鉄砲じゃった。至近の距離で狙われ、すんでのところで死ぬところであったわ。それを躱して倒れたところを斬られた」
「鉄砲で――」
「諏訪」
「はい」

「わしを狙い撃った鉄砲の男、そなた奴を知っていよう」
晴信の目が怒っている。
「急に何を仰せられます。どうしてわたしがそんな男を――」
「では思い出させてやろう。あの西沢渓谷じゃ。わしを尾けて狙いおったあの男、諏訪者ではないか。そなた知っておろう」
「知りませぬ。そのような者を。したがお館さまのお命を狙う者は、一人や二人ではござりますまい。諏訪も高遠も佐久も――。
現に佐久での生首三千は、諏訪ばかりか、近隣諸国でも語られております。もしかしたら、佐久者ではございませぬか」
そう言われると返すことばはない。たしかに今度の戦さでの肉迫戦では、怨念のようなすさまじさを感じとったものだ。
それから晴信は無言になった。
(わしはやっぱりこの女を追い詰められぬわ)
瑶姫は晴信の臥所から離れると自室に戻った。
晴信から紳四郎を疑われたことよりも、紳四郎が村上軍に身を投じていたことに驚いた。
甲斐の大洪水の夜以来、紳四郎の姿が消えたと思っていたが、北信濃にいたとは

——。

（やっぱり）

瑤姫が四郎を妊って諏訪へ戻り、娘時代のような日常に戻った頃、夜陰忍んできた紳四郎から意外なことを聞かされた。鉄砲のことである。

古府中の西曲輪へ忍んできたときの話とは違っていた。

紳四郎が初めて鉄砲を見たのは、諏訪満隣の所だったという。満隣から、

「そなたに」

と贈られた珍物に、紳四郎は目を見張った。

「これは一体？」

「南蛮からの渡来物で火縄銃というものじゃ。上杉憲政殿から拝領したが、この年齢でわしが持っていても仕方がない。そちに遣わそう」

と言ってくれたものだった。

しかし、使い方がわからないため、満隣の指示に従い、上杉憲政の平井城へ出向いて的場で腕を磨いてきたという。

これで紳四郎と鉄砲の謎は解けた。紳四郎は上杉家を拠り所にしていたようだ。紳四郎にとって秘中の秘である。

晴信は詰まるところ、約一ヶ月ほど諏訪に逗留した。

「諏訪よ、戦さの話は止めよ」

そう言って毎日のように瑤姫と四郎を伴って上諏訪の湯に浸る。

湯殿の湯煙の中で見る瑤姫の白い裸身の美しいこと。夜の仄かな灯の臥床で見る裸身とはまた別である。

形のいい乳房の盛り上がり、脂のつかぬすらりとした裸身は、天女を見るようだ。

（どんなことばで責められても、わしはこの女が愛しい）

「いやですわ、そんな目でわたしを——。それより、四郎をしっかと抱いて下されませ」

「おお、そうじゃ」

と晴信は抱き取っている四郎を、もう一度抱き直してその頬に唇を当てる。

「いい子じゃ。四郎は」

「でもこの子を古府中に連れ去らないで下さりませよ」

「ああ」

古府中には十一歳になる長男太郎と、目を患っている次男と病弱な三男がいる。

そこへ脇腹の男児を連れ帰ることはない。

諏訪の安定のために生まれてきたようなものだ。どんなに可愛くとも、躑躅ヶ崎へ連れ帰ってはならぬと自戒する。

そうして毎日のように三人で湯に浸かり、裸で瑶姫と四郎を抱く幸せに、つい戦さのことを忘れる。

（庶民の幸せとはこういうことか）

父信虎や母と一緒に湯に浸かったこともなく、躑躅ヶ崎の三人の息子を湯に入れたこともない。

（わしは庶民の暮らしや、本当の幸せを知らぬのかもしれぬ。わしはここで、人らしい幸せを初めて知ったようじゃ）

そうして一ヶ月後、傷を癒した晴信は、近習たちを伴って古府中へ帰っていった。

九．鉄砲

（1）

諏訪からの帰途、傷は癒えていた。

騎上、晴信の脳裏を占めているのは鉄砲である。

（彼女〈瑶姫〉が明かさずとも、こちらが奴を鉄砲で仕留めてくれるわ）

それには鉄砲を仕入れて鉄砲隊を作ることだ。

仕入れ先は堺や紀州、大和だが、この頃では近江辺りでも作りだしているという。

躑躅ヶ崎館に入ると、弟の信繁、信廉らが出迎えていた。

「お元気で戻られ、祝着にござります」

そう言ってくれる弟らに、

「何が祝着なものか、敗け戦さの為体じゃ」
と不機嫌に部屋に入った。
そして一夜明けると、早速勘助を呼んだ。
「諏訪御寮人様と四郎君をお相手に、元気になられ、祝着にござります」
「それよりそちに早速相談したきことがある」
と言って、鉄砲のことを持ち出した。
「これで二度も狙われたのじゃ。こちらもいよいよ鉄砲組を組織して、奴を撃ち殺してくれよう」
「鉄砲隊の組織は賛成にござりまするが、奴などといわれても、特定できまするのか？」
勘助はそう言ってみた。すると、
「諏訪者じゃ。彼女が知っているように思えてならぬ」
「ほう、何をもって？」
「おぬしも覚えておろう。西沢渓谷で狙った男じゃ。どうも奴のような……」
「では御寮人様にお訊ねなされば」
「訊いた、訊いたのじゃが」
「で、何と？」

「彼女はこんなことを言う。お館様のお命を狙う者は一人や二人ではない。諏訪も高遠も、それにもしやしたら、生首三千の佐久者ではないかとな」
「ほう」
「返すことばがなかった。わしは、諏訪者と狙うているが、彼女にはどうも弱くてなあ」
「ハハハハ」
勘助は思わず笑った。
「何がおかしい」
「いや、これはどうもご無礼を。それより、武田も鉄砲組を組織するは大賛成にござります」
「そうか、金は十分あるぞ。糸目はつけぬ、早速調達にかかれ」
「して、誰を、どこへ遣ります」
「調達はやっぱりおぬしでなくてはならんじゃろう。甲斐者は剛直じゃが、物の調達には不馴れじゃ。そこは世間を広く歩いてきたおぬししかおるまい」
「では堺に参りますか」
「堺でも近江でもどこでもよい」
「承知いたしました」

とは言っても、六百挺となると日数がかかる。そこでとりあえず二、三挺を用意することだと、勘助は近江の国友鍛冶を目指した。

「これが鉄砲か――」

十二、三日で戻ってきた勘助に、晴信は半ば驚き、半ば落胆した。

思ったほどの代物ではないように見えた。刀の方が、どれほど美しく価値あるものに思えることか。

ともかく初めて見る文明の武器である。

「どのように扱うのじゃ」

そこで勘助は的場に誘った。

「まずこの銃口に、この火薬と鉛の玉を銃の底まで押し込めまする。それからこの火ぶたを開けて、火皿に火薬を入れまする。そこで一旦、火ぶたを閉じて、火縄の火を吹き起こし、火縄を火ばさみで挟み、狙いをつけて引き金を引きまする」

と言って試射してみせた。

するとたしかに音の大きさは驚くばかりで、二十間ばかり離れた的を木っ端みじんに撥ね飛ばした。

この距離で、相手を撃ち砕く威力は刀剣にはない。

「凄い――。こんなものにやられてはお仕舞いじゃ」

「はい、したが欠点がございます」

「何じゃ」

「火縄式でございますから、この縄に火を点けなければなりませぬ。それには時間がかかります。そのうえ雨や霧など湿り気があっては、なかなか火がつきませぬ。そこが難点にございます。

ですから、ぐずぐずしている間に、敵は迫ってきます。そうなると弓矢や槍刀でございまするなあ」

「うーむ」

晴信は唸った。

そういえば西沢のときも、上田原も晴れていた。

そう考えてくると、奴の腕は大したものだ。しかし、そんな技を、一体どこで身につけたのであろうか。

（諏訪ではなかろう）

となると一体いずれの者か。とにかく、諏訪者でなければ、奴を抱えてやってもいい。鉄砲の指南として――。

晴信の呟きである。

その晴信が、武田鉄砲隊を組織し、六百挺の演習を古府中の八幡社の境内で行うのは、数年先のことである。

そして実戦に使ったのは、弘治元年（一五五五）の対上杉謙信との旭山城の戦いである。

鉄砲に気をとられていると、佐久では再び小豪族たちが村上義清を擁して、内山城や前山城を奪還するという挙に出た。

のみか、筑摩、安曇を領する小笠原長時が、村上義清ら豪族たちと、反武田同盟をつくり、数千の兵を率いて、諏訪の西、塩尻峠に陣を布いたという報せが入った。

更に晴信を吃驚させたのは、諏訪西方衆の矢島・花岡らが、長時に呼応したというのである。

晴信は直ちに七月十八日、出陣命令を下して、上原城へ向かった。

このとき晴信は、特に二つの軍旗を作ってはためかせた。

一つは一行に大書した「諏訪大明神」であり、もう一つは後世名高い「風林火山」

即ち

疾如風　徐如林

侵掠如火　不動如山

「孫子」のことばで、四如と呼ばれるものである。

以後二旗は、武田家の旗として、象徴的なものとなる。

夜になって上原城に着き、夜食と暫時の休憩をとり、兵七千をもって塩尻峠を目指した。九里の強行軍である。

ともかく暁暗を衝く夜襲には、急がなければならない。

馬の口に枚をふくませ、足には草鞋をはかせて、松明の火を消して暗闇の中を粛粛と進んだ。

何しろ小笠原軍に気付かれてはならないからだ。

何刻かはわからない。多分丑三時はとっくに過ぎているだろう。

夏の夜明けは早く、暁雲を見るまでにはできるだけ頂上近くまで登りつめていなければならない。

息を殺しての山登り、それに人ばかりではない。馬の脚も気づかわなければならない。

幸い塩尻峠は、攻め側の坂は緩い。それに対して、小笠原軍が布陣している東側は急勾配になっている。

息を潜めて頂上近くまで登ってきた。辺りを窺うと、夜の静寂が山上を包んでい

る。

目を凝らして四囲を見廻すが、夜営の警備の姿も映らない。

（さては油断しているな）

闇中に陣幕らしきものがボーッと微かに白く映り、篝火一つも見えない。

頂上をとり巻く形になって、曙光を待った。その間、つい睡魔に襲われるほど、疲れが出た。

すると、八ヶ岳の稜線を破って、東雲が厳かな赤光を放ってきた。

途端、ボーッ、ボーッと夜明けの静寂を破って、法螺貝の音が一斉に谺した。

それを合図に、七千の武田軍が駆け登った。不意を衝かれた小笠原軍の慌てぶりは滑稽なくらいだ。

それほど彼等は、夜明けの奇襲など念頭になかったのだ。

蜂の巣をつつかれたように態勢も乱れて四散するばかりで、呆気なく勝敗はついてしまった。

そしてすっかり明るくなった頃には、山上に千体近い屍が転がり、大将小笠原長時ほか、仁科や三村、西牧ら武将の姿はなかった。

呆気ない勝利である。

「御大将、これで上田原（の敗戦）に報いることができましたぞ」

と言われても、これでは戦さらしくもなく、勝利感がない。

それに、村上義清は健在であり、信濃攻略はまだまだこれからである。

こうして塩尻峠の戦さに勝って、諏訪への凱旋の道すがら、晴信は酷薄な処罰を考えていた。

というのも、このたびの小笠原長時の呼びかけに、既に武田の配下となっている諏訪の西方衆が応じていたからである。

（諏訪の西方奴らが――）

これまで諏訪に対しては穏便な措置をしてきた。それは、武田家発祥の地、武田ノ庄が、諏訪神社の氏子だったことや、諏訪神社への崇敬と、瑶姫の存在があったからだ。

その諏訪の半分から叛かれたことによる、晴信の衝撃は大きかった。

西方衆の主謀者だった矢島、花岡の屋敷を焼き、西方衆の土地を没収し、逃走する人々の後を追って、男は金山、女は遊女という酷刑を敢えて行った。

それを聞いて瑶姫は腹が立った。

（諏訪の衆を傷めるとは――）

しかも黒川金山の人夫や遊女、奴婢に送りこんだと聞いて、志賀の生首以上に胸が痛んだ。

（わたしの諏訪を――）

諏訪の衆の泣き声と怨嗟の声が聞こえてくる。

晴信は上原城に帰還して軍装を解くや、麓の館に入ってきた。ところが瑶姫の出迎えがない。

「どうした、体でも悪いのか？」

瑶姫に代わって出迎えた真志野は、

「お加減が悪しく……」

と悪びれている。

「それはいかぬな」

晴信はその足で瑶姫の部屋に入った。すると悪いどころか、衣を更めて、正座している。

「おお、元気ではないか。どうして出迎えぬ。それにその不機嫌な面は何じゃ」

晴信は一度に不機嫌になった。それでも惚れた女の前に腰をおろした。

すると瑶姫は怒りに唇を震わせながら言った。

「勝利のご凱旋、おめでとうございます。したが、わたくしは腹が立ち、悲しゅうございます」

「何じゃと、腹が立っているとな？　一体何に腹が立っているのじゃ」

晴信は瑶姫の手を取ろうとした。途端、瑶姫はその手を払いながら言った。

「西方衆への酷いなされよう」

晴信はそこで瑶姫の不機嫌なわけがわかった。

「諏訪よ、たとえそなたの旧領地の者といえど、この晴信に叛いたとあらば、目に物見せてくれよう。それが戦さの習いであり、報いじゃ。そなたもこのこと、確と肝に銘ぜられよ」

「それでは申し上げます」

「おお」

「武田の配下となった諏訪西方が、何ゆえ叛きまするか、このことお館さまは何と？」

「わしの治政にものを申すか――」

晴信の目が険しくなってきた。

「ここは元々信濃にございます。そこを何ゆえ性懲りもなく信濃攻めをなさいます。信濃人はこれまで、それなりに盆地に生きて幸せにやってきました。なのにどうして甲斐が攻め込んでくるのです。塩尻峠からの呼びかけに、西方衆が動かざるを得ぬことぐらい大目に見てやって下され。お館さまがご寛大な措置をなされば、西方衆は本心、お館さまに懐きましょう」

言われてみればその通りかもしれぬ。しかし、晴信は素直には聞けない。
「女子がずけずけとこのわしに向かって賢しらにものを申すか」
晴信も腹が立ってきた。それから両者はことばもなく険しい空気が漂った。
と、そのとき、廊下に子供らしき足音が聞こえたと思ったら、戸を開けて童が入ってきた。そして童は瑶姫の膝に腰を下ろし、晴信に向かって愛らしい笑みを向けた。
「おお、四郎」
途端、二人の間の険しい空気が一変した。
晴信は両腕を広げて四郎を招けば、今度は素直に晴信の腕に抱かれた。
三歳になる幼児の、女子にも見まがうような白い額に赤い頬。人を疑うことを知らぬ無邪気な瞳。
晴信の愛しい息子である。
「四郎、母君は機嫌が悪うてなあ」
そう言いながら頭を撫でると、四郎はいきなり晴信の胸にしがみついた。幼児の甘酸っぱい匂いが発散し、晴信はそれを懐かしむように抱きしめた。そのとき晴信は、四郎の体から、
(母を許して……)

と訴えているような、声なき声を聞いたような気がした。
(どうしてわしはこんなにこの息子が愛しいのか)
これは理屈ではない。そのとき晴信は、嫡子に生まれながら、二十歳まで、父信虎に疎まれて育ったことを思い出した。
どうして父に疎まれたのか、それは多分、あらゆる点で父に似ていたからだろう。
親に似るということは、可愛いくもあり、また自分の欠点を見るという意で疎ましくもあろう。
それに対して弟信繁は、父から愛された。公卿の血を引く母譲りのいわば京風の顔、そして信繁は父に逆らうことなく柔順だった。
しかし、自分は、父の魁偉な風貌と威丈高な言辞を嫌った。
挙句、七年前、その父を駿河に放逐して主座を奪った。
(わしは父から愛されなかったゆえに)
そのときふいと、長男太郎の顔が浮かんできた。
(わしは彼を愛しているか)
そんなことを、これまで考えたこともなかった。太郎は常に三条ノ膝下にあり、彼を抱いた記憶もないような気がした。

思えば晴信が父信虎を追放したのは七年前である。そのとき晴信は二十一歳、太郎は奇しくもこの四郎と一つしかかわらぬ四歳であった。

そのときの父の所業を知る筈もないが、十一歳になっている今は、既に知っていよう。

（そんな父を、彼はどう思っているか）

怖れているか、それとも蔑んでいるか――。

だんだん顔が晴信に似てきたという家臣たちの声を、喜ぶべきか恐れるべきか。

（そろそろ彼を元服させねば）

そして初陣をさせねばならない。

その太郎に、父信虎よりもっと苛酷な自刃を与えることになるのは、十九年後である。

（2）

天文十九年（一五五〇）の春、五歳になった四郎を、瑶姫は抱くようにして馬を歩ませる。

「御寮人様、あまりご無理をなさいませんように」

と一定の距離を置きながら付いてくるのは、叔父頼豊に仕えている廐番の三村青蔵である。

瑶姫が少女の頃から馬をこなしているのは知っていたが、古府中から戻ってくると、馬には全く手を掛けない瑶姫だった。

ところが急に乗馬を始めたのは、四郎のためだとわかると、青蔵もじっとしてはいられない。

馬場で瑶姫の乗馬を手伝い、野駆けにも付いていくが、五歳の四郎との相乗りだけは強く反対した。

しかし、帯でくくられた四郎は、母との相乗りが楽しいようだ。

四郎はこれまでに小馬の背に乗せられていたため、殊更に驚きも恐れもないようだ。

とにかく、瑶姫はただ美しいばかりではなく、今や気丈な母に変わりつつある。

「四郎、よいか。母者がそなたを馬の背に乗せるは、そなたが諏訪の大将になって欲しいがためじゃ。母の願いが、そなたにわかろうな」

「はい」

はっきりとした声が、瑶姫を満足させる。武家屋敷から町屋を抜けると、一面緑の田野である。上川沿いに駒を進めると、田畑に働く村人たちが一斉に顔をあげ

て、瑶姫母子を見上げる。中には手を振ってくれる者さえいる。
馬音はゆっくりと湖を目指している。
少女の頃、紳四郎に抱かれるようにしてここを走ったものだ。そのとき、
「姫様、敵は甲斐の武田にございます」
そう言った紳四郎の声が、今でもはっきりと耳の奥に残っている。
ところが運命の轍は大きく狂い、今や瑶姫は武田晴信の側女となってしまっている。まさか十年前、このようなことになろうとは、想像もしないことだった。
しかし瑶姫は、これまで失ってきたものを、わが子四郎によって取り戻そうと考えている。
「四郎」
「はい」
「ここはもともとそなたの母の地じゃ。母者はここで生まれ、ここで大きゅうなった。四郎もここで生まれ、ここで大きゅうなる。そこでそなたに見せたいのは、そなたのお祖父さまのお城じゃ」
「お祖父様」
「そうじゃ。お名は諏訪頼重」
「すわよりしげ」

「決して忘れてはならぬお方じゃ。ここの上原城の城主であられた」
四郎は馬上の母に抱えられながら、上原城を仰いだ。
「でも四郎の父上は武田晴信」
「その父上が、お祖父さまをお討ちなされた」
「父上がお祖父様を――」
「大きゅうなったら、そなたもわかるときがくる。武田晴信の子でも、お祖父さまはこの上原城主の諏訪頼重さまだったということを忘れぬよう。したがこのこと、決して父上の前では口にしてはなりませぬ」
「どうしてです？」
「諏訪はそなたの父上によって討たれた」
四郎はハッとして母を下から見上げた。
初めて聞く話である。
「どうして父上がお祖父様を――」
「そなたがもう少し大きゅうなったらお話ししよう。したがそなたはお祖父さまのこの諏訪を守るために生まれてきたのじゃ。よって母と一緒じゃ」
そういえば常に父は不在がちである。しかし、今の四郎にとって父の不在など気にならない。この美しい母さえいれば満足である。

「それに四郎、甲斐の古府中には、三人の若君がおられる。そなたの兄者に当たる。したがそんな所へ行ってもそなたは邪魔者じゃ。諏訪に生きてこそ、そなたは一国の主になれるというもの」

難しい話だが、要は母が、四郎はここに居れと諭しているのだ。

「わかりました。四郎は古府中へは行きませぬ。ずっと母上と一緒に諏訪にいます」

「よう言うてくれた」

不在がちな父が諏訪にくるときは、いつも信濃への戦さの寄り道となっていることを、わかりつつある四郎である。と、

「あっ、勘助爺じゃ」

いきなり四郎が手をかざした。見ると彼方から脚を引きながらくるのは勘助である。

馬を近づけていくと、

「おお、これは御寮人様、若君を同乗なされてのご乗馬とは――」

久しぶりの瑶姫が、勘助には目くるめくほど輝いて見える。

(四郎様をお生みになって、ますますお美しくなられたわ)

「この子の将来に向けて、馬に馴染ませ、上原城のことも教えておかねばと」

(この姫のことじゃから、今からそれを……)

そのとき武田家の未来に、不吉な翳りを覚えた。

(もしかしたら、太郎君と……、いや、そんなことまでは思うまい、わしの命がないではないか)

と勘助は打ち消した。

「ところでそなた、暫く顔を見せなかったが、またどこかへ調略か？」

またそのような言われ方をされてしまう。

「いや、面白い所へ行ってきました」

「面白い所と？」

「近江の国友村でございます」

「わかった、鉄砲であろう」

「さすがは御寮人様でござりまするなあ」

「そうであろうか」

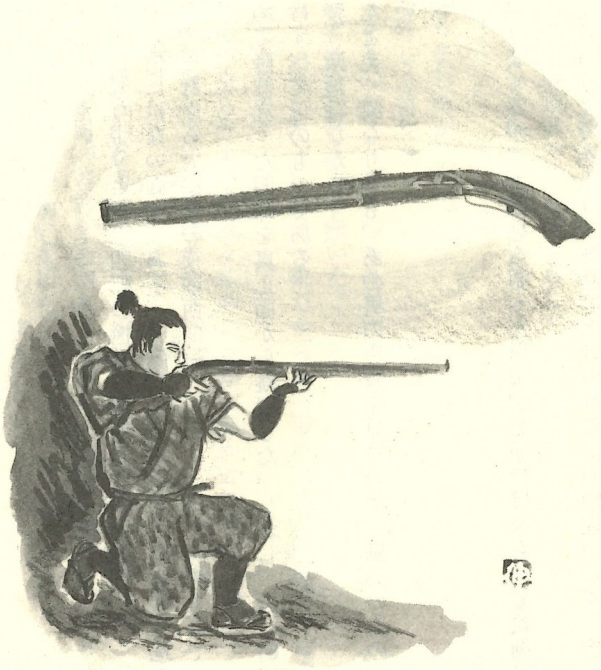
「国友がどんな所か、女子の方で知る者はまずござりませぬ」

「それで仕入れてきたのか」

「はい」

「何百挺」

（ほう、数まで読まれるわ）
「いや、まずは実物をお館様にと、二、三挺持って参りました」
それから勘助は声を落として言った。
「後ろからくる付き人には聞こえませぬか」
「ああ、彼の者は廐番にて――大丈夫じゃ」
「鉄砲について、お館様は西沢渓谷と上田原の狙撃を同じ者と考えられ、諏訪者と探っておられまするが」
「その話は直にお館様から訊かれた。したがわたしは言い返した」
「なんと？」
「武田への怨みは、何も諏訪ばかりでないと。高遠も佐久も同じではないか。生首三千の怨みと申し上げたら、お館様は黙られた」
（……）
「それでお館様は鉄砲に目醒められたと？」
「左様で。鉄砲組をお考えになっておられます」
「鉄砲組をのう」
それからまたことばが途切れた。
そんな大人の会話に退屈したのか、四郎がいきなり瑶姫の膝から降りようとし



た。

「危ないではないか」

「一寸だけ下に降りたい」

そう言って下に降りようとする四郎の横顔に、勘助はハッとした。

それは武田晴信にはない面輪である。一瞬ではあったが、桑原城で瑤姫の後ろに控えていた男、それから大洪水の夜の西曲輪へ忍んでいった男のものである。

（まさか！）

勘助は改めて降り立った四郎を真正面から凝視した。しかし、白い顔につぶらな瞳、それらはすべて母のものである。

（これでは疑う余地はなかろう）

しかし、たとえ一瞬なりとも、あの男の片鱗を見たのは、勘助のみの勘であったかもしれない。

「御寮人様」

「何じゃ」

「話は元に戻りまするが、お館様を狙った男を、お館様は今もって執拗に探っておられまする」

「その話は先に言うたであろう。諏訪者と疑われるはお門違いじゃ。それより上杉

や佐久者をお疑い下されと――」

勘助は瑤姫のこの強気の嘘を責めることはできなかった。

父を討たれ、そして国を奪われたうえに、仇敵の側女を強いられた女性の最後の抵抗であろう。

「そうでござりましたか」

勘助は尤もらしく言った。

「ところでそなた、どこへ行くつもりじゃった？」

瑤姫は改めて勘助の行き先を訊いた。

「高島城に来ていましたが、諏訪へ来たからは、御寮人様と四郎君にお会いしたいと、出て参った次第で……」

「ならば館の方へ来られよ。躑躅ヶ崎のことなど聞かせてくれぬか」

今では勘助を信用している瑤姫である。

「それでは」

と勘助に抱きあげられた四郎が、再び瑤姫の膝の前に乗った。

「重うござりまするなあ。若君をお抱きするなど、勘助、幸せにござりまする」

我にもなく素直なことばが衝いて出た。

それから間もなく館に戻り、門をくぐった。

馬から降りると、四郎は足早に屋敷の中に走り去った。
「では暫時」
と勘助は瑶姫の部屋へ入った。
躑躅ヶ崎ではあり得ぬことである。
見廻すと、瀟洒な部屋に、瀟洒な調度が置かれ、隅に木馬などがあるのは、四郎のためであろう。温いものを覚えた。
湯が出され、こうして対座するのは初めてである。お館、晴信の前で怖じることのない勘助にして、目のやり場もないほど落ち着かない。
衣を更めた瑶姫は、馨しいばかりだ。思えば桑原城での出会いは悍ましいものであったが、不思議な縁は、こうして二人を諏訪館の一室で和やかに向かわせている。
（こんな人生がわしに残されていようとは）
感傷にも似た感慨が勘助を襲った。
「喉を潤されては」
「はっ」
勘助はやや震えながら碗をとった。
（これが初めてであり、おそらくこれでお仕舞いであろう）

そんなことを思いながら、ゆっくりと口にした。
「で、何か？」
そうでも切り出さないと、胸が詰まりそうだ。
「あれからの西曲輪のことなど」
「私奴には特に西曲輪のことについては」
「そうでもあるまい。お館様にはお子がまたお出来になったとか」
「そのようなことがお耳に入りましてござりまするか」
「信濃の油川信守殿の姫じゃというではないか」
「よくご存じではござりませぬか」
「その姫の子であろう」
それが訊きたいのだ。
「はあ、既にお子がお二人」
「なんと二人も……」
ということは、晴信が繁く部屋に通っているということだ。
「それにこの夏にも、三人目をお生みになるご予定で」
「それで三条ノ方さまのご機嫌はどうなのじゃ」
「よくありませぬ」

「いつぞやのようなことにはならぬか」
いつぞやのこととは、三条ノ方が側室を謀殺したことである。
「目下のところ、お子は二人とも姫君でござりますから」
「それにしても、太郎君というご嫡子を生まれたご正室のありようとは思えぬ」
とは言うものの、油川の側室を妬む気配はないようだ。とにかくここは、瑶姫の妬心を買ってはならぬと、
「お館様にとって一番愛しき姫は、御寮人様にござります」
と言うや否や、
「ホホホ……、取って付けたように、聞き苦しいではないか」
と瑶姫は笑った。
「何がお聞き苦しゅうござりまするか。本当のことを申し上げているのでござります」
すると意外なことを言い出した。
「よいのじゃ、わたしはお館様の愛なぞ得ようとは思うていぬ。たとえ四郎が生まれても、お館様はわたしや諏訪の仇じゃ。わたしは四郎を立てて、必ずや諏訪を武田から奪い取ってみせる」
勘助はゾクリとした。

「そのようなこと、ゆめゆめお館様におっしゃることばではござりませぬよ。お慎みなされて下され」
「そなたじゃから言うてみたのじゃ。二度と言うことはない」
勘助はもう少しで涙をもよおすところであった。
（なんという正直な――そんな本音を、この勘助に……）
とわれにもなく感情に溺れそうになったとき、
「そなたは謀臣じゃ」
と俄に話が変わった。
「はっ？」
「謀臣とは、戦さの計略や術を教えるばかりではなかろう。いかにして戦さを止めさせるかということも、計るのではないのか」
ハッとした。
「仰せの通りで」
「なら、お館様に、戦さの愚かさを進言して下され。他国への侵略はならぬと、信濃攻めをお止め下されと」
「……」
「たとえ一時己が領地となろうとも、怨みは千載に残ろう。お館様は、大水を心配

なされて、本格的な堤を造っておられる。それが領主の務め、自らが他国を蹂躙（じゅうりん）してはならぬと――」

（その通りでござりまするなあ）

思わず心の隅で呟（つぶや）いた勘助である。

十．三代の顔

（1）

諏訪からの帰り、馬に乗りながら勘助（かんすけ）は複雑な思いにかられていた。

まさか路上で、四郎を相乗りさせた御寮人と出会うなど、思いもよらない奇遇だった。それに、諏訪館の部屋に入り、ひととき対座したことが夢のように思える。

のみか、かなり突っ込んだ秘め事まで、吐露してくれた。

（わしのような醜男（ぶおとこ）に……）

この年になって、あのような美姫（びき）と出会い、信用を得るなぞ、智力を尽くした謀略をもってしても計り得ぬことだ。

（この年になって、思わぬ華じゃ）

そう含み笑いをする一方で、「謀臣とは――」と、晴信の信濃攻略を止めさせよ

と言った厳しいことばを思い出す。

（たしかにその通りじゃが……）

しかし、戦国の当世、自国の平和と安穏のみで生きられる時代ではない。

こちらが攻めに出るか、攻められるかという当今、南を大国（駿河・相模）に阻まれては、北の信濃を目指すしかないではないか。

その初手が諏訪だった。諏訪には、全国の諏訪神社を司る大社が鎮座している。

晴信、崇敬の社である。そして天女の如き美姫がいた。そういう意味で、諏訪ほど魅力的で美しい国はない。

晴信ならずとも、垂涎の地である。

その諏訪を守るは武田の力で——というは、勝手な言い分かもしれぬ。

（それに御寮人様）

と勘助の一人言がつづく。

（ここまできたら、信濃攻めは止められませぬ。止めたら信濃勢が甲斐の山を越えてきましょう。

国内に洪水という敵を抱えながら、外からの侵入を受けるわけにはゆきませぬ。

そのための戦さにござる）

と呟いてから、これは勝手な言い分かと自嘲した。

往きも帰りも、ひとりでに八ヶ岳に目がいく。穏やかで優美な稜線に、心が和む。

と、右前方に富士の毅然とした秀峰が視野に入ってきた。群を抜く品格である。

（ああ——）

勘助は小さく詠嘆した。あの霊峰こそ、諏訪御寮人様じゃ。高い気品は、お館様の権力をもってしても汚すことはできない。

そんなことを思いながら黙々と往く。

左右、落葉松林がつづいている。天地静寂にして馬蹄の音のみである。すると、懐かしい板垣信方の面影が浮かんできた。

かれこれ十四年前になろうか。駿府の重臣、庵原安房守邸で寄寓していたとき、信方と出会った。

その縁で甲斐に移り、信方とともに、晴信の謀臣として生きてきた。

上田原での六十歳の横死が、今もって信じられぬほどだ。

世情では、志賀城攻めの生首三千の復讐と囃されたが、今にして思えば、それはかりではないような気がする。

村上義清攻めで、諏訪からやってきたときから、なぜか元気がなかった。

上田原での決戦の前日、信方は信方らしくないことを勘助に言ったものだ。

「わしはおぬしのように、やっぱり古府中にいたいぞ」
「どうして？　諏訪の方がよいではござらぬか。湯もあれば湖もある。郡代としているからは羨望の的でござる」
「そりゃそうじゃが……」
「すると、ほかに何か問題でもありまするのか？」
とさりげなく訊いた。すると、
「うむ……」
生返事で歯切れが悪い。
「どうなされた？　謀将といわれる信方殿らしゅうもない」
すると、
「こればかりはのう……」
と大嘆息である。
「そんなに言い淀むほどの難儀でもござるか」
途端、信方は
「フフフ」
と自嘲的に笑った。
「何か知らぬが、二人の仲ではござらぬか」

すると意外なことを言った。
「姫じゃよ、御寮人様じゃ」
「あっ、御寮人様が何とされた？　信方殿に嫌味でも言われますのか」
「まあ、なあ」
と信方は誤魔化した。
「そりゃあ、お館様でさえ手に余るようなお方じゃ。難しく考えることはないと思いまするが」
「それはそうじゃが」
それだけで話をそらしてしまった。
剛直な男だけに、御寮人のような女性の扱いが手に余るのであろう。
しかし、たとえ腹の立つようなことがあっても、相手はお館様の愛妾であり、四郎君の母である。
（要は女の扱いに困っているのだ）
そう思っていた。
ところが上田原での決戦で、信方は自ら勇を鼓して突撃の先頭に立った。
それは村上軍にすぐわかり、忽ちにして包囲されてしまった。その中で信方はやられた。

信方が、晴信の本陣に担がれてきたときは、もう息がなかったのだ。
（もしやして……）
勘助は再び開けてきた視界に、白々と聳え立つ富士を見つめながら思った。
（討ち死にを、覚悟していたのではなかったか）
でなければ、戦さを知り尽くした信方が、そんな突撃などする筈がない。
（となると――）
勘助の思惑は止まった。
信方をして討ち死にさせるような要因などあるのか。
思い出すのは、諏訪郡代屋敷で話し合ったとき、
「姫じゃよ、御寮人様じゃ」
と言ったことばだ。
あの後、なぜかことばを濁してしまった。
それを、ただ権高い女性の扱いに困惑しているとのみ思ったが、
（もしかしたら……）
もう一つの可能性を考えた。そういえば諏訪での信方は、これまでの信方とは妙に違っていた。六十歳にもなって御寮人の前で羞じたり、ぼんやりと湖畔に佇んでいたことがあった。

（あの信方殿までも――）
その年で初めて覚えた恋。しかも相手は、鼻持ちならないほど気位の高い、主君の愛妾。
（信方殿よ）
さぞ苦しまれたことだろう。男の戦さと違い、嗅ぐことも触れることもできない高嶺の花である。
それを相手に苦しんだ挙句、信方は死を急いだのではなかろうか――。
でなければ、敵陣のまん中に身を曝して突撃するなどという無謀をやるはずがない。
恋の業火に苦しんだ挙句、自らの恋の命を絶とうとした。
そこまで考えついたとき、勘助は涙が溢れてきた。
このことを、あの女性は思いもよらないだろう。
それどころか、生首三千の罰当たりと喜ばれたという。
（因果なことよ）
したがわしも同じようなものじゃ。ただわしは高嶺の花を賞でることはあっても、花に触れようとか、手折ろうなど、思ったことはない。
それだけ、世情に擦れ、人情にも擦れているのだ。

じゃからわしは、全ての誠をお館様に尽くしてもおらぬ。それどころか、ときには密かに背いてさえもいる。

それでわしは熱くもならず、冷えもせず、こうして躑躅ヶ崎と諏訪を平静に往来しているのだ。

（もうわしも信方殿の年に近い）

「風林火山」のことばの意味が、本当にわかるのは、わしの年齢であろう。三十歳に満たぬお館様には――。

そんなことを思いながら、釜無川の堤の近くにきていた。

石を噛む清流が、今日は笑うように白い歯を見せながら流れている。

信方と、幾度ここに立って川波や、四囲の山脈を共に眺めたことだろう。

（信方殿よ）

わしもいずれ、おぬしの後につづこう。そのときは、お館様の馬前か、もしかしたら御寮人様のためか――。

（2）

三十歳、元気盛りの晴信の出征欲はますます盛んだ。

塩尻峠で小笠原長時を破ってから、天文十九年（一五五〇）、更に長時の林城を落とし、つづいて深志、岡田、桐原、山家ら、小笠原方の諸城を攻め、いよいよ北信の雄、村上義清に迫った。

再三にわたる北信攻めに、義清は安閑としていられない。

かつて上田原で徹底してやりこめたと思っていたら、兜の緒を締め直して塩尻峠の戦勝から、いよいよ北上してきた。

（信虎の小倅が――）

五十歳代の義清は、武田信虎の悪名は熟知している。しかし、小倅のことはわからない。ただ一つ知れているのは、信虎を駿河に放逐したことだ。

その小倅が、諏訪を従え、佐久を落として、いよいよ中信濃から北信濃へと進駐してきた。

（小倅奴は、信虎を凌ぐ男か）

そんなことを思いつつ、小笠原長時から頼られた義清は、北信の反武田衆を糾合して、本城の葛尾城から砥石城に移った。

本城より、砥石城の方が戦略的によいからだ。

そこは、諏訪から北信に通ずる小県郡南部の要地で、大門・和田両峠の合する山地にある。山岳の高低を利用した要害で、北は桝形、東と西は険しい崖で、登り

口は南の一ヶ所だけしかない。そこに集結した数は五千余。

こちら晴信は、自信をもって砥石城に近い長窪にやってきた。八月の半ば過ぎである。

元来、城攻めを苦手とする晴信は、いわば巣穴に潜んでいる虫を、下に炙り出す作戦を考えた。

そこで何人かの忍びを放ち、登り口や攻め口を探らせた。しかし、ここはまさに鉄壁の要害である。どこからも這い上がる隙がない。

それを無理にして登ろうものなら、忽ちにして矢を射かけられ、真っ逆さまに転落だ。

夜も夜とて篝火をたいて要所要害を固めている。

そうした膠着状態が十日の余も過ぎた。

「お館様、これでは兵糧が尽きまする。決死覚悟の突入か、それともここは一旦…」

勘助は促した。しかし晴信は答えない。のみか、九月一日。

「進め！　いけえ！」

と軍配を振った。大手口からの攻撃開始である。兵を絞って登らせると、山道はだんだん狭くなる。

そこへ上から一斉に矢が放たれてきた。

「ウァーッ」

「ウォー」

と絶叫しながら落ちてくるのは、村上軍ではなく、武田軍である。

「これはいかぬ」

晴信は愕然とした。攻めが難しければ、じっと干乾しを待つしかないか。

しかし、それではこちらの兵糧が持たないだろう。

山国育ちで足腰が強く、粗食に耐え、心身ともに頑健といわれる武田軍だが、食糧不足と長陣には悩まされる。

兵糧の荷駄が、蟻のようにやってきても、なにしろ甲斐は遠い。それに秋風が吹いている。

その頃勘助は真田幸隆の所にいた。

幸隆は小県郡真田郷の城主だった頼昌の子で、天文十年（一五四一）信虎らに攻められ、一旦上州に逃れたが、その後武田に従った先方衆（譜代ではなく、被占領地にいる者）の筆頭である。

「真田殿、一つ頼まれて欲しい」

幸隆は、勘助は醜男ながら、深い才智と鋭い機略を備えていることを知っている。勿論勘助も幸隆の人物を見込んでのことである。

「金のことは、真田殿のお望みのまま。当方は上積みこそすれ、値切るものではござらぬ」

と前置きして、周辺地域の調略、懐柔を請うた。

その甲斐あって、義清の幕下から清野、埴科郡の寺尾一党や、高井郡からは須田らの誘降に成功した。

だからといって、彼等が積極的に戦力になるわけではない。義清の戦列から退いたというだけである。

そうなると義清は、北信の豪族、高梨政頼に呼びかけて連合し、一気に武田への総攻撃を考えた。

一方、武田陣営では、玉砕覚悟で攻め登るか、それとも後日を期して撤退するかの二説で決まらない。

そして十月一日、その朝は氷の張る寒さである。霧が辺りを圧するように低く垂れ、太郎山の辺りを不気味な黒い雲と霧が覆っている。

不吉な予感がした。

この様子では砥石城攻撃を止めなければならないだろう。それとも撤退か――。

決心のつかぬまま、屯していると、俄に轟くような音がした。

（雷か――）

と思っていると、なんと霰にあらず、矢の雨である。

（さては隙を衝かれたか）

まさにその通りであった。矢の雨の次は、オーッと喊声をあげて槍隊の突撃である。

それまで、往くか退くかを決めかねている所へ不意打ちである。

虚を衝かれた武田軍の狼狽と混乱は極に達した。

「かかれーっ」

「かかれーっ」

と叱咤する号令も空しく、バタバタと倒れるのは武田軍である。

空を見上げれば、灰色の雲は黒雲と化し、四辺は宵かと思うばかりの様相となった。

（不吉な――）

そう思ったのは晴信ばかりではない。この戦さに、天は味方しないと悟った晴信は、

「退けえ、退けえ」
と叫んだ。
しかし、このとき既に武田軍の死者は相当な数にのぼり、信虎、晴信の二代にわたって活躍した足軽大将横田高松が命を落とした。
後世はこれを「砥石崩れ」と称して、晴信の敗北を伝えている。
諏訪への撤退の道中、晴信はどうかすると涙さえ催した。
(所詮わしは村上の爺に勝てぬか)
上田原での敗北と合わせて二度目である。
重い足を引いて上原城へ戻ってくると、既に勘助が先廻りしていた。
「勘助――」
まるで外で喧嘩して帰ってきた童子のような泣き面である。
勘助はそんな晴信を初めて愛しく思った。
「多くの兵を失うた。無理であったわ」
「敗け戦さの経験も必要にござります」
「したが義清にはこれで二度じゃぞ」
「相手は老獪にございます。お館様もそんな敵を相手にして戦さを覚えられまする」

「そうか……」
晴信の表情が少し明るくなった。
「それでは湯にでも入られまするか」
と労うと、
「いや、兵らが疲れておるわ。兵らにこそ湯をすすめてやらねば」
「はあ」
どうやらこれで少し、大人になられたようだ。
「ところでお館様」
と勘助はことばを継いだ。
「何じゃ」
「御寮人様の所へはご遠慮なされた方が」
「何の遠慮じゃ？」
「戦さの話になりましょうから」
「敗け戦さじゃからか」
「いや、敗けても勝っても、あのお方に信濃攻めの戦さ話は良うござりませぬ」
「そうか」
「戦さのないとき、お会いなされませ。その方が」

「よう気のつく男じゃな、おぬしは」
晴信の顔に苦笑いが浮かんだ。

（3）

古府中に帰ってくると、もはや年の暮れであった。
諏訪からの道中、晴信が考えつづけてきたことは、嫡男太郎の元服である。
十三歳になっている太郎を早速元服させ、父に付いて戦さを覚えさせねばならない。
思えば晴信の元服は天文五年（一五三六）の十六歳。そして初陣は十一月、父信虎に従って南佐久の海野攻めであった。
そのときふいと浮かんできたのは、四郎の顔であった。
（まだ五歳じゃ）
この四郎が、まさか二十三年後、武田の名跡を継ぐ男になろうとは思いもよらない。
躑躅ヶ崎館の本丸御殿に、武田家の親族、そして譜代の重臣たちが居並んでいる。
正座に晴信と太郎が着座し、今しがた終わった元服の式により、太郎は武田義信と名乗り、武田家の世嗣となった。その披露である。
「慶賀にござりまする。武田家の繁栄、発展が楽しみにござる」
と、次々に賀詞を述べられ、晴信夫妻と義信は満面の笑顔である。
これを機に、重臣たちも衣装を新しくし、広間は一段と晴れやかだ。
正面の上段に、武田菱の紋を染め抜いた素襖に、烏帽子姿の太郎義信が父晴信と共に座している。
盃が交わされ、座が和やかになったとき、一人が、
「そうしたお姿が、先代様に似ておられまする」
と言った。途端、晴信の表情が微かに揺れた。
「余計なことを言うものではないぞ。先代様のことはここでは禁句であろうが」
重臣の一人からそう窘められて、男は一寸首を引いたが、
「そう思うたから言うたまでよ。悪いか？」
「悪いとも、それ見られよ、お館様の顔から笑みが消えたわ。お館様に似てこられたというならよいが、祖父様に似てきたなど。まして、先代様を追放されたのじゃぞ」

「うーむ。したが似ておられる。よく見られよ」
と男は譲らない。ともかく酒席は、賑やかになってきた。
しかし晴信の顔は冴えない。
なぜなら十五年前、晴信もこうして元服姿で父信虎の横にいた。そのときも家臣たちから
「お館様に似てこられましたぞ」
と次々に囃されたものだ。
そこで父は満足したかもしれぬが、晴信はむしろ不快だった。
誰に似るといって、父にだけは似たくなかった。
丸く前に出た顔に、獲物を狙う動物のように貧婪な目、そしてぶ厚い唇もまた動物的だ。
その父から愛されもせぬ息子が世嗣となった。それはよいとして、父に似ているとだけは言われたくなかったものだ。
披露が終わり、居室に戻ってきた所へ、元服姿の義信が礼を述べにやってきた。
大人の装束を着けて現われた義信を、改めて真向いから見て驚いた。
(これはまさに信虎似じゃ)
ということは、自分もまたあのように嫌った信虎の面をさげているのだろう。

義信の口上を聞くと、晴信は直ぐに退がらせた。
（親父殿と対しているようじゃ）
思えば信虎・晴信・義信の三代は、武田家の悍ましいものを受け継いでいるのではなかろうか。
（これはいかぬ）
晴信は溜息をついた。
すると晴信の脳裏に、三代の凶性と異なった全く異質の顔貌が浮かんできた。四郎である。
頼重、瑶姫、四郎、三代の顔を繋ぐと、武田とは全く違う異質の風貌がそこにある。
（諏訪大祝の血統――）
武田にないのは、そうした高貴な品性であろう。
（わしは早まったか）
武田の世嗣は、義信ではなく、四郎にすべきだった。
しかし、こうなったからには手遅れだ。
そこへ勘助が現われた。
「元服と、お世嗣の披露、まことに祝着にござります」

そう言う勘助に、晴信は大吐息をついてみせた。
「これはまたおめでたきときに、その溜息は何でござります。何ぞほかにござりまするか」
「ああ」
と晴信は誤魔化さなかった。
「私奴にお洩らしいただけるようなことでも……」
「うむ」
と晴信はまた息を吐くと、暫く黙った。
部屋の割に火桶が足りず、寒気が張りつめるようだ。
「火桶をふやしまする」
と勘助は立っていった。すると間もなく近習たちが大火鉢を抱えてきた。
炭を沢山ついだらしく、炭火の匂いが立ち、赤い火に、青白い炎まであがっている。
こうしなければ、胸奥の溜まりを溶かせないと思ったからだ。
「次の戦さのことにござりまするか。砥石城のことは、いずれ真田が何とかいたしましょう」
つまり「砥石崩れ」の敗退の不面目を、真田幸隆が払拭してくれるだろうという

ことだ。

というのは、勘助が諏訪へ戻る前、幸隆に向後のことを頼んできたからだ。

そのために驚くほどの資金を幸隆に渡してきた。

「いや、戦さのことではない」

「戦さのことではないと仰せられますと？」

片眼の勘助は、その目を不気味なほど光らせた。

「義信がことじゃ」

「義信様と？　このたびめでたく世嗣となられたではござりませぬか」

「うーむ」

と晴信は唸ってしまった。

「何か？」

いかにも言い難そうだ。

「ならようござりまする」

と立ってみせると、

「いや、一寸、待て」

と引きとめる。

（余程、言いにくいことのようじゃ）

そういうときは、黙って堪えることだと火桶の傍らに座した。

炭の炎を見ていると、志賀落城の火を思い出した。

（生首三千と火か――）

その恨みは千載に残ろう。

（ああしたことを、させてはならぬ）

そんなことを想っていると、いきなり

「わしは早まったぞ」

と晴信が言った。

「早まったと？　何をでござりまするか」

「義信がことじゃ」

「義信様の何をでござりまするか」

「世嗣がことよ」

「世嗣がことでござりまると？」

勘助にはいきなりで、わかりかねた。

「つまりじゃ、義信を世嗣としたことじゃ」

「それは何ゆえ？　ご嫡男におわせば、当然のことではござりませぬか」

「普通はそうじゃ。したが、彼に元服させて初めて気が付いた」

「何に気付かれましたので？」
「……」
ことばがつづかない。その間勘助は炭火を見つめ、それから床の掛け軸の墨絵や、調度に目を移していた。それほど時間がかかったということだ。
「勘助」
晴信は重い口を切った。
「はあ」
「いきなり廃嫡というわけにもいくまいな」
「今、何と!?」
「廃嫡じゃ」
「どうしていきなりそんなことを」
「そちじゃから正直に言おう」
「はあ」
「わしは今まで、太郎の顔と向き合うて話したことがなかった。ゆえに、太郎の顔も正直いってよう見ていなかった」
「それで？」
「今日、彼が威儀を正してここへ入ってきたとき、初めて真っ向うから見た」

「はあ」
「わしは愕然としたのじゃ」
「一体何に？」
「彼の顔が、父信虎によく似ていたということじゃ」
「その通り、よく似ておられまする。したがお館様にも似ておられまする」
「では訊くが、わしの顔は誰に似ている」
「それは信虎様でござりまする」
「やっぱりそうか」
「子が親に似るは当たり前のことではござりませぬか」
「男は滅多に鏡などというものをのぞいたことがない。よってわしは、自分がどんな顔をしているか、そんなことを考えてもみなかった」
「……」
「わしは父の顔が嫌じゃった。獰猛で野卑な顔じゃった。ところがわしも父と同じような面じゃということを、元服のとき聞かされた。
その父を、わしは駿河に追放したが、今日義信の元服で、彼が信虎に似ていると誰かが言うた。わしでは憚るゆえ、信虎と言うたのであろう。信虎の顔は、わしだけでよい」

「と言われましても、現に義信様の世嗣発表はなされました」
「そこで困っているのじゃ。わしは廃嫡したいとさえ考えている」
「では義信様の代わりがほかにござりまするか」
「ある」
晴信は言下に言い切った。
「四郎じゃ」
「四郎君！」
まさかとは思ったが、太郎義信の廃嫡まで考えるとはいささか驚きだ。
「したがそれは贔気が過ぎましょう。ご正室の義信様がおられるというのに、脇腹の五歳の幼君では筋が立ちませぬ。武田家に内紛が起こり、忽ちにして争乱の元となります。これだけは勘助、承服なりませぬ」
「そうじゃなあ」
意外に素直なことばが返ってくる。
「四郎君へのご寵愛はわかりますが、何ゆえそこまで義信様を排されまするか」
勘助から見ても、義信は決して廃嫡されるような男ではない。晴信似の男顔に、母三条ノ方の訓育であろう。京風の風雅を身につけた男でもある。
そういう意味では、晴信よりいい男と言うべきだろう。

「勘助」
「我ながら恥ずかしいことを言わねばならぬ」
「はて？」
勘助は首を傾げた。
「義信はわしに似過ぎた」
「いいことではありませぬか」
「いや、わしは父を嫌うた。その父に似たわしであり、更にわしと父の面輪を受けた義信が堪まらぬわ」
「したがそれは義信様のせいではござりませぬ」
勘助にはわかった。晴信の言わんとするところが――。
「お館様、因果を背負うて生まれた子を、忌んでどうしましょう。お館様も愛されなかったとはいえ、廃嫡もされず今日がござります。
親は子を見て、己が因果を感ずるように、子もまた己に親からの因果を覚えます。そうして代々、生きていくものでござります。
それに四郎君は、御寮人様のご希望通り、諏訪の大名になされませ。そこで甲斐も諏訪も丸くおさまりましょう」
そう言う勘助は、晴信のためというより、瑶姫のためを思って口説していた。

十一．落花

（1）

「只今北信濃、小県郡の真田幸隆殿からの伝騎にて、村上義清の砥石城を攻略したとの報にござりまする」

という報せが入った。

「聞いたか、勘助。幸隆があの砥石を攻め奪ったと。おぬし、どんな策を与えたのじゃ」

昨年の晩夏から秋にかけて、村上義清の拠る砥石城攻めで、世に「砥石崩れ」と言われた武田の敗退の面目を立ててくれた。

その報復を、真田幸隆に賭けたのは勘助である。

「碁石金でござりまするよ」

碁石金とは、甲州金を碁石の大きさにしたもので、それを法外な量で幸隆に渡したものだ。

幸隆がそれで動かぬ筈はないのである。

後から入ってきた情報によると、田植えで忙しい農兵たちが家に帰り、守備兵の少なくなった夜、真田と知った城兵が、搦手の門を開けてくれた。まさかそれが武田側の攻め手とも知らずに。

そこで難なく城を奪ったというのである。

「ワハハハ、一兵も損じなかったとはのう」

昨年の砥石崩れでは千余人の兵を失っているのだ。

「智恵じゃ、智恵。ときには智恵（謀略）が千余人の力になるものじゃなあ」

智恵の一つは金であろう。甲斐は山国、米は十数万石だが、他国に取れぬものがある。それが金だ。このお陰で調略の資金となる。

躑躅ヶ崎へ戻った晴信は、元服した義信の初陣を考えた。

村上の拠点の一つ砥石を奪ったからは、残るは葛尾城である。

塩尻峠の合戦で小笠原長時を追ってから、長時の林城、深志城を奪った晴信が、一万の兵を率いて北上したのは天文二十三年（一五五四）の春であった。

傍らには義信が付いている。初陣である。

一方、義清は葛尾城にあって、晴信の再度の挑戦を待っていた。

義清としては、晴信が北上してくる道すがらの各城砦の部将たちが、武田軍を悩ましてくれるだろうと信じていた。

ところが刈谷原、塔原城は簡単に落ち、屋代、塩崎など、幕下の武将たちがみな寝返ってしまったのである。

「糞！　どうしたというのじゃ」

憤慨しても事態は急迫するばかりだ。やむなく義清は兵を残して一旦葛尾城を脱出した。そして道中、麾下の将たちに檄を飛ばしながら北信の高梨政頼の許に走った。

そこで政頼の援兵を得ると、葛尾城に引き返した。既に武田に奪られていた葛尾城に討って入り、どうやら奪還したが、またまた武田軍に巻き返されてしまったのである。

それぱかりではない。大日方小五郎、麻績清長、清野左近太夫らが続々と晴信に投降した。

「わしが老耄れたと見ると、信濃者はそんなに簡単にわしを見限り、他所者に靡くものかな」

と義清は歯ぎしりして慨嘆した。すると楽岩寺光氏は、

「情けのうござるが、これは金に惚れてのことにござります」

と言った。

「金じゃと？」

「甲斐は土地狭く痩せておりますが、一つだけ天は恵みを与えました。それが金山でござりましょう」

「ほう、金とな」

「碁石金と申しまして、碁石のような形の金を、片眼の男が相当撒いておりました。真田幸隆はじめ、諸所の将や豪族たちが心を翻したのは、みな金のせいでございます。恐るべきは武田の軍ではなく、金の力にございます」

そう言われてはこれからも勝ち目はない。

「ではどうしたらよい」

「一人、俗に目をとられぬ『義戦』をもってする人物がおります」

「越後であろう」

「はっ、まだ二十四歳の若年にござりますが、なかなかの人物にて。この男を頼られてはいかが」

「たしか長尾景虎」

「一度春日山城をお訪ねなされては」

ここは古府中の躑躅ヶ崎館。

武田軍の征くところ、全戦全勝にて、初陣の義信は有頂天である。

「初めての戦さゆえ、内心臆するところがあったが、面白いくらいじゃった」

と吹聴した。

それが聞こえて晴信の雷が落ちた。

「愚か者奴が！　戦さを面白かったとは、戦さを知らぬ者のことばじゃ。武田がどこで、どんな手を打っているかも知らず、馬鹿なことを申すでない。わしの初陣などはなあ」

晴信は十七年前の信州海ノ口城攻めのときのことを語った。

今は亡き板垣信方と義信の傅役、飯富虎昌が考案した「赤備え軍団」である。すべてを赤色にした燃える軍団は、それだけで炎の如き威圧感があった。

この攻防戦は当時、豪雪と酷寒のため、途中で撤退となった。

殿軍だった晴信は、それが悔しく、その様子を見てとった虎昌が、

「それでは」

と引き返し、油断していた海ノ口城を一挙に攻め落とすという快挙だった。

「命の瀬戸際まで追い詰められ、勇を鼓して戦うものぞ」

この経験が、その後の晴信の自信に繋がっている。

初陣を果たした義信に、早速婚儀の話が持ちあがった。相手は姻族に当たる東海の雄、今川義元の姫である。

義元の妻は晴信の姉だが、四年前に病死している。そこで、駿・甲の関係が希薄になることを恐れての縁組みである。

ところが義信は同意しようとしない。

「何が不足でござりまするか」

と虎昌は訝った。しかし、義信は口を割ろうとしない。

「困りましたぞ、若。何か理由がござりますなら、お明かし下され」

直ぐどころか、二、三日も口を割ろうとしなかった。

それを晴信から詰られて、虎昌もその気になって問い詰めた。すると、義信には好きな女がいるというのだ。

「お相手はどなたで？」

しかし、これまたなかなか口を割らない。

「割らせろ」

晴信の恫喝で、とうとう口を開いた。するとそれはなんと、父晴信の側室の一人だった。

「これではなかなか口を割れぬ道理で」

虎昌は溜息をついた。

しかし、晴信の側室佐登と密会をしているようなことはなく、いわば義信の片思いだったようだ。

そこで佐登の首の皮は繋いだが、その恋は諦めさせられた。

「親父の側女に惚れるとは……」

晴信は苦笑した。そう言いながら晴信も、十二歳頃、父信虎の側室に淡い恋心を抱き、父に隠れて迫ったことがあった。

（誰でも引く風邪のようなものじゃ）

ともかく、一国の太守たらん者は、好き勝手に妻を娶ることはできない。政略、戦略を考えての縁組みでなければ、後で苦労するばかりだ。

因果をふくませて、今川義元の姫を迎えることを承諾させた。従兄妹同士である。

そこで虎昌が駿府に走った。今川家の謀臣太原雪斎に会って旨を伝えると、

「それは結構」

と喜んでくれた。のみか、駿・甲のみならず、相模との提携、もっとはっきり言うと、駿河・甲斐・相模の三国同盟の必要を説かれた。

「そのためには――」

と雪斎は膝を進めて、

「相模の北条家に、武田家の姫を嫁られてはどうかな。当家の氏真殿（義元の嫡子）には、北条家の姫（氏康の娘）を迎えることになっている。これで三方丸くおさまり、東海筋の安定が固まるということじゃ。帰られたら、武田殿にこのこと、とくと伝えて下され」

さすが今川氏の智恵袋といわれる雪斎殿だと、虎昌は感心しながら躑躅ヶ崎に戻ってきた。

「そんなことを言われたか。さすがは雪斎殿じゃ」

これまで北条氏康はしばしば駿河へ越境し、油断がならなかった。

その覇望に待ったを掛けるのは、婚姻関係を結ぶしかない。といっても、適当な年齢の子女がなければならない。

「ところで北条の倅殿は幾つかな？」

「たしか十七歳と承って参りましたが」

（となると……）

晴信の長女梅姫は十五歳である。この時期晴信には三人の娘がいるが、その中で晴信が特に愛しているのは梅姫である。

正室三条は決して美人とは言えない。しかし、山国甲斐や信濃で、京から正室を迎える例は少ない。

まして三条は、京の公卿、三条左大臣公頼卿の息女である。そんな媒酌の労をとったのは、今川氏親（義元の父）であった。

甲斐源氏惣領武田家嫡子への輿入れであった。

しかし、それもこれも、今川家との縁、その肝入りあってのことである。

京のしかも、清華七家の姫ということで、晴信は期待と恐れさえ覚えて待ったものだ。

しかし、輿入れ後もすぐ手がつけられなかった。京のしきたりという壁と、緩慢な京の公家ことばは厄介だった。

十日の余も手がつけられず、初夜の褥で初めて妻の素顔を見た。

それは古府中辺りで見る女の顔とは違っていた。古府中の町中や、畑で見かける女には陽や風の匂いがある。

ところが京からきた妻にはそれがない。いわゆる能面のように白く無表情なのだ。

（これが京の女の顔か）

と落胆したものだ。

それでも息子三人に娘が三人生まれた。その中の長女梅姫だけは、どの子よりも愛らしく、晴信が一番愛する娘である。

その娘を、今川ならともかく、父の代から抗争のつづいた北条に嫁がせることに躊躇いがある。

迷う、迷った。しかし、雪斎が言うように、甲駿相の三国同盟は晴信にとって必要である。

その安定の上に、信濃攻略をつづけることができる。

（それに対して）

今川はいよいよ上洛戦を考えているのか。それは義元本人か、それとも雪斎の指南であろうか。

しかし、自分はまだ一度も京へ上ったことがない。京のことは、妻の寝物語で聞かされるばかりだ。

（いつか自分も……）

それには当面、信濃攻略をつづけて、甲斐の領土拡大を図らなければならない。よって上洛はその次だ。

こうして子らの縁組みや、信濃征伐に多忙な晴信は、とんと諏訪から遠のいていた。

（2）

ここ諏訪の希望は四郎の成長である。九歳になった四郎は、母譲りの白面、貴公子の風貌を備えつつある。

それに母への甘えも解け、諏訪氏一門の頼豊や頼忠から字や書を学び、高島城へ出向いては鼓や笛の稽古も始めている。

ところが肝心の瑶姫が昨年頃から体調を崩している。

夕方の発熱と軽い咳、侍医は労咳（結核）を宣告した。

「やっぱり……」

熱っぽいけだるさと、喉を突く咳に、異常を覚えていた。

ここ二年ほど、晴信の足が遠ざかっていても淋しいとは思わない。

躑躅ヶ崎では若い女が次々と入り、晴信の性欲を満たしている。だから、何も体を蝕まれている瑶姫の所へくることはないのだ。

熱っぽい体を起こして、ぼんやりと蔀戸の開いた彼方の山脈を眺めていると、

足音がしてきた。その音で四郎だと直ぐわかる。

「母上、只今から上原城まで行って参ります」

つい最近まで、母の側を離れず、騎乗も同行をねだったくらいだが、瑶姫が臥せるようになって、母から離れた。

それが淋しくもあり、頼もしくもある瑶姫である。

「あそこは高いゆえ、気をつけて行きなされ。して、付き人は誰じゃ」

それを訊くことを忘れない。

「頼忠様」

「そう。それはいいこと」

四郎の足音が遠ざかると、上原落城の火を想い出した。焼かれたというより、父頼重が手ずから焼いた城だった。

そこを、板垣信方が新しく造り直した。

諏訪攻めの先鋒に立ち、勘助と共に、諏訪降伏を取りにきた信方も今はもういない。

上田原での討死を志賀の生首三千の報いと嗤ったが、もうそんな怨みも消えた。

（死が全ての怨念を洗い流すというのであろうか）

そんなことを思うようになった。

（もしかしたら、わたしの死も近いのではなかろうか――）

麻績へ帰った母も既に亡い。なぜか今まで忘れていた亡き人のことが思われる。

そこへ真志野が入ってきた。真志野の頭も、この頃では白髪が目立つようになった。

「お加減は？」

といつもと変わらぬ笑顔である。

「この頃つくづく思うようになったわ」

「何をでございます？」

そう言いながら真志野は、瑶姫の好きな葛湯を用意してくれている。

「それよりこれを」

と、塗りの木椀に八分目の葛湯が、白くとろりとして食欲をそそる。

「そなたは」

「わたくしは後で」

とやさしい目を向けている。

手に取って木椀を近づけると、葛の匂いが立って、幸せを感ずる。

「わたしはそなたをずっと母者と思うてきた」

呟くようなことばに、

「勿体のうございます」

と真志野は軽く目頭を押さえながら、

「四郎様のために、お元気でいただかなければなりませぬよ」

ときっぱり言う。

「ところで紳四郎はどこにいよう」

この年になっても、まだ瑶姫の心から消えぬようだ。

「多分、信濃のどこかに」

「武田と戦うとなれば村上じゃが、その村上も敗れてしもうた」

「それでは、上杉殿の所ではありませぬか」

「いや、上杉殿は北条氏康にやられ、平井城を捨てて、越後へ走ったという」

「越後ならば、遠うございますねえ」

二人は思わず深い吐息をついた。

「それに勘助は何をしている」

「さっぱり顔を見せませんね」

その日、勘助がやってきた。陽の落ちた頃である。

「御寮人様、ご無沙汰をいたしておりました」

俯き加減の背が更に丸くなり、薄くなった鼠色の毛を細く絡げ、片脚の引き方もひどくなっている。

まさに老いが勘助の容態を変えていた。

一方、勘助もまた、瑶姫の変容に驚いた。輝くばかりの明眸は冬の湖のように沈み、張った頬も痩けている。

一見して労咳とわかった。

(知らなかった)

この様子ではそう先は長くないだろう。

(何ということだ)

手遅れである。早くにそれがわかっていたら、手の施しようもあったのに……

諸国を経歴って名医と良薬を探してこようものを。それだけの自信はある。しかし、この容態では難しい。

涙の出そうな感情を抑えながら、気をとり直して顔をあげた。

「そなた一体どこにいたのじゃ」

「はっ」

「また戦さの仕掛けか」

「そう言われまするとと心苦しゅうございます。実は城造りなどをいたしておりまし

た」

「何！　そなた城造りを？」

「はっ、私奴は若い頃から諸国を経歴っておりました。そこでいろいろな城や人を見て参り、城造りもそういう中で覚えたものにござります」

「そなたにそんな才覚が――それでこれまでどんな城を」

「新しい城を造ったことはござりませぬ。専ら修理、修築のみにて」

「どこの城をじゃ」

「小笠原長時の林城や深志城、前には高遠、それから小諸など……」

「そうじゃったのか、城をのう。ならばどうして上原城をやってはくれなかった」

「上原城を攻め、城乗っ取りにやってきた私奴では、諏訪の方々の顰蹙を買いましょう」

「……」

瑶姫は溜息をつくと灯を見やった。ほの明るい灯の先に、瑶姫の白い横顔に赤みがさしている。

「それで今は？」

「そろそろ武田の新しい城造りをと考えておりまする」

「新しい城をのう」

「はい、これまでは人の造った城の修築のみに当たっておりましたから」
「で、そなたが造りたいと考えている所は一体どの辺りじゃ」
「はい、川中島辺りと考えております」
川中島とは、千曲川と犀川が合流して挟む三角地帯の総称で、善光寺平が中心に展開し、高井・水内・埴科・更級の四郡からなる。
「そこで何のための城造りじゃ」
「信濃では村上を追いましたが、その代わり、越後の長尾景虎が北信濃にやってきます。この景虎とはいずれ一戦に及ぶことになりましょう。いや、一戦どころか、何度か重ねることになるやもしれませぬ。そのための城造りを」
「それで川中島のどの辺りじゃ」
「越後との戦さにござりますから、その辺を考えて、千曲川辺りの海津あたりと考えております」
「やはり戦さは止められぬか」
瑶姫は溜息をついた。
「防備は必要にござります。まして相手は越後の景虎」
「そんなに強いのか？」
「まだ二十四、五の若さでござりまするが」

「してどちらが勝つ？」
「わかりませぬ」
「わからぬと？　そなたらしゅうもない」
「いや、私奴は御寮人様には正直にござります」
あの信方にさえ折々嘘を言ってきた。それにお館様にも本当のことを言わないこともある。
しかし、瑶姫の前では、年甲斐もなく少年のように含み、正直だ。
それでも気がつけば、病篤い女に向かって、難しいことを言い過ぎたようだ。
「これはこれはいけませぬなあ。もっと楽しい話など申し上ぐべきところを――私奴はやっぱり不粋な男でござりまする。さ、お休み下さりませ」
と、瑶姫の体を気遣って横にさせた。
勘助から目を離して、天井を仰いでいる瑶姫の横顔の、何と清雅な面輪であろう。彫像のような気品である。
「御寮人様」
「ん？」
「私奴に何ぞおっしゃることはござりませぬか」
勘助は恐る恐る訊いた。

「ああ、四郎を。四郎の行く末を頼みたい。そして必ずこの諏訪の主に」
「はい、命の限り、若君のお力になりまする」
そう言いながら勘助は、悲しみより、むしろ幸福感さえ覚えていた。
(わしはこのお方から頼られている)
それは晴信から頼られることとは全く異質の感情である。
人を謀り、騙し、また人を殺し、殺される修羅を何度見てきたことか。
その果てに、無力な天女に出会ったとでもいおうか。
瞼を閉じている瑶姫を見つめながら、ふとこんなことを想った。
(お館様のために死ねるか、それともこの女のために死ねるか)
という問いかけだ。
(今のわしは、御寮人様だろう)

屋敷を出たのは何刻だろう。もうあたりは真っ暗、屋敷の灯が小さく見えるだけである。
と、そのとき、手燭の灯に人影が映った。
この時期、もう門番は立っていない。
(何者か?)

勘助は人影の方に近づいていった。見ると顔を包んでいる。
「何者じゃ!」
誰何すると男は立ち止まった。間は数間ほどであろうか。
これをやはり「出会い」というのであろうか。男は、夜目にも異様な歩行の男を、勘助と悟ったようだ。
そして勘助もまた、灯に映る長身の黒衣の男の姿に覚えがあった。
「おぬし、いつかの――」
そう言うと男は立ち止まった。
「わしに覚えがあるか?」
男は無言である。
「では思い出させてやろう。古府中の大洪水の夜じゃった。西曲輪から女装の男が出てきた。次は上田原、一番初めは西沢渓谷じゃった」
男は無言である。
「名を名乗られよ。わしは山本勘助じゃ」
「名などない」
「そうか。では今宵何しにやってきた」
なおも無言である。

「おぬし今、どこにいるか知らぬが、御寮人様がお悪いと聞いてやってきたのであろう」

途端男は口をきいた。

「何、お悪いのか？」

というところをみると、知らずにやってきたようだ。

「そうとも。この秋までお命があるかどうか……」

「それはまことか！」

声が急迫してきた。

「まことじゃ。わしも実は驚いた。久しくここをお訪ねすることがなかった。そして今宵お訪ねしたら、なんと労咳であられた」

男は無言である。

「おぬし、疑うているのか？」

「……」

「安心せい。わしはおぬしを捕らえたりなぞせぬわ。捕らえるなら、とっくに躑躅ヶ崎の西曲輪で——。わしが何ゆえおぬしを見逃したかはわかるまい」

「わからぬ。今もってわからぬ」

「わしは武田の飯を食うてはいるが、実を言うと諏訪贔屓（びいき）じゃ」

「諏訪贔屓となな!?」

（御寮人様を想うているとは言えぬが）

「よって今も、わしはおぬしを捕らえるつもりはない」

「……」

「余命幾ばくもない御寮人に、こうして会いにこられたというのも、神仏のお導きであろう。心して愛（いと）しんでおあげなされ」

紳四郎は驚いた。

「忝（かたじけな）い」

「では名乗られよ。わしだけが知っていればよいことじゃ」

男はそれでも口を割らない。

「名など聞いて何とする。敗者には名などない」

「いや、わしだけは知っておきたい」

「そうか——」

それでもまだ躊躇っている。

「ならばよい。強いては訊くまい」

すると男はいきなり被りを脱いだ。

手燭の灯に、初めて男の顔が映った。眉の濃い凛々（りり）しい男惚れのする風貌であ

る。

（いい男だ――）

「元、諏訪頼重公の家老、茅野伊豆守の倅紳四郎にござる。御寮人様とは幼な馴染。父の命にて、御寮人様をお守りするのが私奴の役目」

それで十分だ。こちらが想像していた以上によき男であった。

「ではお許しいただいて」

病と聞いて紳四郎は裏口へと急ごうとした。それを、

「一寸待たれよ」

と再度呼び止めた。

「御寮人様に会われる前に、一つおぬしに話がある」

と勘助は樹立ちの陰に誘った。

「何か？」

「わしの問いに正直に答えられよ」

紳四郎はことばを待った。

「おぬしは鉄砲を、どこで手に入れた」

「どうしてそんなことを尋ねられます」

「気になってな」

「御寮人様の叔父上様から頂戴した」

「そうか。で、どこで射撃の腕を磨いた」

「そんなことは、お話しすることではありますまい。その気になれば、どこでもできることではありませぬか」

「いや、おぬしの腕前に感じ入ってるからじゃ。西沢といい、上田原といい、間一髪じゃったからな」

「それで？」

「西沢以来、お館様は武田の鉄砲隊を考えられるようになった。よって六百挺の鉄砲を揃えたが、射撃は今一つじゃ。そこでおぬしに教授して貰えまいかと」

「できませぬ」

「どうしてじゃ。諏訪者が村上軍に身を投じ、更には越後へと流れたとて、身を磨り減らすばかりではないか。おぬしとて女房を娶り、子を作って人らしい暮らしを望んでもいいように。そのためには武田の為になった方がよいではないか」

「できませぬ」

即答である。

「なぜじゃ」

「武田はわたしにとって仇。時がたっても仇は仇」

「したが御寮人様は、とっくにお館様の側室になっておられる」
「それは勝者が敗者に無理強いしたこと。御寮人様の本意ではありませぬ。よってわたしが御寮人様に代わって報復を――」
勘助は直ぐに悟った。
（それは此奴の愛であろう）
紳四郎のひたむきな忠実に、震えるような感動さえ覚える。
（羨ましい限りだ）
「それでは部屋に上がられよ。そして明るくならぬうちにきっと出られよ。わしは近くの郡代屋敷に入る」
「忝うござる」
そう言い残して紳四郎は中へ消えた。

天文二十三年（一五五四）秋。
山々の紅葉が葉を落とし、湖の上を吹き渡る風がいよいよ凜烈を増してきた。
絶世の美姫と謳われた瑶姫こと諏訪御寮人が、遂に二十七歳の命を終えた。
その報せを、三人の男たちはどう聞いたか。
躑躅ヶ崎館の西曲輪、折しも側室の部屋から出てきた晴信は、一瞬、眩惑したよ

うに立ちすくんだ。
「諏訪が死んだと⁉」
信じ難く、衝撃だった。悪いとは聞いていたが、それほど悪かったとは知らなかった。
身辺多忙に紛れ、つい諏訪への足も遠のいていた。
「諏訪よ」
臈長けた、掛け替えのない美姫だった。しかし、どんなに愛しても報われない愛だった。それゆえに愛の苦悩を教えてくれた女だった。
その日のうちに晴信は、近習を従えて諏訪へ走った。

そして山本勘助。
覚悟は出来ていた。ゆえに驚かなかった。
この年齢で初めて味わわされた恋であった。
欲望なぞない。あの女の存在そのものが美であり宝だった。
諏訪の屋敷で相対した。あれが最後だったが、あれで十分だ。
（わしの冥土への玉手箱じゃ）

そして茅野紳四郎。
諏訪屋敷の夜。壊れそうな体ゆえ、抱けなかった。しかしあのとき、思いもかけぬことを聞かされた。
「四郎は、あなたの子じゃ」
と――。
それは本気だったかどうかわからぬ。どちらにしても、諏訪の象徴として生かし、守らねばならない。
（俺の人生はこれから始まる）

十二．川中島

（1）

弘治元年（一五五五）七月半ば。高原の空気は涼しい。

甲斐から塩尻峠を越えて、延々と北を指す兵列がつづいている。その数約八千の強行軍である。

そのうち、「赤備え」数百が、夏の陽を受けてひときわ目立っている。

兵の数だけ荷駄も多く、グワラグワラと車の音が響く。その荷駄の中に、菰に包まれた荷が幾つも重なっている。

それが今回の戦さの特別な武器である。それを扱える兵が約千人、彼等はいわば特殊兵だ。

すると、軍列から可成り離れた所を、見え隠れに一人の男が尾いていく。

黒網代の笠を目深に被り、野袴に脚絆、合羽を付けている。

男は紳四郎。このたびの越後、長尾景虎との戦さに、三百挺の鉄砲が使われると聞いて、諏訪から待ち伏せて尾いてきたのだ。

紳四郎の関心事は、三百挺もの鉄砲をどう使うかということだ。

この春、躑躅ヶ崎の近くの八幡社で、六百挺の鉄砲の演習が行われた。

それを見に行こうと思ったが、諏訪満隣から止められた。

「そなたのことは知れている。八幡社では一般に公開して観せるというが、恐らく警戒は厳しく、そなたを待ち伏せしているのではないか。

いや、そなたばかりではない。近国の領主たちも武者を変装させて、探りに出していよう。止めることじゃ」

そう言われて諦めた。

ところが越後軍との戦さに鉄砲が使われると聞いたからは、何が何でもこの目で確かめなければならない。

一方、こちら軍列の中の勘助は、馬の背に揺られながら、八幡社での演習を思い出していた。

あのときこっそりと人垣の中を探したが、見当らなかった。

（奴はくる筈だが）

姿を見つけたら、実演させるつもりだった。しかし、見透かされたか遂に現われなかった。

（何とかして、引き入れたいものじゃが）

八千の兵が善光寺平の旭山城に入った。とはいっても兵数が多くて入りきらず、大半が野営となった。

一方、長尾景虎の越後軍の拠点は城山である。目と鼻の先といってもいいほど近い。こちらは五千、兵は全て城の中に収まっている。

夏だからよいものの、秋から冬にかけてなら、はみ出す武田軍の兵は体が持たないだろう。

遠路、疲れているところを見計って、越後軍は旭山に攻め寄せた。

弓矢に槍、そして抜刀した兵が麓から気勢をあげて登っていく。ところが旭山はひっそりと静かである。

さては怖じたかと更に勢いをつけて半ば程まで登ったとき、天に轟くばかりの音と煙が噴き出し、越後兵は魂消た。

（一体これはどういうことじゃ！）

味方がバタバタと転がり落ちていく。

初めて聞く音と濛々とたちこめる煙。煙がはれると、それがとてつもない殺傷力を持っていることに気付いた。

「退けえ！　退けえ！」

の声に、中程まで登った兵は、一目散に逃げ降りた。

その背に向けて、数十発の音が弾け、兵は狐につままれた様で城山へ戻ってきた。

戻るや否や、

「御大将、あれは何でござりましょう。吃驚するような音と煙がしたかと思ったら、まるで矢が当たったように倒れ、転がり落ちていく味方が何人かおりました。

二十六歳、二年前に上洛して、足利将軍に謁している景虎は、既に鉄砲を知っている。

「そうか。武田は鉄砲を用意してきたか」

「鉄砲とは一体何でござります」

「十二年程前、薩摩の南に異国から伝えられた飛び道具じゃ」

「飛び道具？」

「畿内や東海筋では戦さに使うようになってきたと聞いている。矢と比べて、威力の程はわからぬが、甲斐辺りでもやっているからには、越後も用意せねばならぬ

な」

「では武田にはどのように向かいまするか」

景虎は深い眼差しを宙に放つと、

「そうじゃな」

と間を置いてから、

「相手が鉄砲なら、こちらは持久戦に持ちこもう。なにせ武田は遠征じゃ。秋から冬へかけて心と体を泣かせてくれよう。戦さの蓋を閉じるのじゃ」

明くる日から戦さの様子が変わった。旭山城の狭間から何本も銃先が突き出し、時々威嚇するように弾を放つが、越後兵はさっぱり現われない。

「お館様、越後は鉄砲に怖気づいたか、兵が現われませぬ。やっぱり鉄砲の威力は大したものにござりまする」

と勘助は晴信に注進してきた。

「向こうが怖気づいて来ぬなら、こちらから鉄砲組を城山に送り出しまするか」

(うむ、しかし誘いに乗るかな)

景虎とて鉄砲を知らぬ男ではない。こっちが城山に近づき過ぎるのも危険である。

双方兵を退いて互いの呼吸と出方を見る。武田軍としては出来るだけ決着を早めたい。

なぜなら越後軍と違い、甲斐からの遠征で、食糧、馬糧の問題がある。

一、二日間を置き、痺れを切らした晴信は城山攻めを指令した。

赤備えが下から這い上がり、自慢の鉄砲をとり出して用意にかかる。ところが思うような射撃音が響かない。響いても散発的だ。

その間に城山からは矢の雨が走り、武田軍の方が致命的になってきた。

「降りろ！　退けえ！」

これでは旭山戦の逆である。こちらの被害が多いようだ。

「どうなったのじゃ。越後に怖気づいたか」

晴信は機嫌が悪い。先進的武器、鉄砲を揃えてきたというのに――。

憮然としているところへ勘助が現われた。

「勘助、鉄砲隊をくり出してきたというに、今日の様は何じゃっ」

「はっ」

何しろ鉄砲なるものを、戦さに使ったのは初めてである。それゆえ、思ったほど戦果をあげられなかったことに、勘助自身も考え込まざるを得なかった。

「後方から見ていてわかったことは、やはり玉込めから火縄への点火、そして発射までに時間がかかったということでござります。それに今日のような曇天では湿気

がござります。そんな手間をかけている間に、矢の雨に降られました」

ということは、鉄砲より矢の方が速く、より確実だということだ。

（鉄砲攻めはまだまだか）

やってみてわかったことである。

信州の秋は早い。

あれから紳四郎はすぐに諏訪へ戻ってきた。

三百挺の鉄砲組に引かれて、武田軍団に尾いていった。そして百姓姿に身をかえて、旭山と城山の双方を見てきた。

あるいは……という期待を持って尾いていったが、結果は思わぬものであった。

（まだまだ鉄砲戦など先のことだ。それより自分の標的はたった一人、武田晴信）

結局この戦さは、九十日に及ぶ長陣で双方疲れ、面目を立てるため、駿河の今川義元に仲介させて和議を調えて引き揚げるという決着となった。

その今川義元が、満を持して上洛戦に出たのはそれから五年後の永禄三年（一五六〇）の五月十九日であった。

ところが、尾張の桶狭間で休息中、織田信長によって討たれた。

六年前の天文二十三年、甲・駿・相が軍事同盟を結び、義元は後顧の憂いなく上洛戦の壮途についた。それが思わぬ不覚によって倒れたのである。

信玄の血が騒いだ。

晴信は昨年の永禄二年（一五五九）、薙髪して信玄と号した。三十九歳であった。よって以下信玄とする。

信玄はこれまでの北信濃への長い軍旅と、厳しい闘争を振り返った。その間、凡二十年を費やしている。

そこへ思いがけぬ義元の急死である。となれば、南進に切りかえる機会ではないか。氏真（義元の嫡子）の凡庸を慮っての計算である。

早速勘助はじめ重臣たちに諮った。そこで皆は賛意を示してくれたが、一人反対した者がいた。息子の義信である。

理由はこれまでの山岳戦と違い、平地戦であること。それに気候も風土も異なっている。

更に同盟国であり姻族である駿河を、主が倒れたからといって、直ちに侵入するは義に悖るというものである。

（嫁に引かれてそういうことを言うか――）

信玄は内心舌打ちしたが、ここは息子の言を入れて矛を収めることにした。

しかし、これが、父子確執の種となり、七年後、義信を自刃に追い込むこととなるのである。

（2）

永禄四年（一五六一）八月十四日、長尾景虎改め、上杉政虎が、大軍をもって善光寺平まで進んできたという火急の報せが、狼煙や棒道（軍用道路）を疾駆してくる早馬によって、もたらされた。

（これで四度目だ）

兵の数から、大戦になることを予知した信玄は、十八日、一万七千をもって釜無川沿いに諏訪に入り、和田峠を経て上田から川中島へ向かった。

途中、信濃諸将の参陣があり、兵数は更にふくれて二万になった。

腰越から室賀峠を越え、若宮八幡の東方を経て塩崎に到着したのが二十一日。そこで三日とどまって乱波、忍びの報せを待った。

すると意外なことがわかった。

これまで越後軍は川中島へ入ってきたことはなく、犀川を前にしての対陣だった。

ところが今回は千曲川沿いに南下し、山本勘助築城の北信濃の拠点、海津城を横目にして通り過ぎ、雨宮の渡しから千曲川を渡り、全軍を妻女山に上げ、陣馬平に布陣したというのである。

そこは海津城と目と鼻の先で、いわば武田方の勢力下である。山頂からは海津城が手に取るように見える筈だ。一気に駆け降りて決戦を挑むことができる。

しかし、それは退路を断つことでもあり、余程の自信と覚悟がなければできることではない。

（どういうつもりだ！）

これまでの政虎なら、甲州方の前線基地となった海津城へ真っ先に攻め込んでくる筈だ。

ところが今度は、それを尻目に通り過ぎ、甲州領にも等しい川中島の南西部まで侵入してきたのである。

「小癪な！」

信玄は舌打ちした。

「越後が海津の南まで入ってきたということは、いわば虎穴に虎児を求めにきたようなものじゃ。ならばわしにも考えがある」

「と言われますと？」

弟・信繁が近づいて訊いた。
「茶臼山じゃ」
「茶臼山とは、妻女山のこれまた目と鼻の先ではありませぬか」
「よいではないか」
「……」
「越後が意表を衝くなら、こちらも意表を衝いてみせる。見よ、信繁、妻女山は海津城と茶臼山に挟まれたようなものじゃ。ワハハ……」
と信玄は乾いた声で笑った。
そこで茶臼山山麓に兵の半分を置いて陣を布かせ、半分を一日かけて茶臼山に上げた。
眼下に千曲川と犀川が北から東西に流れているのが映る。
水の音と白い河原の小砂利、そして芦の葉の戦ぎはもはや見馴れ、聞き馴れているが、今日は格別な思いで眺められる。
いずれこの両川の展けた間、八幡原で雌雄を決することになるだろうという予見である。
当然、越後軍もそれを考えての妻女山であろう。
その妻女山の、これまた目と鼻の先の茶臼山に、武田軍の本隊が上がってきたのである。

これで、海津城と茶臼山で妻女山を挟むような布陣となった。
（政虎奴、驚いていよう）
信玄は内心得意であった。虎穴に入ってきた虎を、ゆっくり痛めつづけて斃す。
思っただけでも痺れるような快感だ。
そこまではよかったが、いきなり登ってきたものだからから屯営の準備に手間がかかった。
何しろ一万人からの炊ぎと野営である。食糧はどんどんと減じていく。
それに対して妻女山の方は、早くから用意をし、そのつもりで上ってきている。
そのせいか、こちらと違って、静かである。その静寂な樹間に、越後の旌旗、「龍」と「毘」の白旗が幾条も翻っている。
しかし、こんな状態でいつまでも睨み合っていても仕方がない。越後が動かぬなら、こちらから仕掛けようと、信玄は兵を降ろした。
ここへくる前に、麓に残置した兵と合流して、まず雨宮の渡しを占拠し、妻女山から降りてくる越後軍を待ち構える作戦である。
そして自身は最後に山を降りた。八幡原へ出る道すがら、妻女山から降りてくる政虎と越後軍を、一網打尽に討つ光景を脳裏に描いていた。

（さあ、降りてこい。地獄が待っているぞ）

それから信玄は妻女山を仰ぎながら、今か今かと待った。

ところが一日たっても二日たっても山上は静かである。兵の動く気配がない。

（おかしい）

直ちに忍びを放って様子を探らせた。

すると忍びたちは、意外なことを報じてきた。

「山中はまことに静かで、兵らも落ち着いております。全く動く気配が見られませぬ」

更に別の忍びは、

「宿営の中から、詩歌、音曲の響きが聞こえましてござります」

と言うではないか。

「なに！　音曲じゃと？」

信じられぬようなことである。虎穴に入った男が、そんな悠長なことをやっているとは――。

思い出した。上洛した政虎が、室町将軍から琵琶を贈られたという話を。

そんな琵琶を戦陣にまで持ち込んで、急迫した中で弾じているという度胸と余裕は何であろう。

（おかしい？）

もしかしたら山上の政虎は、本人ではなく替え玉かもしれぬという疑惑が湧いた。

すると妻女山の兵はいわば囮で、本物の政虎は別な所に大軍をもって控えているのではないか――。

元来越後には三万の動員力があると聞いている。となるとあとの二万は、どこからやってくるのか……、震えが出た。

信玄は迷った。甲斐から北上してきた本隊は、元来、海津城に入るべきだった。それを妻女山に惑わされて、茶臼山などに上ってしまったのだ。それに食糧も逼迫している。

（まずかったか）

そうと思ったら決断しなければならない。

茶臼山からの撤収である。

そして二十九日、陣を払い、広瀬の渡しを通って黙々と海津城を目指した。

海津城では、城代の高坂弾正昌信と共に勘助も信玄を迎えた。

物も言わず憮然とした信玄に、勘助は敢えてことばをかけなかった。

（心中、さぞお腹立ちだろう）

一、二日はそっとしておいた方がよさそうだ。

（それにしても……）

勘助も、上杉政虎を見溢ってはならないと思った。

お館様が海津城ではなく、いきなり茶臼山へ登ったのは早計だった。結果的には無駄な骨折りであり、政虎からも無視された。

即ち先に山を降りて、越後軍を一網打尽にするつもりだったが降りてこない。つまりは何の結果も得られずして海津城へ入ってこられた。

それに対して政虎はどうだ。

勘助の造った海津城を、見て見ぬ振りをして目と鼻の先の妻女山に登った。

いわば死地に飛び込んできたようなものだ。そこで茶臼山の武田本隊に挟まれながらも、悠々と詩を吟じ、琵琶を弾じていたという。

その度胸と風雅は、驚きとともに、賞賛の念さえ覚える。

上杉憲政から関東管領職を譲られ、室町将軍から琵琶まで贈られた政虎は、まだ三十一歳の若さだ。

となると、これからの戦さはどうなる——。

勘助は政虎に畏怖さえ覚えた。

（3）

城の狭間から遠望する空の色は限りなく青く、季節の移りを感じさせる。

既に薄は穂を伸ばし、朝夕の風は秋を急いでいる。

その風に、妻女山にはためく上杉軍の大牙旗、重代の「大竜」「小虎」の纏、さらに、紺地に日の丸の「日の御旗」が遠望される。

対するこちら海津城では、恵林寺の快川和尚の筆になる「風林火山」の旌旗、さらに「諏訪法性」の旗がひるがえっている。

信玄が茶臼山からここ海津城へ入ってもう九日にもなる。その間、寡黙で人を近づけようとしない。

義信が朝の挨拶に出ても、父親らしいことばをかけるでもなく、義信も無表情で部屋を出てくる。

つまり不機嫌なのだ。不機嫌の原因は茶臼山の失態、何一つ結果の生まれなかったことへの忸怩たる思いがあるからだ。

兵たちは、さすがに九日間も無風状態になると、緊張のうちにも生欠伸をしながら城の中を歩いたり、ごろごろする者もいる。今一つ、緊張が緩んでいる。

九月九日、その日は「重陽の節句」である。そこで城内では細やかな祝宴をもった。すると戦話に花が咲く。

「こちらは二万、あっちは一万三千じゃ。数の上からみても、こっちの勝ちじゃ」

「そりゃそうじゃ。なにせ数がものを言うからなあ」

「したが、何も茶臼山へ登ることはなかったではないか。無駄な遠回りよ」

「シッ、声が高い。あれはお館様のお考えじゃった」

そんな雑兵たちの饒舌が隅の方で聞こえる。

宴が終わると信玄は、ここへきて初めて軍議を開いた。

「わしがここへ入って早、九日。茶臼山に入った日数を入れると十数日じゃ。越後はその前からじゃからな、よう持ってるぞ」

信玄は溜息をついた。

「いや、今頃はもう兵糧も尽きて、草葉を食しているのではござるまいか」

そう言ったのは飯富虎昌である。

「したが、政虎は琵琶まで弾じていたというからは、余裕があるのでは……」

高坂弾正である。

そうして暫く食糧の問題が交わされた。

「まっ、いずれにしてもあちらも痺れを切らしておりましょう。どちらにしても、

これ以上長引かせるは士気に関わりまする」

「その通りでござる。兵らも生欠伸をしながら、城の内を歩いております」

「いや、長陣といえば旭山がござった。あれは三ヶ月にも及びましたからなあ」

「今度はそういう訳には参らぬ。二万の数をもって仕掛ければ、勝ちは必定」

と飯富、馬場民部らは直ちに戦闘の開始を主張した。

信玄もそのつもりだ。この夏、二人の有能な士を、一人は深傷、一人は病死させたことも、心を逸らせている。

「ところで勘助はどうじゃ」

信玄は最後に訊いた。

「はっ、私奴といたしましては、向こうの動きを待ってからと」

「それでは遅きに失せぬか」

「こちらの作戦は、向こうの動き次第で決まるかと」

「したが向こうもその気ではないか。いつまで待つ気じゃ」

返事はない。

（いつもの勘助ならこうではない）

打てば響くような答えがすぐに戻ってきた。それもなかなか意表を衝く。

（それが今日はどうした？　何の迷いがあるのじゃ）

そのとき気付いたのは、六十五歳という年齢だった。

出会ってから二十年。その頃から老人を思わせるような風貌に、つい年月の量を忘れてきた。六十五歳となれば家臣の中で最年長だ。

体も老いれば、気力、頭脳の老いも覆うべくもないだろう。

（臆病になってきたか）

そんなふうに見られた勘助だが、勘助の心の裡には、上杉政虎という人物が重くのしかかっている。

妻女山の件といい、陣中の琵琶の件といい、只者ではないという畏れである。

（もしかしたら政虎は、こちらが想う以上の人物では）

となると、政虎の戦術を読まなくてはならない。それが難しいのだ。と、

「勘助、迷うな！」

と叱咤とも激励ともとれる声がした。

「はっ」

「われらは一丸となって妻女山を攻撃じゃ。異議はなかろう」

老い耄れ策士の顔を立ててくれることばであった。そうとなれば黙っているわけにはいかない。

「ならば私奴の考えを――」

「おう、策はあるか」

信玄の顔が少し綻んだ。

「只攻めるのではなく、軍を二手に分けて、一隊は妻女山の背後を迂回して夜討ちをかけ、山上の越後勢を追い落としまする。すれば当然、千曲川から八幡原へ出てくる筈。そこを二隊目が八幡原で待ち受けて徹底殲滅」

重い口を割った勘助の作戦を、別名「啄木鳥の戦法」と言う。

これは、啄木鳥が朽ちた木の穴にいる虫を捕まえるために、穴の反対側を嘴で突き、虫をおびきだすのに似ていることから付いた呼び名である。

「なるほど、やっぱり勘助じゃ」

と信玄は喜んだ。

「して出発の刻限は」

「晴れれば明朝、ただし、灯はつけませぬ」

「して二隊に分ける兵数は」

「別働隊一万二千に、本隊八千と考えまする」

そう言いながら勘助は地図を広げた。

「西条から唐木道を登り、右折して森ノ平に出ます。それから大嵐ノ峠を越えて妻女山の右側背に向かいまする」

「うーむ」
「先頭案内は土地事情に明るい高坂がよろしいかと」
「うむ」
そこで勘助は大きく息を吐いた。別働隊は本隊より一刻早く出なければならない。しかし、一万二千の兵が動くとなれば、目と鼻の先の妻女山から悟られるだろうという懸念である。
「別働隊出発の後、本隊八千は八幡原に」
「うむ」
「したがそれも天候次第によりまする」
「うむ」
「雨の中の乱戦はできませぬ」
いかに八幡原とはいえ、双方合わせて三万余の激突である。
「となると、空模様を読んでからということじゃな」
出発はそれからだ。
いずれにしても、明朝と決めたからは食糧、馬、弓矢、刀槍の支度にかからねばならない。
大忙しは厨房である。幾つもの竈が一斉に火を噴きだした。

海津城から立ちのぼる炊煙の多さに、妻女山の上杉政虎は気が付いた。
（さては明朝であろう）
すればここ妻女山を目がけてやってくる。そして多分、本隊は八幡原で待ち受けるであろう。
（その中に宿敵、信玄はいる）
そう確信した政虎は、今、夜半をもって一斉に陣の撤収という下山を命じた。
「長の滞陣であった。明暁、八幡原で戦さを決し、それからは直ちに越後へ戻る」
「オーッ」
「オーッ」
と兵たちは気勢をあげた。かれこれ一ヶ月にも近い山上の滞陣だった。その間、精力は抑圧されている。ために元気が凛々としてきた。
「勝って越後へ帰るぞーっ」
素朴な本心である。
それから兵は十分に食事をとり、睡眠をとった。
深更、空は満天の星である。
（晴れじゃ）

政虎は全軍に指令した。

「征くぞーっ、目指すは八幡原。幸い星明りじゃ。武田の来ぬ前に山を下りる。ついては……」

と、山上の三十五ヶ所に大篝火を焚くことと、紙の旗を林立することを命じた。

「下山するのに何のための大篝火であろう」

不審がる兵に、将の一人が

「武田の目を欺くためじゃ。火があれば必ず登ってこよう」

と言い聞かせた。

幸い月明りも少しあり、慌てることなく下山できた。

そして十二ヶ瀬、狗ヶ瀬の二ヶ所から千曲川を渡った頃には、夜は明け放たれた。ところがそれと入れ替わって、四囲を埋め尽くすように湧いてきた霧に視野が遮ぎられた。

それでも水の流れる音が、確実に八幡原へと導いてくれる。

九月十日、川中島一帯は濃い霧が湧き、まさに五里霧中である。

本隊八千を率いた信玄は、その八幡原に着いた。

従う主な者は、武田義信、信繁、信廉の一門、そして山県昌景、穴山信君、内藤昌豊ら重臣に山本勘助である。

霧の中、白地に黒の武田菱の幔幕を張りめぐらせ、用意は万端整った。

八千の兵も本陣の左右、三段に配列して、妻女山から追い出されてくる越後軍を迎撃すべく位置についた。

あとは霧が晴れることと、越後兵が来るのを待つばかりだ。ところが肝心の妻女山の方角がさっぱり見えない。

そこで早速物見を放った。物見たちは忽ち霧の中に吸われていった。

「もの凄い霧でござりまするなあ。まさに五里霧中とはこのこと」

穴山信君の言にも信玄は無言である。

「こんな霧は初めてでござりまする」

と受けたのは山県昌景である。たしかに甲斐の盆地も霧で埋まることはあるが、決戦を前にしてのこの濃霧である。

肝心の妻女山の形すら見えない上に、物見たちも戻ってこない。

「さては霧で道に迷ったのであろうか」

「それにしても、一人も戻ってこないのはおかしゅうござる」

（まさか――）

と思うのは、霧の中で物見たちが越後軍に捕らえられたのではないかという虞れだ。それも否定できなくなってきた。

それにまだある。高坂昌信率いる一万二千が、もうそろそろ妻女山で鯨波をあげそうなものである。

その鯨波によって越後軍は妻女山から崩れ落ち、千曲川を渡って八幡原へ現われる筈である。そこへ一気に襲いかかるという算段になっている。

（どうしたのじゃ）

物見たちも戻らなければ、鯨波もないということは、摩訶不思議である。

まさか霧の中に吸われたわけでもあるまい。

信玄は大嘆息をついた。

「お館様、私奴が物見に行って参ります」

「おお、勘助、気をつけて行けよ」

そんなことばが出たのは、勘助が高齢だということをあれから意識したからである。

勘助は本陣を離れた。

信玄のかつてないことばが身にしみた。それと同時に、霧の中、物見も帰らず、一万二千の鯨波が聞こえぬということに、異常を覚えた。

これまでの戦さで、こんな不安を覚えたことはなかった。

（もしかしたら……）

物見たちは一人残らず斬られるか、捕らえられたのではないか。

それにしても、高坂昌信の一万二千はどうなった——不安はやがて恐れへと変わっていく。

（上杉政虎——彼はやっぱり）

尋常な男ではない。

ともかく全ての謎は霧の中である。この霧が晴れなければ実相はわからない。

そこで勘助は引き返すことにした。

霧の中を走る勘助の耳元を矢が掠めた。

（どこからくるのじゃ）

振り返ったが白い霧が雲のように漂い、何もわからない。ところが耳を澄ますと、遠雷のような音が聞こえてきた。

（蹄の音じゃ。一体どこから）

またまた矢が飛んできた。ということは味方ではない。

戦慄が走った。勘助は片脚を引きながら走りに走った。そして本陣に駆け込むや否や叫んだ。

「お館様、敵は間もなく目の前に――」
「何じゃと!?」
「あの音をお聞き下さりませ」
耳を澄ますと、潮騒（しおさい）のような音が近づいてくる。
「高坂の軍ではないのか」
「違いまする。間もなく矢の雨がきます」
「高坂は何をしている」
「わかりませぬ」
（まさか一万二千がやられる筈は……）
「あの馬蹄の中に、政虎はいるかもしれませぬ」
高坂率いる別働隊が妻女山に登る前に、越後軍は山を下りてしまっていたというのか――。
信玄も勘助もそれを直感した。
（これはわしの大誤算であったわ）
勘助は己が献策の失敗を認めざるを得なかった。
（政虎はやはり只者ではなかった）

霧は徐々に、徐々に上がろうとしている。空間に吸われていくように消えていくと、松林や田や青い山々が絵のように現われてきた。
するとどうだ。霧を剝（は）いだ彼方に、一瞬不思議な光景を見た。鋼鉄の集団ともいうべき黒く巨大な塊が近づいてきた。
馬の音はそこまで近づき、「毘」の大牙旗、「大竜」「小虎」の纏と紺地に日の丸の旗がハタハタと翻ってきているではないか。
乾坤一擲（けんこんいってき）、迫ってくる越後軍の黒い塊に向かっていくばかりだ。
「オーッ」
味方の陣営から鯨波があがった。左翼の武田信繁の部隊である。騎馬約七百が一塊になって飛び出し、越後軍の黒い塊に向かっていく。
つづいて中央の山県昌景隊、右翼の内藤昌豊隊も遅れじと突っ込んでいった。勘助は信玄の側から離れない。
こうして霧の幕の上がった八幡原は、甲・越軍激闘の修羅場と化していった。
何千頭もの馬の嘶（いなな）き、刀槍の打ち合う音、万余の甲冑の擦れ合う響き、落馬して揉み合う様が八幡原に展開された。
緒戦は越後軍が優勢である。真っ先に飛び出していった信繁隊の奮戦に目を離さなかった勘助だったが、いつのまにか激闘の中に埋もれて見失った。

それからどれほどたったろうか。時間はわからない。ともかく二人の武者が息を切らしながら本陣に駆け込んできた。そして信玄の前に膝を折った。

「信繁様、御討死にござります」

更にもう一人も、

「信繁様、御討死」

と言うや、跪座した二人は動かなかった。

「そうか」

信玄の声は静かだ。

父に愛された弟だった。父が兄信玄によって放逐されてから、信繁は暗くなった。そしていかなることがあっても兄に逆らうことはなかった。

その信繁の討死の報せはさすがに苦しい。

「申し訳ござりませぬ」

といきなり手をついたのは勘助だった。

かくなるうえは、ここに座しているわけにはいかない。勘助は立ち上がると再び手をついた。

「私奴も只今から」

「行くのか」

「はっ」

「無理することはない」

「いや」

立ち上がると勘助は使い古した槍を取り、

「それでは」

と繋いだ馬の方へ足を向けた。その背に向けて、

「待て、勘助」

と信玄は呼び止めた。そして、

「急がずともよい」

と言いかけた。

信繁戦死の後に、勘助に去られたくなかった。今暫く、心の穴を埋めるべく傍らにいて欲しかった。

ところが勘助は、信繁を討死させたからは、ここにはいられなかった。それを「死に急ぐ」と取られたのであろうか。

死に急ごうとは思わぬが、生きてここへ戻ることはできない。

勘助はくるりと信玄の方に向き直った。

黒で染め抜いた武田菱の白い幔幕を背景に、緋の法衣に黒糸縅の鎧を着け、諏

訪法性の兜を戴いて床几に腰を下ろしている信玄を、目に焼きつけた。
（これでよい。おさらばでござりまする）
法体で頭を包み、使い古した兜と鎧を着け、槍を手挟んだ勘助の姿が、信玄には悲しいほど遠く感ぜられた。
（戻ってこい）
と言おうとしたが、声にならなかった。
勘助が陣幕から出ると、従卒が馬を引いてきた。鐙に足を掛けたが足が重い。それに槍も重い。
気をとり直して手綱を引き、戦場に向かった。
そこは彼我入り乱れての混戦である。
（どうしたのじゃ、高坂の別働隊は）
一万二千の別働隊が現われれば、こんな負い目にはならないのだ。
（一体どこにいるのじゃ）
勘助は待っている。信じている。高坂の一万二千を。それがくれば、この退勢は挽回できよう。
陽の上がった八幡原の木々は秋の色に染まり、千曲川の清流が銀光を撥ねている。

ところが、河原の上には赤備えの混じった屍が累々としている。敗色は覆うべくもない。
（こんな筈ではなかったが……）
そのときである。南の一角から、怒濤のような旋風が吹いてきた。武田の旌旗を靡かせながら。
（オーッ、あれは高坂の別働隊ではないか）
遂に現われたか！
これで劣勢は挽回できる。勘助は身震いしながら見惚れた。それが暫時の隙であった。
そのとき四、五本の矢が一斉に勘助目がけて飛んできた。
「ウッ！」
瞬間鋭い衝撃が脇腹と腕にきた。
（クソーッ）
手綱を持ち換えようとしたが手が痺れだした。それに腹が焼けるようだ。急所を射られたようだ。
（死ぬかもしれぬ）
そのとき目の裏に浮かんできたのは板垣信方の姿だった。

（わしもおぬしのように……。信方殿、待っていてくれ）

すると蹄が小砂利を噛む音が近づいてきた。と思ったら、いきなり、

「山本勘助殿とお見受けするが」

と呼び止められた。見れば越後軍である。三十代と覚しき年恰好である。

「わしのような皺首など、功になるのか」

すると、

「武田に聞こえたお方にござれば」

と言うことばが返ってきた。のみか、

「われらが御大将もご存知じゃ」

と言うではないか。

「ほう、上杉殿が――」

政虎とは旭山合戦と、川中島ではこれで四度目の対戦だ。しかし、何度戦っても決着のつかぬ相手である。今度もあるいはつかぬかもしれぬ。

その政虎に、わが名が知れているとしたら、冥加といえよう。

「おぬし名は？　何といわれる」

「名乗るほどの者ではござらぬ」

「そうか。したがおぬしのような男に出会うたは、わしの最期の幸せやもしれぬ」

勘助は本当にそう思った。

もはや腹部や腕の痛みは極限にきている。

八幡原の叫喚も耳から遠のいていく。

早く肉体の安息が欲しい。

（お館様、おさらばにござります）

勘助は槍を落として、頭を包んでいた巾をはずした。すると白茶けた薄い毛が薄の穂のように後ろで束ねられている。

「こんな皺首でござるぞ」

「忝い」

目を閉じると、八幡原を覆った仙境のような霧が映った。その霧の中に、勘助が恋う、玲瓏とした諏訪御寮人の顔が映った。

（お側に……）

次の瞬間、空気を切る鋭い気が走ったと同時に、血飛沫をとばして勘助の首が落ちた。

勘助の死など知るよしもない信玄は、乱戦の中、本陣の前の床几に腰を下ろして動かなかった。

霧の幕の上がった八幡原に怒濤のように現われた越後軍によって、わが軍は押され、勝敗は浮き彫りになっている。

「お館様、一旦城にお退きなされましては」

近侍の一人が囁いた。

本陣にいた兵らも居たたまれず戦さの中に駆け込み、気がついてみたら陣幕の中には兵の数も見当たらないくらいだ。

それでも信玄は動かなかった。信玄の腰を床几に落ち着けているのは、生死の問題ではない。高坂の一万二千が必ず現われるだろうという確信である。

（高坂は必ず現われる）

霧の悪戯で、どこかで手間取っているのだろうが、あの一万二千がこぬ筈はない。それまで待たねばならぬ。去就はそれからだ。

そのときである。混戦の中から一騎、こちらに矢のように向かってくる騎馬武者が目に映った。

はじめは若武者のいきり立ちかと見えたが、忽ち近づいてきた武者は、紺色縅の鎧に、萌黄緞子の胴肩衣を着け、金の星の兜の上から、白綾の絹で行人包みをした見事な一騎が迫ってきた。

（おう！）

信玄は内心驚いた。その装いからして只者ではない。しかも凛々たる気品と勇壮に満ちている。

水を撥ね、小砂利を撥ねた騎乗の男が、瞬く間に信玄の眼前に迫り、長刀を抜いた。そして信玄目がけていきなり真っ向こうから斬りつけてきた。

「我こそは上杉政虎なり」

まさに瞬時の対応であった。刀を抜く間もない信玄は、右手に持つ麾扇をもって防ぐと、火花が散った。

そこで再び政虎が刀をとり直して振りあげたそのとき、信玄の近侍、原大隅守が駆け寄って槍を突き出した。

途端、馬は驚いて、嘶き、蹄を返すや政虎を乗せたまま駆け去った。

まさに危機一髪であった。大隅守の槍がなかったら、それこそ政虎の二の太刀を浴びるところだった。

しかし、あの一撃が右縅を裂いて信玄の上膊を深く斬り、血がみるみる籠手の間から噴き出してきた。

「お館様！」

「よい、大したことはない」

とは言ったものの、傷は深いようだ。

激戦の中から流星の如く現われ、一撃を残して風の如く駆け去った政虎の後ろ姿を、信玄は夢心地で見送った。まさに九死に一生を得た思いだ。

「お危のうございました」

大隅守の声が聞こえた。信玄にはその危機が、まるで稲妻の閃光のごとく一瞬の出来事のような気がした。政虎と目を合わせることもできなかったが、これが川中島での両雄の歴史的出会いだった。

政虎が消え去ってから暫くして、八幡原の戦局は変わった。遅れた高坂の一万二千が、とうとう現われたのである。

この新手が、戦い疲れた越後勢に背後から襲いかかった。これには越後勢も浮き足立ち、戦況は逆転の様相を示してきた。

政虎は「これまで」と越後軍に指示して、追撃する武田軍を尻目に、戦場から離れていった。

こうして双方が軍を退いたのは午過ぎ、延々六時間に及ぶ激闘がようやく終わった。その間、武田方の死者約四千五百、越後方約三千四百を数えた。これが戦国史上、最大の死闘である。

ともかく双方、戦捷とはいえなかった。あまりに兵を失い過ぎた。

海津城に入ってからも、信玄はことばを発しなかった。

そこへ恐縮しながら入ってきた高坂弾正から、八幡原到着の遅れの理由を聞かされた。

「私どもが、妻女山に近づきますと、霧の中、幾条もの旗と、篝火の火が赤く見えておりました。そこで勢いづいて登っていきますと、不思議なことに、矢一本も飛んできませぬ。それに兵らの声や、物音一つしてこないことに不審を覚えました。そして霧はいよいよ濃く、二、三人先の兵の姿さえ見えなくなりました。これでは山上の越後軍も矢を放つどころではなかろうと思いました。そしてようやく登ってみますと、魂消ました。兵の姿一人もなく、旗と大篝火が燃えているだけで……。不覚にござりました。越後軍は既に山を下りて八幡原へと動いていた後で、遅れをとりましたのはそういう次第にござります」

信玄は返事もしなかった。

弾正の報告を聞けば聞くほど、いかに上杉政虎が先を読む英明な男であったかがわかるというものだ。

翌朝、信玄は早くに目が醒めた。

今朝も外は霧である。数人の近侍を連れて海津城の門を出た。

行く先は八幡原。

山々は霧をまとい、八幡原の平原はたなびく薄絹の中に、幽玄なばかりに静まっている。

昨日はこの霧の中から、突如として黒い鋼鉄の軍団が現われ、それからは赤と黒の軍団が入り乱れての殺戮が展開した。

喚声、怒号、銃声、馬の嘶き、刀槍のせめぎ合いが延々と谺し、遂には群れから狼のように迫ってきた上杉政虎の一閃を浴びた。

それらがまるで影のように消え、かわって徐々に上がってきた霧の幕の中から、恐るべき光景が現われた。

八幡原はまさに冥界である。万に近い屍が累々とつづき、幾条もの旗がその上に倒れ、萎れている。

それはあたかも天変地異によって、一挙に命を失った獣たちの屍景を見るようだ。

かつてこのように荒涼とした戦場風景を見たことがあっただろうか——。

近侍も息をのみ、馬も首をうなだれて動かない。

そのうち霧が上がってきた。すると八幡原は、一層無間地獄の河原を鮮明に映し出してきた。

呆然とするばかりだ。
突然、勘助のことが思い出された。
「首を取られたゆえ、亡き骸はわからぬ」
と言っていた兵のことばを思い出した。
(勘助よ、ぬしはわしの中に生きている)
そう呟くと信玄は馬首をめぐらして戦場を後にした。
その耳に聞こえてくるのは、変わらぬ千曲川の瀬音であった。

十三．付

(1)

川中島での甲・越激闘の後も、数年はなお武田軍による北関東への侵攻はつづいたが、信玄の野望の窮極は上洛であった。
幸い今川義元が倒れたことによって、年来垂涎の地である南国の豊沃な大地、即ち駿河が展けてきた。
機会到来、北から南への転換である。
ところがここで邪魔が入った。長男義信の反対である。妻を今川氏から迎えている義信は、同じ年齢(二十八歳)の従兄弟、今川氏真を攻めることに憚りがあった。
元来、義信を愛していなかった信玄は、その義信を監禁し、傅役の飯富虎昌ほ

か、義信衆といわれる八十名を処刑または追放した。

そんな義信が自害したのは二年後の永禄十年（一五六七）、父信玄への諫死だったかもしれない。

父子相剋といえば、信玄が父信虎を追放したのは二十六年前の二十一歳のときだった。

追放の真意については今もって謎だが、国守としての信虎の、奇驕な振る舞いを弾じたもの。

次は弟信繁への偏愛から、世嗣の座が危うくなるという危惧であった。

そうして父を放逐した信玄が、今度は長男とその近習たちを葬り去ったのである。

三代にわたる父子相剋で、信玄は父を追い、息子を葬った。

思うに信玄が、義信の策をとっていたら、甲斐武田の命運は違ったものになっていたかもしれない。

無理な上洛戦で命を磨り減らすこともなく、日本の中部で、隠然たる力を蓄えた存在になっていたかもしれないのだ。

さて、義信亡き後、信玄は愛妾の子諏訪四郎勝頼を世嗣に据えた。

しかしこれは、武田家臣団の中で対立を生じ、勝頼の生き方に影を落とすことになった。

外に対しては謀略の限りを尽くした信玄だが、内に対しては必ずしも賢明だったとはいえない。

武田衰運の因は、外にではなく、まさに内にあったといえよう。

その信玄が駿河に攻め込んで今川氏真を追い、同盟を結んでいた北条氏とも干戈を交えるようになった。

このとき既に五十歳の信玄は、版図拡大と同時に、上洛を急いでいた。

それを阻むのは、尾張・美濃の織田信長であり、遠江・三河の徳川家康である。

この家康と対峙したのが二年後の三方ヶ原の戦いであった。天下無双の武田騎馬軍団は徳川軍を軽々と潰滅させ、家康をして浜松城へ敗走させた。元亀三年（一五七二）十二月二十二日である。

信玄はそんな家康を深追いせず西進し、浜名湖北東の刑部で年を越した。

その頃京では、信長を討つための包囲網が出来上がっていた。即ち、西国毛利や比叡山延暦寺、近江の浅井に、最有力は越前の朝倉である。信玄はこの朝倉義景の軍勢を待っていた。

ところが雪のため冬季は動けないという報せである。これが信玄の気力を萎えさ

せた。

やむなく刑部を出て帰国の途についた。

帰国の途中三河に入り、家康の部将、菅沼定盈（すがぬまさだみつ）の守る野田城を攻めた。攻撃は一月十日から二月十日まで一ヶ月を要した。

三月に入り、開城の夕、赤い月が昇り、城門には篝火が燃えている。

一旦城内に入り、開城の条件を示して外へ出た。双方、緊張感が解けていた。

そのとき一つの黒い影が、木立ちの中から信玄を狙いつづけていた。しかし誰もそれに気付く者はなかった。

和平交渉の静かな夜、突如としてつん裂いた一発の銃声。至近の距離であった。

「ワアーッ」

と一声あげて信玄はもんどり打って倒れた。

「お館様」

「お館様」

侍臣たちは駆け寄ったが、信玄は目を開いたまま倒れている。

そして目を虚空に放って動かない。

「お館様」

信玄を抱えて揺さぶるのは異母弟の一条（いちじょう）信竜（のぶたつ）である。

月明りに映る信玄の顔から紅味が消え、とり巻いた郎党たちは、一様に最悪の事態を予感した。

早速戸板が用意され、近くの鳳来（ほうらい）寺に入ることにした。麓から何人も入れ替わって千四百余段の石段を踏んで戸板を運んだ。

早速書院に床をつくり、仰臥（ぎょうが）させて、初めて撃たれた場所がわかった。腰骨と腹部の辺りに弾が入ったままである。

衝撃と激痛に意識を失っているのだ。

旅陣のこととて医師はなく、まして体内から弾をとり出すような医術など甲斐にはない。

ともかく主侍医御宿監物（みしゅくけんもつ）が急ぎ呼び寄せられ、更に堺にいるというポルトガルの医師や、京の名医を求めるべく直ちに十数人が馬で走った。

ともかく一命はとりとめたものの、四、五日は意識もなく、幽明を往き来しているような状況だ。

そしてどうやら医師が駆けつけてきた頃には意識をとり戻したが、今度は激痛に苦しめられた。

そんな中で、治療は施したものの、快復の望みは薄かった。それでも苦痛に耐えながら生きようとする気迫があった。

（こんな所で死ぬわけにはゆかぬ）

京に武田菱の旗を翻すことが、人生最後の夢である。

その夢に賭けてここまでやってきた。それがこんな所で思わぬ不覚をとった。それも鉄砲に撃られるとは――。

（もしかしたら奴ではないか）

信玄の脳裏に浮かんできたのは西沢渓谷と上田原での狙撃である。

（奴は諏訪者）

奴の執念は諏訪（瑶姫）への愛であったか――そしてわしは報復された。

激痛がまたして、信玄は意識を失った。

加えて若い頃からの持病（肺肝）にも襲われてきた。連戦がこたえたようだ。

既に四月になっていた。古府中へ帰らざるを得ない。

途中、田口郷の福田寺に移り、それからまた動きだしたが、体力はもうついていけなかった。

そこでやむなく、途中の信濃下伊那郡阿智村の駒場にある長岳寺という小さな寺に入った。

死を予感した信玄は、直ぐに勝頼を呼び寄せた。

古府中から駆けつけてきた勝頼に、これまでの志を述べてから、信玄の死を向後三年間は秘するように伝えた。

信玄の死を知れば、直ちに武田は南北と西から狙われるからだ。

そして勝頼や宿将たちに見守られながら、信玄は無念の息を引き取った。天正元年（一五七三）四月十二日、享年五十三歳であった。

信玄を死に至らしめた野田開城の夜の鉄砲狙撃の犯人は、それからも特定することはできなかった。噂では野田城側の者であろうと――。

それが実は、茅野紳四郎であったことを知る者はいない。

（2）

次に、諏訪御寮人（瑶姫）の遺した愛児、四郎勝頼について語らなければならない。

九歳で母と死別した四郎は、元服して諏訪四郎勝頼と名乗った。

信玄としては、武田の男子には「信」を与えるはずであったが、敢えて「勝頼」と名乗らせたのは、諏訪頼重の一字を与えて諏訪の後嗣にと考えたからである。

母譲りの美男であり、烈しい性格を愛した信玄が、後継について迷妄に陥ったの

は父信虎と同じ轍である。

永禄四年（一五六一）の川中島の戦さの翌年、諏訪家の名跡を継いだ勝頼は、二百名を受けて伊那郡代となり、山本勘助修築に成る高遠城主となった。時に十七歳。

そして同八年（一五六五）には、織田信長の養女となった美濃遠山氏の娘を正室に迎えた。

ところが二年後の永禄十年（一五六七）、勝頼にとって思いがけない事件が生じた。

武田家の嫡男であり、勝頼の異母兄である太郎義信が、父信玄によって自決に追い込まれるという事件が起こった。

これについては既に先の章で述べているため割愛する。

そこで勝頼が武田家の嫡子に浮上した。

これは諏訪御寮人（瑤姫）が生前、最も危惧したことであった。

御寮人が勝頼に託した夢は、甲斐ではなく、諏訪の領主となることだった。そして、信濃人による信濃の統一を計ることである。

ところが武田の世嗣が父によって葬られ、側室の子勝頼が後継となった。これが将来、武田の滅亡の原因となる。外に向けては遠謀智略の戦略家信玄にして、内のことはまるでわかっていなかったことになる。

天正元年（一五七三）信玄は、信濃の伊那駒場で没した。そこで急遽、勝頼が武田の総帥という運命を担うことになった。二十八歳である。

しかし、信玄の跡目といっても、武田家の中に勝頼を受け入れる十分な素地があるわけではなく、勝頼の立場は微妙なものであった。

武田王国は、信玄のたゆみない努力と主従の結束によって築かれたもので、信玄に対する信頼と畏敬は絶大であった。

それがそのまま勝頼に引き継がれるかというとそうではなかった。

それは、信玄が存命中に、勝頼を正式跡目として公表し、世嗣としての教育や扱いを、本人、並びに家臣団にしてこなかったことによるところが大きい。

何しろ勝頼は側室、諏訪の出であり、勝頼の家臣たちは諏訪衆で占めている。それが武田家の親類衆、並びに老臣たちの間で疎隔を生じた。

そんな中で、勝頼が父の遺令を継ぐことは、同時に内政外交、外征の難題を背負うことになる。

勝頼は考えた。内政は難しい。これには時間がかかる。己が地位を確立するためには外征をやることだ。

父信玄がそうであったように、外へ向けて戦さをやるかぎり、家臣団は必ず勝頼

に従うであろうと。

そこで天正二年（一五七四）、美濃の明智城を攻め、勢いに乗じて遠江の高天神城を攻略した。

これは父信玄をもってしても成し得なかったことで、勝頼は大いに自信を得た。

しかし、武田の老臣たちは、むしろそれを勝頼の暴走と考えた。

その頃近習の一人が熱心に鉄砲組をふやし、鉄砲による戦術を説き勧めた。紳四郎である。

しかし、武田の誇る最強軍団とは、即ち騎馬軍団だとする信玄の遺風を信奉してやまない軍団に、鉄砲の戦術は容れられなかった。

それが致命的打撃となるのは、天正三年（一五七五）年の長篠の戦いであった。

長篠の戦いとは、家康が武田の叛将、奥平貞昌を長篠の城将としたことから勝頼が怒り、長篠城を奪還すべく包囲したことに端を発する。

ところが家康の援軍要請によって信長の軍二万が進攻してきたことから、武田陣営ではこれが対応について激しく論じ合った。

しかし勝頼は、甲斐に退くことをよしとしなかった。武田の重圧、即ち重臣たちの反対を押し切って、長篠城外の設楽ケ原に討って出ることを主張した。

たしかに織田・徳川の連合軍は武田軍の三倍に近い兵数ではあったが、勝頼の自

信は武田の騎馬軍団にあった。

ところが信長は、連子川を前に、馬防柵を二重三重に構築し、内側に三千の鉄砲隊を三段に分けて一斉に発射させるという戦法を用意していた。

五月二十一日、最強を誇ったはずの武田騎馬軍団が、織田軍の鉄砲一斉射撃の前に倒れ、信玄以来の勇将、山県昌景、内藤昌豊、馬場信房、土屋昌次、原昌胤、三枝守友に真田父子ら武田二十四将と謳われた勇者たちが次々と戦死し、午過ぎ騎馬軍団は潰滅した。

こうして長篠の戦いは、信長が鉄砲による近代戦で勝利を手中に収め、家康が運を拾ったのに対して、勝頼は運から見放されるという明暗を分ける戦さであった。

（鉄砲組を真剣に組織すべきだった）

やられて初めて気付かされた勝頼である。

以後武田は気力も実力も衰え、天正九年（一五八一）には高天神城も徳川に奪回される破目となり、古府中の躑躅ケ崎館を守る自信を失った勝頼は、新に韮崎を新府として新城を築いた。

しかし、武田の劣勢は覆うべくもなく、甲斐、信濃の諸将に影響を及ぼすこととなり、木曽の福島城主木曽義昌が違背してきた。

勝頼は憤激して兵を木曽に向かわせたところ、織田、徳川、北条（二番目の勝頼

の正室は北条氏政の妹）までが加担して甲斐に侵入してくるや、武田方の諸将は次々と謀反、離反した。

そこでやむなく勝頼は遂に新府城に火をかけ、十六歳の長男信勝に夫人ら従者五十余名を連れて、逃亡への道行きとなってしまった。

そして自領甲斐の天目山麓の田野で、一家主従が憤死するという武田終焉となってしまった。時に天正十年（一五八二）三月十一日、勝頼三十七歳であった。

こうして信玄の広大な版図も、鉄壁の甲斐も、信玄没後九年にして崩れ去ったのである。

それは勝頼の器量を云々する前に、勝頼を孤立させ、劣勢とみるやボロボロと歯を抜くようにして離反した信玄の遺臣や国人たちの功利主義を見逃すわけにはいかない。

ということは、武田滅亡の要因は、信玄が内包していたとも言えよう。

ところで諏訪御寮人の遺言は、こうしたことを見通すかのような予言であった。それは、躑躅ヶ崎館にあって、武田家の体質や甲斐の精神風土を見つめていたからだろう。

御寮人の死後、勝頼は母の願いとは全く違った方向に歩み出してしまった。そしてそれに気づいたときにはもう遅かった。

春とはいえ、いまだ寒い天目山麓に追い詰められていった勝頼の眼の奥に映っていたのは、諏訪の湖と母御寮人の姿ではなかったろうか――。

ところで惨劇の五日後、天目山麓に一人の男が脚を引きずるようにして現われた。

五十半ばを過ぎた男は既に白髪を混じえ、粗衣をまとっているが、眼だけは炯々としている。

男は、山麓に散乱している武田主従の屍体に呆然とした。

首もなく、衣も剝ぎ取られた屍体は、誰が勝頼のものか、どれが夫人のものか、それさえわからぬ首無しの半裸である。

男はそれから毎日のようにやってきては穴を掘り、丁寧に屍体を埋めていった。

その男は、茅野紳四郎ではなかったか――という噂が一月後、密かに諏訪で語られたという。

〈了〉

あとがき

戦国の天下取りの三英傑といえば、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康である。

そしてこの三人に引けをとらぬ人物として、武田信玄と上杉謙信の名をあげることに異論を唱える人はないだろう。

では、なぜこの二人の天下取りが実現しなかったかといえば、目指す終点が京であったからだ。信玄・謙信の出発点は都からあまりに遠かった。

それに比して信長・秀吉・家康の出発点は、京に近い中京（尾張・美濃・三河）だった。

これは改めて言うまでもないが、人・物・金を消耗する戦さにおいて、地理的条件は極めて重要である。

ところで信玄の窮極の目的である上洛戦は、駿河から遠江、三河へと入る。そして三方ヶ原で徳川・織田の連合軍を破ったのは五十二歳。

しかし、それから一年の余命しかなかったのである。これを病死とするなら、己の年齢を顧みない信玄はあまりに浅慮ではなかったか。死に急ぐ理由など考えられない。そこで私は鉄砲による狙撃死と考えたい。

当時の寿命から考えて五十三歳は決して短命ではないが、秀吉六十三歳、家康七十五歳の没年に比すれば早すぎた死が惜しまれる。

それにしても、信玄没後九年にして武田は滅ぶのである。

これを勝頼の若さゆえの暴走と断ずるのは酷であろう。要因はむしろ信玄にあったと言うべきだ。

二十一歳で父信虎を駿河に追放し、四十七歳で長男義信（三十歳）を部下ともども死に追いやった。これが最大の不覚、失敗である。

剛腹に見えながら、信玄は極めて繊細にして狭量な男だったのだ。その付けはいつか廻ってくる……。

彼が伊那の駒場で軍旅の客死を遂げるとき、「三年間、喪を秘せ」と遺言したのは、二十八歳の勝頼が心もとなかったからだろう。それにしても、生きていたら三十六歳になっている長男義信のことを思い出しはしなかったろうか。

悔いという付けを、このとき、実感した筈だ。しかしまさか、十年も待たずして営々築いた武田王国が滅びるとまでは思わなかったろう。

次に、本作では瑤姫と名づけた諏訪御寮人のこと。本当の名前は今日に伝わらない彼女だが、戦国女性の中でもとりわけ美しかったとされている。自らが滅ぼした

諏訪頼重の娘に、信玄はひと目で心を奪われたらしい。

征服地の姫君を愛する例は、古今東西珍しくはない。わが国の戦国期では、秀吉と浅井長政の姫、淀殿（茶々姫）の例がある。

その淀殿もそうであったように、諏訪御寮人は信玄を親の仇とこそ思え、愛することはなかっただろう。

それでも子は生まれた。勝頼である。この勝頼に、御寮人は諏訪領主を夢見、託しながら早世したと思われる。

しかし結果は、彼女の最も忌避した武田家の世嗣となった。ところが信玄亡き後、武田家将士たちの疎隔によって勝頼は孤立し、長篠の戦いの後、凋落の一途を辿って天目山麓に散った。三十七歳であった。

そんな結果になることを知らずに逝った諏訪御寮人は、まだ幸せだったといえようか。

終わりに山本勘助。

隻眼にして跛行。板垣信方が駿河から躑躅ヶ崎へ連れてきた男である。

智略、軍略に秀れていたことから信玄の謀将となる。

本作では、この勘助もまた諏訪御寮人に惚れた。ただし彼の恋は信仰にも近く、

信玄と御寮人の間にあって、御寮人を助け、御寮人のために動く。昔のフランス映画「美女と野獣」の如き純愛である。

そんな勘助にも、川中島の合戦で死が訪れる。いや、訪れるというより、彼の献策した「啄木鳥戦法」が裏目に出たことから、自ら死を早めてしまった。

板垣信方、諏訪御寮人を亡くしている勘助にとって、死はむしろ彼の求めた安息ではなかったろうか。

最後にもう一人。

敗戦国、即ち被征服地の人間が、報復に立ち上がる例は、古今東西枚挙にいとまがない。

それが本作では紳四郎という諏訪の男である。報復するに兵力を持たないときは、独力か少数で首領を狙わなければならないだろう。

武器は刀剣、弓矢のほかに薬殺もあろうが、当時、鉄砲なるものが登場してきた。

現在もなお、一発の狙撃で命を落とす要人は世界中に跡を絶たない。

諏訪の象徴、御寮人を愛する男が、秘術を尽くして三度目に成功する。

銃による狙撃死。それを従来よくいわれる信長側の射手とするのは陳腐ではない

か。それより敗戦国諏訪の男の執念とするのが劇的であると考えた。

今回の上梓に当たり、ＰＨＰ研究所文庫出版部の根本騎兄氏にお世話になった。ここに深甚の感謝を申し上げる次第であります。

二〇〇六年　秋

中島道子

著者紹介
中島道子（なかじま　みちこ）
福井県三国町に生まれる。実践女子大学国文科卒業。日本ペンクラブ会員。明智光秀顕彰会副会長（大津市）。武蔵歴史フォーラム会長（川越市）。
主な著書に、『岩佐又兵衛　怨念の絵師』『濃姫と煕子（ひろ）――信長の妻と光秀の妻』『天下の悪妻――越前藩主松平忠直夫人勝子』（以上、河出書房新社）、『それからのお市の方』（新人物往来社）、『秀吉と女人たち』（勁文社）、『徳川三代と女房たち』（立風書房）、『湖影――明智光秀とその妻煕子（ひろ）』（ＫＴＣ中央出版）、『松平春嶽』『山内一豊と妻千代』（以上、ＰＨＰ文庫）などがある。

ＰＨＰ文庫　小説　信玄と諏訪姫

2006年９月19日　第１版第１刷

著　者　中島道子
発行者　江口克彦
発行所　ＰＨＰ研究所
東京本部　〒102-8331　千代田区三番町３番地10
文庫出版部　☎03-3239-6259（編集）
普及一部　☎03-3239-6233（販売）
京都本部　〒601-8411　京都市南区西九条北ノ内町11
PHP INTERFACE　http://www.php.co.jp/
組　版　朝日メディアインターナショナル株式会社
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所

© Michiko Nakajima 2006 Printed in Japan
落丁・乱丁本の場合は弊所制作管理部（☎03-3239-6226）へご連絡下さい。
送料弊所負担にてお取り替えいたします。
ISBN4-569-66683-3

本書は、書き下ろし作品です。

PHP文庫

逢沢　明　大人のクイズ
阿川弘之　日本海軍に捧ぐ
阿奈靖雄　「プラス思考の習慣」で道は開ける
綾小路きみまろ　有効期限の過ぎた亭主・賞味期限の切れた女房
飯田史彦　生きがいの本質
池波正太郎　霧に消えた影
池波正太郎　信長と秀吉と家康
池波正太郎　さむらいの巣
石島洋一　決算書がおもしろいほどわかる本
石原結實　血液サラサラで、病気が治る、キレイになれる
板坂　元　男の作法
稲盛和夫　成功への情熱―PASSION―
稲盛和夫　稲盛和夫の哲学
梅津祐良 監修　池上重輔 著　図解わかる！MBA
瓜生　中　仏像がよくわかる本
江口克彦　上司の哲学
江口克彦　鈴木敏文 経営を語る
呉　善花　私はいかにして「日本信徒」となったか
大原敬子　なぜか幸せになれる女の習慣
小川由秋　真田幸隆　櫻井よしこ　大人たちの失敗
佐竹申伍　真田幸村
佐藤勝彦 監修　「相対性理論」を楽しむ本
佐藤勝彦 監修　「量子論」を楽しむ本
芝　豪太　公望
渋谷昌三　外見だけで人を判断する技術
司馬遼太郎　人間というもの
鈴木秀子　9つの性格
関　裕二　大化改新の謎
関　裕二　壬申の乱の謎
瀬島龍三　大東亜戦争の実相
大疑問研究会　大人の新常識520
太平洋戦争研究会　日本海軍がよくわかる事典
太平洋戦争研究会　日本陸軍がよくわかる事典
高嶋秀武　話のおもしろい人、つまらない人
髙嶌幸広　話し方上手になる本
髙嶌幸広　「話す力」が身につく本
高橋安昭　会社の数字に強くなる本
高橋克彦　風の陣「立志篇」
財部誠一　カルロス・ゴーンは日産をいかにして変えたか

PHP文庫

オグ・マンディーノ 著　靖彦 訳　この世で一番の奇跡
オグ・マンディーノ 著　靖彦 訳　この世で一番の贈り物
尾崎哲夫　10時間で英語が話せる
快適生活研究会　「料理」ワザあり事典
快適生活研究会　「冠婚葬祭」ワザあり事典
笠巻勝利　仕事が嫌になったとき読む本
風野真知雄　陳　平
加藤諦三　「やさしさ」と「冷たさ」の心理学
加藤諦三　自分に気づく心理学
金森誠也 監修　30ポイントで読み解くクラウゼヴィッツ「戦争論」
加野厚志　島津義弘
加野厚志　本多平八郎忠勝
神川武利　秋山真之
川北義則　人生、だから面白い
樺　旦純　運がつかめる人　つかめない人
菊池道人　斎藤一人　仏像を観る
紀野一義 文　入江泰吉 写真　桐生　操　世界史怖くて不思議なお話
黒岩重吾　古代史の真相
黒鉄ヒロシ　新選組
黒鉄ヒロシ　坂本龍馬
黒部　亨　宇喜多直家
ケリー・グリーソン　檜井浩一 訳　なぜか、仕事がうまいく人の習慣
小池直己　TOEICテストよく出る「決まり文句」
小池直己　佐藤誠司　中学英語を5日間でやり直す本
甲野善紀　武術の新・人間学
甲野善紀　古武術からの発想
國分康孝　自分をラクにする心理学
児嶋かよ子 監修　「民法」がよくわかる本
児玉佳子　赤ちゃんの気持ちがわかる本
須藤亜希子　木幡健一　「マーケティング」の基本がわかる本
小林正博　小さな会社の社長学
小巻泰之 監修　造事務所 著　図解　日本経済のしくみ
近藤唯之　プロ野球　遅咲きの人間学
斎藤茂太　「なぜか人に好かれる人」の共通点
齋藤孝会議　革命
堺屋太一　組織の盛衰
坂崎重盛　なぜこの人の周りに人が集まるのか
坂田信弘　ゴルフ進化論
阪本亮一　できる営業マンはお客と何を話しているのか
田口ランディ　ミッドナイト・コール
匠　英一 監修　「しぐさと心理」のウラ読み事典
田坂広志　仕事の思想
田島みるく 文／絵　お子様ってやつは
立石　優　范　蠡
立川志の輔 選・監修　PHP研究所編　古典落語100席
田中鳴舟　みるみる字が上手くなる本
谷沢永一　渡部昇一　孫子勝つために何をすべきか
田原　紘　ゴルフ下手が治る本
田辺聖子　恋する罪びと
丹波　元　京都人と大阪人と神戸人
柘植久慶　日露戦争名将伝
童門冬二　「情」の管理・「知」の管理
童門冬二　上杉鷹山の経営学
童門冬二　男の論語（上）（下）
ドロシー・ロー・ノルト　レイチャル・ハリス　石井千春 訳　子どもが育つ魔法の言葉
戸部民夫　「日本の神様」がよくわかる本
中江克己　お江戸の意外な生活事情
中江克己　お江戸の地名の意外な由来
永崎一則　人はどほど励まされ、ときには鍛えられる
中曽根康弘　石原慎太郎　永遠なれ、日本
中谷彰宏　入社3年目までに勝負がつく77の法則
中谷彰宏　なぜ彼女にオーラを感じるのか
中谷彰宏　自分で考える人が成功する
中谷彰宏　人を動かせる人の50の小さな習慣
中西　安　数字が苦手な人の経営分析
中西輝政　大英帝国衰亡史
中村　晃　児玉源太郎
中村幸昭　アタマは時速160キロで泳ぐ
西野武彦　「株のしくみ」がよくわかる本
日本博学倶楽部　「歴史」の意外な結末
日本博学倶楽部　「関東」と「関西」こんなに違う事典
日本博学倶楽部　雑学大学
日本博学倶楽部　歴史の意外な「ウラ事情」
日本博学倶楽部　戦国武将 あの人の「その後」
日本博学倶楽部　日露戦争 あの人の「その後」
野村敏雄　小早川隆景
野村敏雄　秋山好古
秦　郁彦　編　ゼロ戦20番勝負
服部英彦　「質問力」のある人が成功する

PHP文庫

バーバラ・コロローソ 田栗美奈子 訳
子どもに変化を起す簡単な習慣

浜尾　実
子供を伸ばす言葉、ダメにする言葉

浜野卓也
黒田官兵衛

晴山陽一
TOEICテスト英単語 ビッグバン速習法

PHPエディターズグループ
図解「パソコン入門」の入門

日野原重明
いのちの器〈新装版〉

平井信義
親がすべきこと（かみ）としてはいけないこと

福井栄一
上方（かた）学

藤井龍二
「ロングセラー商品」誕生物語

北條恒一
〈改訂版〉株式会社のすべてがわかる本

保坂　隆　監修
「プチストレス」にさよならする本

保阪正康
昭和史がわかる55のポイント

本間正人
「コーチング」に強くなる本

毎日新聞社
話のネタ

ますいさくら
「できる男」「できない男」の見分け方

ますいさくら
「できる男」の口説き方

町沢静夫
なぜ「いい人」は心を病むのか

松澤佑次　監修
駒沢伸泰　著
やさしい「がん」の教科書

松原惇子
「いい女」講座

松下幸之助
物の見方　考え方

松下幸之助
指導者の条件

松下幸之助
社員稼業

松下幸之助
商売は真剣勝負

松下幸之助
強運なくして成功なし

松下幸之助
道は無限にある

松下幸之助
商売心得帖

松下幸之助
経営心得帖

松下幸之助
人生心得帖

松下幸之助
素直な心になるために

的川泰宣
宇宙は謎がいっぱい

三浦行義
なぜか面接に受かる人の話し方

水上　勉
「般若心経」を読む

宮部みゆき／安部龍太郎／中村隆資　他
初ものがたり

宮脇　檀
運命の剣のきばしら
男の生活の愉しみ

向山洋一　大鐘雅勝　著
中学校の「英語」を完全攻略
小学校の「算数」を5時間で攻略する本

向山洋一　石筒覚／遠藤真理子　著
「向山式勉強のコツ」がよくわかる本

森本哲郎
ことばへの旅（上）（下）

守屋　洋
中国古典一日一言

安岡正篤
活眼活学

八尋舜右
竹中半兵衛

ブライアン・レッヴィス　山川紘矢・亜希子　訳
前世療法

ブライアン・レッヴィス　山川紘矢・亜希子　訳
魂の伴侶―ソウルメイト

山崎武也
一流の仕事術

山崎房一
心がやすらぐ魔法のことば

山崎房一
子どもを伸ばす魔法のことば

唯川　恵
明日に一歩踏み出すために

唯川　恵
きっとあなたにできること

唯川　恵
わたしのためにできること

ゆうきゆう
「ひと言」で相手の心を動かす技術

養老孟司　甲野善紀
自分の頭と身体で考える

読売新聞大阪編集局
雑学新聞

リック西尾
英語で1日すごしてみる

竜崎　攻
真田昌幸

鷲田小彌太
「やりたい」がわからない人たへ

和田秀樹
受験は要領

和田秀樹
わが子を東大に導く勉強法

和田秀樹
受験本番に強くなる本

渡辺和子
愛をこめて生きる